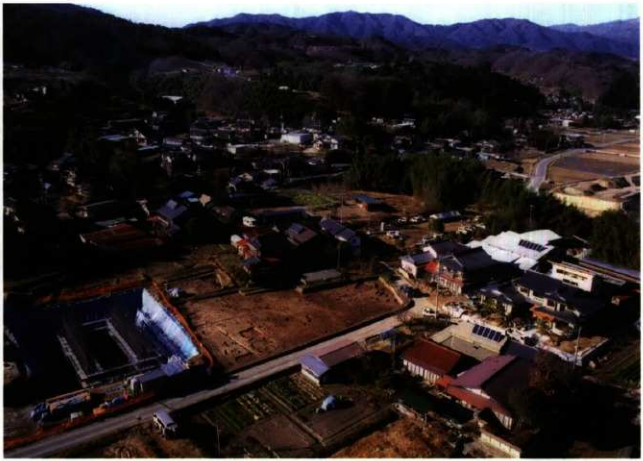
月の木遺跡（つき　き　いせき）

2009年3月
長野県飯田市教育委員会

月の木遺跡（つき　き　いせき）

2009年3月

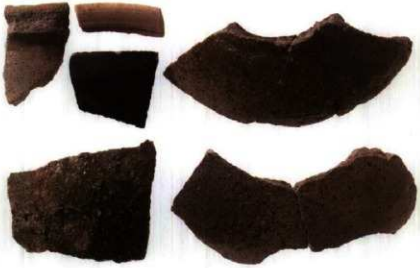
長野県飯田市教育委員会



4200地点　遠景

4195地点　遠景

遺跡内出土　輸入陶磁器



遺跡内出土　古瀬戸

SE01出土　山茶碗

序

飯田市川路地区は、飯田市街地の南に位置し、天龍川の右岸一帯に河岸段丘や沖積地が広がる地形的な特徴があります。

このような地形を利用して、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えていくことが私たちの責務であります。

川路地区は、天龍川の治水対策事業をはじめとして、近年の三遠南信道や県道バイパス工事、それに伴う急速な宅地化の進行により日に日にその姿を変えています。今回の発掘調査も県道バイパス工事に伴うものであります。この場所は月の木台地と呼ばれる所で、台地の東側では平成９・10年度に５世紀後半を中心とする月の木古墳群７基が調査されており、良好な副葬品が数多く出土しました。このような場所のため関係各機関と協議の結果、工事実施に先だって発掘調査を行い記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査では飯田下伊那地域で類例が少ない古墳時代前期の集落と中世の集落の一部が確認されました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめとして、本調査に関係された全ての方々に深く感謝を申し上げます。

平成21年３月

飯田市教育委員会
教育長　伊　澤　宏　爾

例　言

1．本書は飯田市川路地区における国補住宅市街地基盤整備工事に伴い実施された、飯田市川路地区所在の埋蔵文化財包蔵地月の木遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県飯田建設事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成18・19年度に現地調査を、19・20年度に整理作業および報告書作成作業を行った。

4．現地での調査は坂井勇雄、下平博行が担当し、整理作業は坂井勇雄が担当した。

5．発掘調査及び整理作業にあたり、図面類、遺物の注記には「TUK」の略号を、遺構には以下の記号を用いた。
竪穴住居址－SB　掘立柱建物址－ST　土坑－SK、井戸址－SE、集石－SI、不明遺構－SX、溝址－SD、周溝墓－SM

6．月の木遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、MC04－13に位置し、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュに基づいて、㈱エムツークリエーションに委託した。

7．本書の遺構記載は、住居址・掘立柱建物址・土坑・井戸址・集石・不明遺構・溝址・周溝墓の順に記載してある。

8．土層の色調・土性については、小山正忠・竹原秀男　1996『新版標準土色帳』を用いている。

9．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、坂井勇雄が行った。

10．本書は、坂井勇雄が執筆・編集し、山下誠一が校閲した。

11．現場での遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。

12．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004－1　飯田市考古資料館に保管している。

目　次

本文目次

巻頭写真
序
例言
目次
第１章　経過
　第１節　調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　調査の経過…… 1
　第３節　調査組織…… 3
第２章　遺跡の環境
　第１節　自然環境…… 5
　第２節　歴史環境…… 5
第３章　調査の概要…… 9
第４章　遺構
　第１節　縄文時代の遺構…… 13
　第２節　弥生時代の遺構…… 14
　第３節　古墳時代の遺構…… 17
　第４節　平安時代の遺構…… 22
　第５節　中世の遺構…… 23
　第６節　近世の遺構…… 31
　第７節　その他…… 31
第５章　遺物
　第１節　縄文時代の遺物…… 37
　第２節　弥生時代の遺物…… 37
　第３節　古墳時代の遺物…… 38
　第４節　平安時代の遺物…… 39
　第５節　中世・近世の遺物…… 39
第６章　まとめ
　第１節　集落の様相…… 41
　第２節　墓域としての月の木遺跡…… 44
　第３節　おわりに…… 45
報告書　抄録…… 163

表目次

表１　土坑観察表…… 47
表２　溝址観察表…… 48
表３　木製品観察表…… 48

挿図目次

挿図１　調査遺跡位置図…… 2
挿図２　基準メッシュ調査位置図…… 8
挿図３　基本層序…… 9
挿図４　調査位置及び周辺遺跡地図…… 10
挿図５　遺構分布図…… 11
挿図６　時期別遺構分布図…… 36

図版目次

図版１　SB26・47・11・15・19 …… 49
図版２　SB31・40…… 50
図版３　SB10・12・16…… 51
図版４　SB20・23・24 …… 52
図版５　SB27・28・30・34 …… 53
図版６　SB32・35～37 …… 54
図版７　SB38・39 …… 55
図版８　SB42・45・46・43 …… 56
図版９　SB44・04～09・13・14 …… 57
図版10　SB17・18・21・22・29・33 …… 58
図版11　ST18 …… 59
図版12　ST22・24・01 …… 60
図版13　ST02～05 …… 61
図版14　ST06～09 …… 62
図版15　ST10～14…… 63
図版16　ST15～17・19・21・25・26 …… 64
図版17　ST20・23・27～30 …… 65

図版18　ST31～35・37 …… 66
図版19　ST36・38～43 …… 67
図版20　SK121～130 …… 68
図版21　SK131～137・139～143 …… 69
図版22　SK144～152・154 …… 70
図版23　SK153・155・156・158～162 … 71
図版24　SK163～170 …… 72
図版25　SE01、SI02、SX02・03 …… 73
図版26　SD02～07・09・11 …… 74
図版27　SD08・10・12～14 …… 75
図版28　SD15～19 …… 76
図版29　SD20～25・28 …… 77
図版30　SD26・27・29・30・
　　32～36・39…… 78
図版31　SD31・38・40 …… 79
図版32　SD44 …… 80
図版33　SD37・41～43、SM01・02 …… 81
図版34　周辺ピット割付図 …… 82
図版35　周辺ピット図1 …… 83
図版36　周辺ピット図2 …… 84
図版37　周辺ピット図3 …… 85
図版38　周辺ピット図4 …… 86
図版39　周辺ピット図5 …… 87
図版40　周辺ピット図6 …… 88
図版41　周辺ピット図7 …… 89
図版42　周辺ピット図8 …… 90
図版43　周辺ピット図9 …… 91
図版44　周辺ピット図10 …… 92
図版45　周辺ピット図11 …… 93
図版46　周辺ピット図12 …… 94
図版47　周辺ピット図13 …… 95
図版48　周辺ピット図14 …… 96
図版49　周辺ピット図15 …… 97
図版50　周辺ピット図16 …… 98
図版51　周辺ピット図17 …… 99
図版52　周辺ピット図18 …… 100
図版53　周辺ピット図19 …… 101
図版54　周辺ピット図20 …… 102
図版55　周辺ピット図21 …… 103
図版56　周辺ピット図22 …… 104
図版57　周辺ピット図23 …… 105
図版58　周辺ピット図24 …… 106
図版59　周辺ピット図25 …… 107
図版60　周辺ピット図26 …… 108
図版61　周辺ピット図27 …… 109
図版62　周辺ピット図28 …… 110
図版63　周辺ピット図29 ……111
図版64　周辺ピット図30 …… 112
図版65　SB出土土器…… 113
図版66　SB出土土器…… 114
図版67　SB出土土器…… 115
図版68　SK・SE・SD・
　　遺構覆土出土土器 …… 116
図版69　遺構覆土・遺構外出土土器 …… 117
図版70　遺構外出土土器 …… 118
図版71　SB出土石器…… 119
図版72　SB出土石器…… 120
図版73　SB・SK出土石器…… 121
図版74　SX・SD・SM・
　　遺構外出土石器 …… 122
図版75　SE01出土木製品…… 123

写真図版

図版1　調査前風景・
　　4188地点（南側）全景 …… 125
図版2　4188地点（北側）・
　　4200地点全景 …… 126

図版３　4192地点・
4160地点（北側）全景 …… 127
図版４　4160地点（南側）・
4195地点全景 …… 128
図版５　4155地点（南側）・
4155地点全景 …… 129
図版６　SB26・47・11 …… 130
図版７　SB15・19・31 …… 131
図版８　SB40・10・16 …… 132
図版９　SB12・遺物出土状況 …… 133
図版10　SB20・23・27 …… 134
図版11　SB24・ピット内遺物出土状況 … 135
図版12　SB28・30・35 …… 136
図版13　SB32・遺物出土状況 …… 137
図版14　SB34・遺物出土状況・入口部 … 138
図版15　SB36・37・39 …… 139
図版16　SB38・SB38カマド・SB42 … 140
図版17　SB45・46・44 …… 141
図版18　SB43・SB43カマド・SB09 … 142
図版19　ST18・22・24 …… 143
図版20　ST02・13～15・23 …… 144
図版21　柱穴群（4188・4195地点） …… 145
図版22　SK …… 146
図版23　SE01・木製遺物、礫出土状況 … 147
図版24　SD44・41 …… 148
図版25　SD08・10・13 …… 149
図版26　SM01・02・DL07P1 …… 150
図版27　重機作業風景・委託基準点測量・
調査風景 …… 151
図版28　遺構外・SK156・SK158 …… 152
図版29　SB15・SD44 …… 153
図版30　遺構外（4200・4160地点） …… 154
図版31　SB12・23 …… 155
図版32　SB24 …… 156
図版33　SB32 …… 157
図版34　SB30・34・35 …… 158
図版35　SB42・45・09 …… 159
図版36　DL07P1・SB44・
遺跡内出土石器 …… 160
図版37　SE01（木製品） …… 161
図版38　SE01（木製品） …… 162

第1章　経　過

第1節　調査に至るまでの経過

平成15年6月17日付、15教文第253号にて長野県教育委員会教育長より平成16年度以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財の保護についての依頼があり、平成16年度以降に計画されている事業の照会がなされた。その結果、長野県飯田建設事務所より飯田市川路における国補住宅市街地基盤整備事業の計画が提示された。計画路線上には埋蔵文化財包蔵地　月の木遺跡が存在するため、事前に試掘調査を実施し、遺構・遺物の有無を確認することとした。

諸協議を経て、平成18年3月2日より現地での試掘調査に着手し、一部の地点で遺構・遺物の出土を確認した。翌3日までに全ての調査を終了し、試掘トレンチを埋め戻した。試掘調査終了後に再度飯田建設事務所と協議をした結果、遺構が確認された地点に関し翌年度の平成18年度に発掘調査を行い、記録保存をすることとなった。

以上の経過を経て、平成18年5月11日、飯田建設事務所長と飯田市長との間で「平成18年度　国補住宅市街地基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託」を締結した。

第2節　調査の経過

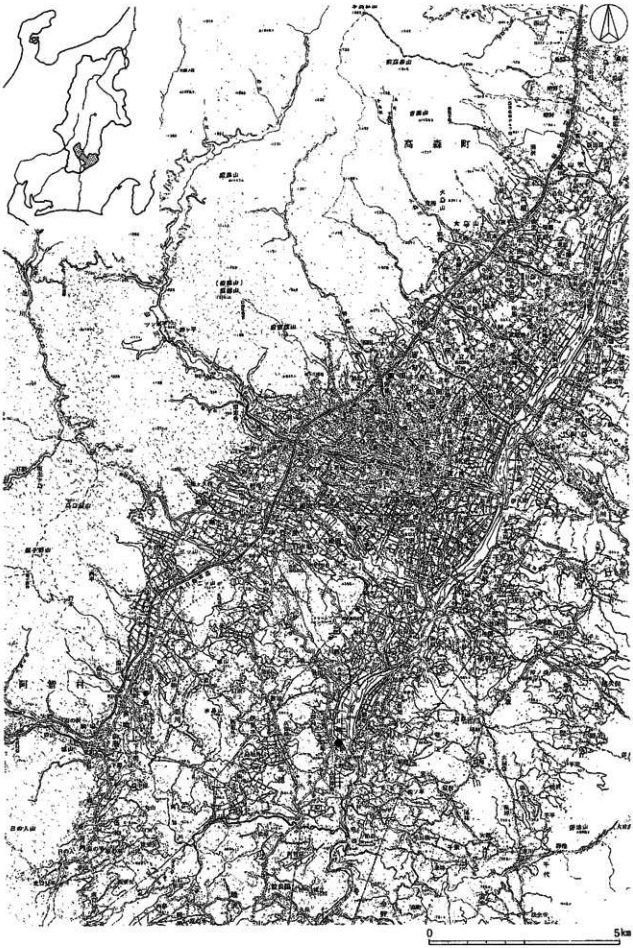
発掘調査は、地番を参照して調査区をTUK4188地点とし、排土の関係から2回に分けて調査することとした。前半の調査は5月23日より25日にかけて重機による表土剥ぎを行い、26日に委託基準点設置作業、29日より作業員を入れて発掘調査に着手した。調査では中世と思われる柱穴が多数確認され、遺構の掘り下げ、測量、写真撮影等を行い、7月7日に調査を終了した。

調査後の7月10日、北側延長部の工事予定地内における試掘調査も実施し、ほぼ全域で4188地点同様の中世の柱穴群、それ以前の竪穴住居址の存在を確認した。試掘調査終了後に再度飯田建設事務所と協議をした結果、現在の発掘調査終了後引き続いて発掘調査を実施することとなった。

後半の調査は7月25日より28日にかけて重機による表土剥ぎを行い、31日に委託基準点設置作業、8月1日より作業員を入れて発掘調査に着手した。調査では前半同様に中世の柱穴群が多数確認され、9月20日に調査を終了した。

その後、7月に試掘調査を実施した北側隣接地のTUK4200地点について9月11日付けで再度飯田建設事務所と埋蔵文化財発掘調査業務委託を締結し、9月26日より調査を開始した。調査は9月26日より10月14日にかけて重機による表土剥ぎを行い、16日に委託基準点設置作業を行った後、17日より作業員を入れて発掘調査に着手した。今調査では、これまでの調査区でみられた中世の柱穴群に加えて古墳時代と思われる竪穴住居址を多数確認した。これらの個別の遺構についての掘下げ、測量、写真撮影等を行い、12月22日に調査を終了した。これにより平成18年度の現地における調査を総て終了した。

翌19年度については市道31号線及び18年度調査区より北側の用地について発掘調査を行うこととし、3月27日、5月31日付けで飯田建設事務所と現地調査及び整理作業に関する埋蔵文化財発掘調査業務



挿図1　調査遺跡位置図

委託をそれぞれ締結した。

発掘調査は市道31号線予定地であるTUK4192地点より開始した。6月1日より2日にかけて重機による表土剥ぎを行い、5日に委託基準点設置作業を行った後、作業員を入れて発掘調査に着手した。調査では中世の土坑を確認し、この調査区での調査は8日に終了した。

引き続いてTUK4160地点の調査を実施した。この調査区も排土の関係から2回に分けて調査を行い、前半の北側地点の調査は6月6日より11日にかけて重機による表土剥ぎを行い、12日に委託基準点設置作業を行った後、13日より作業員を入れて発掘調査に着手した。調査区の半分は既存建物の基礎等により壊されていたが削平を免れた西側部分で古墳時代の竪穴住居址が確認された。調査は7月9日に終了した。後半の南側地点の調査は7月18日より21日にかけて重機による表土剥ぎを行い、24日に委託基準点設置作業を行った後、作業員を入れて発掘調査に着手した。北側同様に調査区の東側半分は既存建物の基礎等により壊されていたが削平を免れた西側部分で弥生時代の竪穴住居址が確認された。調査は8月6日に終了した。

その後、南側の隣接用地であるTUK4195地点の調査を実施した。7月31日より8月6日にかけて重機による表土剥ぎを行い、8日に委託基準点設置作業を行った後、7日より作業員を入れて発掘調査に着手した。この調査区では古墳時代の竪穴住居址を中心に最も多くの竪穴住居址遺構を確認した。そのため、調査の終盤の10月6日に市民の方々を対象にした現地見学会を開催し、70人の参加を得た。その後10月9日に調査を終了した。

その後、最終調査地点であるTUK4155地点の調査を実施した。調査は10月10日より16日にかけて重機による表土剥ぎを行い、17日に委託基準点設置作業を行った後、作業員を入れて発掘調査に着手した。この調査区は中央部分が既存建物の基礎等により壊されていたが、4200地点と隣接する南端部においては、古墳時代の竪穴住居址が密集し、北端部においては縄文時代の竪穴住居址、弥生時代の方形周溝墓等が確認された。調査は11月7日に終了し、平成18年度より継続的に実施してきた今事業に伴う月の木遺跡における現地調査を全て終了した。

整理作業については、平成19、20年度に実施した。19年度から20年度前半にかけては、出土遺物の水洗、出土木製品の保存処理作業等の基礎的整理作業を実施した。20年度後半からは、出土遺物の注記・接合・復元作業、遺物実測、第二原図の作成、トレース、版組等の作業を行い、発掘調査報告書を刊行した。

第3節　調査組織

（1）調査団

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	伊澤宏爾
調査担当者	坂井勇雄	下平博行	
調査員	馬場保之（～平成18年度）	山下誠一（平成19年度～）	
	澁谷恵美子	羽生俊郎	
現地作業員	伊藤和恵	尾曽ちぶき	木下貞子　木下義男

	小林定雄	斯波幸枝	杉山春樹	高橋セキ子	
	中島育子	仲村　信	服部光男	林　仲好	
	牧ノ内昭吉	松井明治	三浦照夫		
整理作業員	伊東裕子	金井照子	小平まなみ	関島真由美	
	竹本常子	橋千賀子	中村地香子	中平けいこ	
	中田　恵	樋本宣子	福沢育子	松本恭子	
	森藤美知子	森山律子	宮内真理子	吉川悦子	

（2）事務局

飯田市教育委員会	教育次長	中井洋一（～平成18年度）
		関島隆夫（平成19年度～）
	生涯学習課長	小林正春（～平成18年度）
	生涯学習・スポーツ課長	宇井延行（平成19年度～）
	文化財保護係長	馬場保之（～平成18年度）
		山下誠一（平成19年度～）
	文化財保護係	宮澤貴子　　遠谷恵美子
		下平博行　　坂井勇雄
		羽生俊郎

第2章　遺跡の環境

第1節　自然環境

飯田市川路地区は飯田市街地から南東へ約4㎞、天龍川の右岸に位置する。西と南は標高450～550mの低い丘陵に囲まれ、天龍峡の渓谷に阻まれて形成された天龍川の氾濫堆積による平坦面が大半を占めている。かつては県道上川路大畑線から天龍川にかけて緩やかに傾斜しており、広大な桑園地帯をなしていた。しかし、現在は昭和36年の水害をはじめ幾たびか水害を受け、その地形を留めていない。

川路地区は天龍川の浸食及び活断層に起因する段丘により3段に大別される。さらに、その段丘は北から相沢川・留々女川・南沢川・ねぎや沢川・観音沢川・大畑沢川・初沢川といった天龍川支流の小河川により細かく分断されている。一方、天龍川氾濫原から僅かに高まった下段とされるところは、北から久保田・留々女・殿村・富岡・梶垣外・井戸下が立地する。中段は現在国道151号が通過している標高400m前後の狭い段丘面である。北から花御所・今洞・御射山原・防垣外・道上が立地し、月の木・大畑へと続く。丘陵地ともいえる上段は中段面より30m前後の比高差をもって北から琴原・藤治ヶ峯・上平・襠宜屋平・初ノ免・川路大明神原・中原が立地する。

月の木地籍は低位段丘面Ⅰに比定され、古墳群が存在するJR飯田線から東側は天龍川及び支流の大畑沢川の開析により南北100m・東西200mほどの細長い舌状台地が形成されている。これは当遺跡から南側が花崗岩を基盤とする岩盤帯となっているため、天龍川の浸食を受けず、川路地区氾濫原の中で台地という形で残ったものと考えられる。台地北側は天龍川氾濫原が広がり、直下に弥生時代中期から中世にかけて存在した井戸下遺跡が所在する。今回調査を実施したJR飯田線から西側の地点は、月の木台地の中心地であり、南北に広がる台地を形成している。台地北側は東側同様に天龍川氾濫原が広がり、南側は大畑沢川の浸食によりV字状の谷となっている。地形は南西から北東側へ傾斜しており、南西端の国道151号線付近で標高398mを測る。

第2節　歴史的環境

川路地区の地形は、天龍川に面する最低位段丘面と、桐林面に相当する標高400m以上の低位段丘面に大別される。特に最低位段丘面には前方後円噴の正清寺古墳をはじめ多数の古墳があり、市内でも有数の古墳集中地帯となっている。また、隣接する上川路地区には白鳳期の瓦が出土した開善寺境内遺跡、重要文化財の四仏四獣鏡が出土した御猿堂古墳など古墳時代から奈良時代にかけての主要な遺跡が集中する地帯である。こうした遺跡を中心に時代毎の概観を行い、川路地区の歴史的変遷を追う。

（1）縄文時代

川路地区に人々が生活した痕跡を残したのは縄文時代に始まる。月の木遺跡からは、今次調査分も含めてこれまでに縄文時代前期前半の住居址が3軒確認されており、周辺に当該期の大集落が存在する可能性を示唆している。また、久米川南岸の今洞遺跡からも縄文時代前期後半の住居址が確認されてい

る。両遺跡とも、調査面積・遺跡の状態から集落の規模などは確認されていない。

縄文時代中期では低位段丘面上が中心になる。川路大明神原遺跡は川路地区の南端に位置し、周辺の調査状況から中期初頭から後葉にかけての30軒を越す集落が確認されており、拠点的な大規模集落が形成されていたと考えられる。同一段丘面で切ノ免遺跡・藤原塚遺跡でも縄文時代中期の遺物が表面採集されている。

縄文時代後期・晩期では生活の舞台としての川路は不明瞭となり、遺跡数も少なく、断片的な資料のみである。今洞遺跡からは浮線網状文の施された氷Ⅰ式土器が出土しているが、当該期の遺構等は確認されていない。全国的に縄文時代後・晩期は水場に近い低地に進出し、河川を積極的に利用していることから、不明瞭な最低位段丘面に同時期の遺跡が存在する可能性が高い。

（2）弥生時代

段丘上の東原遺跡で住居址が1軒確認されていたが集落の存在も不明瞭であった。しかし、今次調査区からおよそ1km北側の井戸下遺跡から、弥生時代中期の阿島式期の住居址・弥生時代後期の住居址が確認され、周辺の最低位段丘面上に弥生時代中期から後期の集落が多数存在する可能性を示している。

（3）古墳時代

古墳時代にはいると地区内に多くの古墳が築造される。久保田1号古墳（前方後円墳）をはじめ地区内には48基の古墳が確認されている。古墳は花御所地籍・久保田1号古墳周辺・月の木地籍に集中しており、古墳群を形成している。その立地は久保田1号古墳周辺の古墳を除き、低位段丘面上に位置している。古墳の多くは破壊され、地区内に多くの出土品が伝えられている。川路最大の古墳である正清寺古墳は、全長約60mの前方後円墳で、後円部に横穴式石室を持つと伝えられ、五鈴鏡・玉類・馬具・武具類が出土している。平成11年度の治水対策事業に伴う発掘調査では、二重周溝を有し、周溝部分が一度修復されていることが判明している。周溝内からは多数の埴輪・須恵器・土師器類が出土し、5世紀末～6世紀と推定されている。また、花御所1号古墳からは金銅装の馬具類・玉類等の豊富な出土品が知られている。また下辻古墳は全長8.8mの横穴式石室を有し、馬具類・玉類等の出土品がある。今次調査区北西側の最低位段丘面にあった殿村1号古墳からは四獣鏡・素文鏡が出土している。月の木地籍に所在する月の木古墳群は、5世紀後半を中心とする7基の円墳で構成されており、短甲、直刀、鉄鏃等の豊富な副葬品が出土している。

一方、古墳時代の集落は、治水対策事業に伴う発掘調査で、井戸下遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡・久保田遺跡で大規模な集落が確認されている。このうち井戸下遺跡（飯田市教育委員会　2001）では古墳時代中期を中心とする30軒の住居址が確認されており、天竜川を挟んで東側に位置する細新遺跡（飯田市教育委員会　1998）と集落の消長が同様の傾向を示していることが指摘されている。今後、他遺跡の報告が行われる中で、天竜川両岸における古墳時代の様相が判明すると思われる。

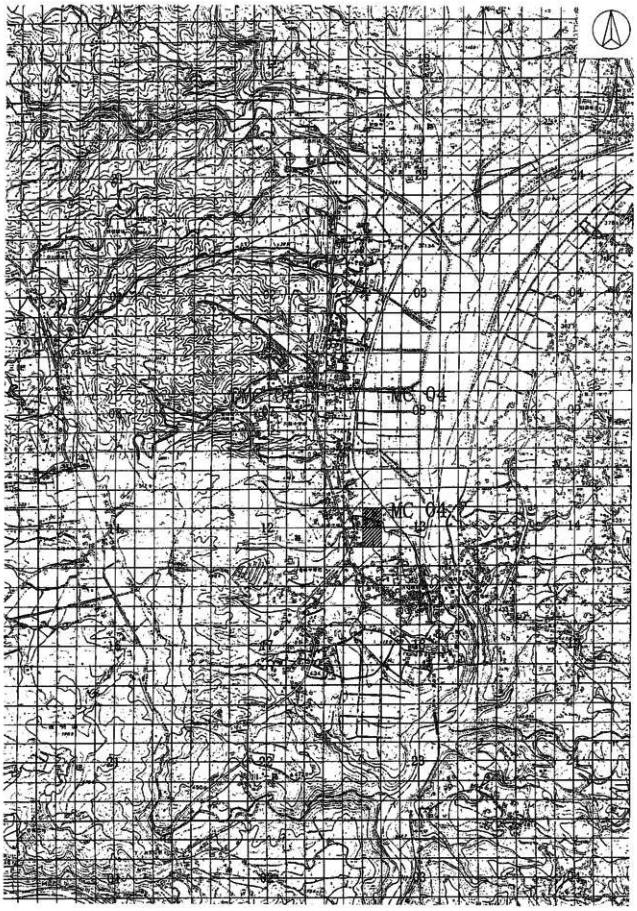
（4）奈良・平安時代

奈良・平安時代の川路地区は断片的な資料のみであったが、竜丘上川路には奈良時代と推定される布目瓦が出土した開善寺境内遺跡があり、周辺に寺院の存在を窺わせる。川路地区では、治水対策事業で

調査された留々女・辻前遺跡から平安時代の住居址が確認されている。井戸下遺跡では奈良時代～平安時代と推定される水田址・溝址が確認され、低位段丘面一帯に集落と水田が営まれていたと推定される。

(5) 中 世

川路地区が文献上に現れるのは貞和2年（1346年）の三浦和田文書中の7月19日室町幕府下知状案である。これは当時、伊賀良庄地頭であった江間氏の族人江間尼浄元が庄内の中村・河路の2郷を開禅寺（開善寺）に寄進し、それを新給人が了承した旨の記載がある。また、織田氏の信濃攻略により開善寺から持ち出された梵鐘（現高遠町桂泉院に存在）には文和4年（1355年）の銘があり、その文中に伊賀良庄上河路郷の記載がある。こうした史料から室町時代には川路地区が上河路郷・下河路郷にわかれ、伊賀良庄に含まれていたと考えられる。また、康永3年（1344年）小笠原貞宗譲状の中に伊賀良庄が記載されており、室町時代には小笠原氏が川路地区を領有していたことがわかる。その後、武田氏の伊那侵攻後、天正7年（1579年）の上諏訪造営帳に伊賀良庄内の役銭納入状況が記されており、その中に上河路郷・下河路郷等の記載が見られる。このように川路地区は伊賀良庄の一郷として文献に記されている。河路郷の詳細は不明であるが、井戸下遺跡からは14世紀代から15世紀代にかけての屋敷跡が確認されており、留々女遺跡でも同時期の掘立柱建物址群が検出されている。こうした成果から河路郷の集落の実態が判明すると思われる。集落の他に今次調査地点北西側の城山には、尾根を利用した山城が確認されている。伝承等も無く、詳細は不明な点が多いが、戦国期の山城と推定されている。



挿図２　基準メッシュ調査位置図

第3章　調査の概要

第1節　調査の概要

（1）調査地

今次調査は飯田市川路4188・4200・4192・4195・4155・4160で行った。平成18年度は4188・4200、平成19年度は4192・4195・4155・4160で調査を実施し、およそ6900㎡が調査対象となった。

（2）調査区の設定（挿図2）

調査区の設定は、世界測地系に基づく新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図により設定した。今次調査区は、MC04　13-26　18に位置する。

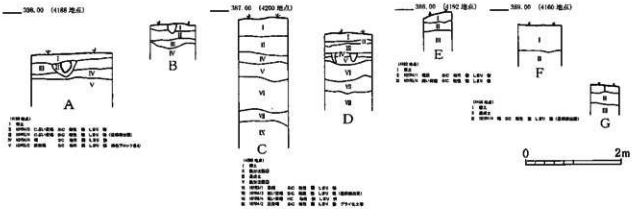
（3）基本層序（挿図3）

4188地点では、その大半が耕作による削平を受けており、直下で遺構検出面である黄褐色土となる。南端部のBセクションでは、耕作土と遺構検出面の間でにぶい黄褐色土が見られた。遺構検出面の下層では砂の互層が見られたことから、以前は天龍川へ抜ける河道が存在していた可能性も考えられる。

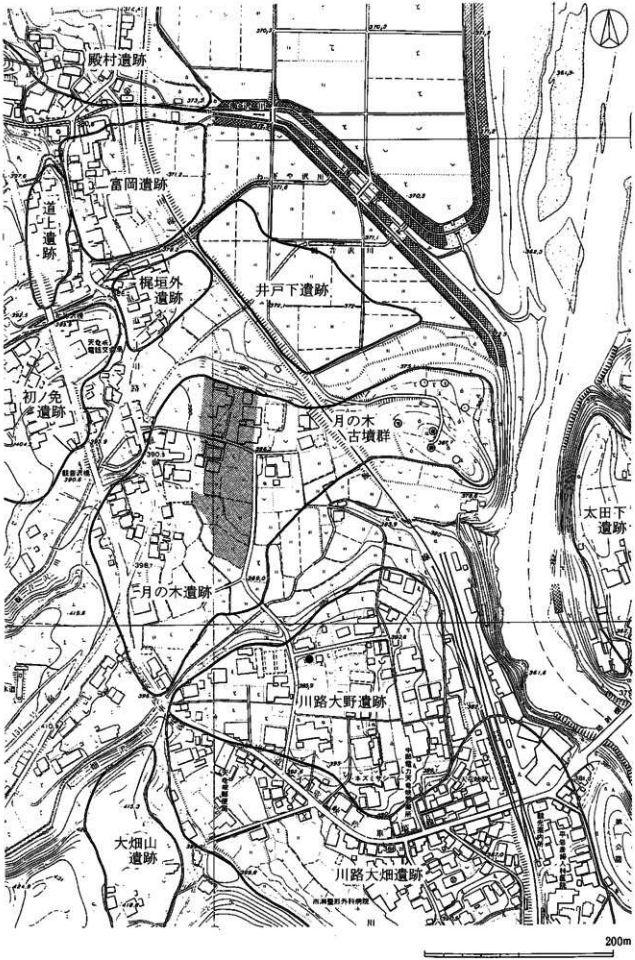
4200地点は、近代における耕作土が2時期観察され、その下層で黒褐色土、遺構検出面となる黄褐色土となる。西側地点では、遺構検出面下層でグライ化土壌が比較的厚く堆積していた。

4192地点は、水田耕土下層で褐灰土、遺構検出面である黄褐色土となる。褐灰土層中からの湧水が顕著であった。その西側部分も重機掘削作業中に湧水が見られ、発掘調査は不可能であった。

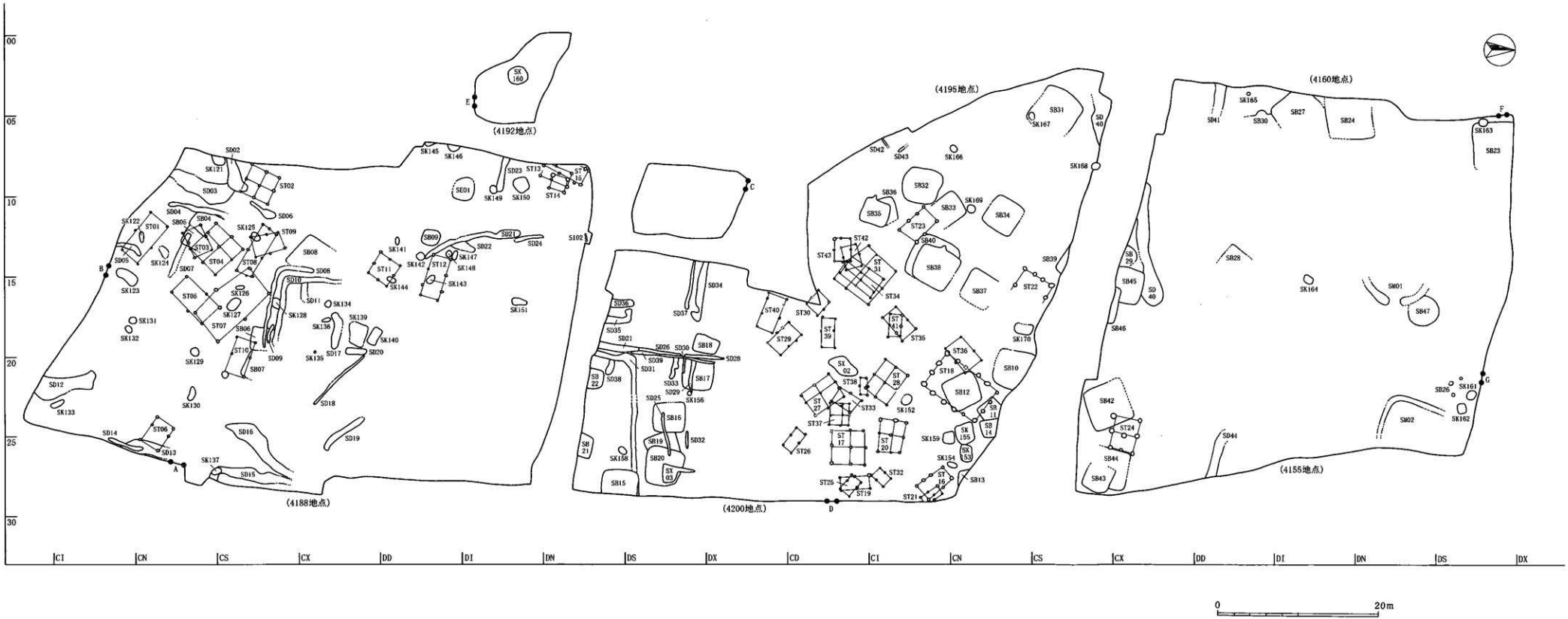
4195・4160・4155地点は、西から東へ向かって緩やかに傾斜し、北側は天龍川の氾濫原をのぞむ標高差15mの段丘崖となる地形である。近年は住宅地等であったため地形の改変が著しく、中央部付近は造成土直下で遺構検出面である黄褐色土となる。この遺構検出面も上層が大きく削平されており、遺構の残存状況は悪かった。



挿図3　基本層序



挿図4　調査位置及び周辺遺跡地図


00
05
10
15
20
25
30
CI
CN
CS
CX
DD
DI
DN
DS
DX
(4192地点)
(4188地点)
(4195地点)
(4200地点)
(4160地点)
(4155地点)
0
20m

挿図5　遺構分布図

第4章　遺構

第1節　縄文時代の遺構

（1）住居址（SB）

①SB26（遺構－図版1　写真図版6）

4160地点のDT21グリッドを中心に検出した。柱穴2基と炉址のみの検出で、平面形、主軸は不明である。炉址は直径50cmの円形を呈する地床炉である。

遺物は柱穴、炉址より黒曜石の剥片が出土している。

時期は出土遺物が少ないため断定はできないが、周辺の類似した遺構より縄文時代前期と推定される。

②SB47（遺構－図版1　遺物－図版65・71　写真図版6）

4155地点のDR17グリッドを中心に検出した。SM01に切られ、南側の一部が攪乱により壊されていた。平面形は直径約3.8mの円形を呈し、主軸はN153°Wを示す。壁は緩やかな立ち上がりで、検出面からの深さはおよそ28cm程度である。周溝は北側から東側にかけて一部確認されており、東側周溝と壁面の位置関係から、東側への拡張が行われたと考えられる。柱穴は8基（P1～8）確認され、2基ずつ隣接して見られることから、拡張に伴い建て替えられている可能性がある。床面西側の壁面付近では作業台と思われる扁平な台石が出土している。炉址は中央やや南よりに作られており、直径58cmの円形を呈する地床炉である。

遺物は床面を中心に土器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物より縄文時代前期前半である。

（2）土坑（SK）

①SK122（遺構－図版20　遺物－図版73）

4188地点のCN12グリッドを中心に検出した。平面形は1.2×0.5mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ18cmである。

遺物は覆土中より打製石斧が出土している。時期は縄文時代中期と推定される。

②SK127（遺構－図版20　遺物－図版73　写真図版22）

4188地点のCS16グリッドを中心に検出した。平面形は1.7×1.2mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ22cmである。

遺物は覆土中より小破片の土器、打製石斧、横刃形石器が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

③SK128（遺構－図版20　遺物－図版73　写真図版22）

4188地点のCV16グリッドを中心に検出した。SD08・10に切られる。平面形は（0.9）×1.1mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ22cmである。

遺物は覆土中より小破片の土器、打製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

④SK136（遺構－図版21　遺物－図版73）

4188地点のCY17グリッドを中心に検出した。平面形は1.1×0.4mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ12cmである。

遺物は覆土中より小破片の土器、打製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

⑤SK137（遺構－図版21　遺物－図版73　写真図版22）

4188地点のCS27グリッドを中心に検出した。SD15に切られる。平面形は1.4×0.9mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ36cmである。

遺物は覆土中より小破片の土器、磨製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

⑥SK144（遺構－図版22　遺物－図版73）

4188地点のDD15グリッドを中心に検出した。平面形は1.2×0.5mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ10cmである。

遺物は覆土中より打製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

⑦SK152（遺構－図版22　遺物－図版73）

4200地点のCK22グリッドを中心に検出した。平面形は1.4×1.2mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ19cmである。

遺物は覆土中より打製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

⑧SK161（遺構－図版23　遺物－図版73）

4160地点のDU22グリッドを中心に検出した。平面形は1.1×0.9mの不整形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ11cmである。

遺物は覆土中より打製石斧が出土しており、時期は縄文時代中期と推定される。

第2節　弥生時代の遺構

（1）住居址（SB）

①SB11（遺構－図版1　遺物－図版71　写真図版6）

4200地点のCP23グリッドを中心に検出した。SB14に切られる。北側の一部が調査区外となり、全体の三分の二を調査した。平面形は（2.6）×2.7mの方形を呈し、主軸はN50°W である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ３４cmである。床面は全体的に堅固である。南壁際で見られるピットが柱穴の可能性がある。

遺物は弥生時代中期の土器片、打製石斧、打製石包丁、混入と思われる「かわらけ」、近世陶磁器片等が出土している。

時期は切り合い関係より弥生時代と思われる。

②SB15（遺構－図版1　遺物－図版65　写真図版7）

4200地点のCR27グリッドを中心に検出した。SD31に切られる。東側の一部が調査区外となるため全体の二分の一を調査した。4.4×（3.2）mの隅丸方形を呈し、主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ20cmである。西側の壁際で周溝が一部見られる。床面は、東側で一部堅固な貼床が見られた。炉址の有無は不明であるが、床面上の東南部に焼土が見られる場所がある。柱穴は2基（P1～2）確認されている。

遺物は壺、甕等が出土している。

時期は出土遺物より弥生時代後期終末と推定される。

③SB19（遺構－図版1　写真図版7）

4200地点のDU25グリッドを中心に検出した。SB16、20に切られる。平面形は3.9×（2.7）mの方形を呈し、主軸はN162°Eである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ10cmである。床面は全体的に軟弱である。炉址、柱穴等は不明であるが、北壁際中央のピットは入口部の可能性が考えられる。

遺物は覆土を中心に器台の一部、土器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物より弥生時代後期終末から古墳時代前期と推定される。

④SB31（遺構－図版2　遺物－図版65・71　写真図版7）

4195地点のCT04グリッドを中心に検出した。攪乱の下層より確認されたため覆土のほとんどが削平されており、遺構の東側の一部が攪乱により壊されていた。南東隅でSK167に切られる。平面形は5.5×（5.2）mの方形を呈し、主軸はN140°Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ15cmである。周溝は確認された範囲では全周していた。炉址は中央部の南西寄りにあり、直径64cmの楕円形を呈する地床炉である。P1は柱穴と思われる。

遺物は覆土中より甕（底部）、抉入打製石包丁が出土している。

時期は出土遺物より弥生時代後期と推定される。

⑤SB40（遺構－図版2　遺物－図版65・72　写真図版8）

4195地点のCL14グリッドを中心に検出した。SB38の床面下層にあり、平面形5.5×5.7mの隅丸方形を呈し、主軸はN26°Eである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ38cmである。床面は部分的に堅固で、周溝は東壁を除いてほぼ全周していた。炉址と思われる焼土塊が中央部の北寄りで見られた。柱穴は4基（P1～4）確認されており、南壁の西隅には貯蔵穴と思われるピット（P5）が見られる。

遺物は甕、高坏、抉入打製石包丁等が出土している。

時期は出土遺物より弥生時代後期終末から古墳時代前期と推定される。

（2）土坑（SK）

①SK156（遺構－図版23　遺物－図版68　写真図版22）

4200地点のDW23グリッドを中心に検出した。平面形は0.6×0.5mの円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ26cmである。

遺物は底部より阿島式土器の甕が出土しており、時期は出土遺物より弥生時代中期と推定される。

②SK158（遺構－図版23　遺物－図版68　写真図版22）

4200地点のDS26グリッドを中心に検出した。平面形は1.1×0.7mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ10cmである。

遺物は底部より阿島式土器の壺（口縁部）が出土しており、時期は出土遺物より弥生時代中期と推定される。

（3）周溝墓（SM）

①SM01（遺構－図版33　遺物－図版69　写真図版26）

4155地点のDP16グリッドを中心に検出した。SB47を切る。西側の大部分が既存建物による削平をうけており、東側の陸橋部分を含む周溝の一部を確認した。残存する周溝の形状より円形になる可能性が推定される。主軸はN90°Wである。陸橋の南側周溝は、幅0.7～1m、深50cmで、断面はU字形を呈す。北側はそのほとんどを攪乱、グリッドピットによって壊されていた。内部主体は不明である。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は明確に断定できないが、埋土が周辺に位置するSD41、44のものと類似しており、弥生時代後期終末から古墳時代前期と推定される。

②SM02（遺構－図版33　遺物－図版74　写真図版26）

4160地点のDQ24グリッドを中心に検出した。北側、東側が調査区外のため全体の四分の一を調査した。周溝は確認された範囲で、南北方向に6.5m、幅70cm、深さ26cm、東西方向に5.3m、幅64cm、深さ90cmを測り、断面はU字状を呈する方形周溝墓である。内部主体は不明である。

遺物は周溝より土器の小破片が少量、打製石斧等が出土している。

時期は弥生時代後期と推定される。

（4）溝址（SD）

①SD41（遺構－図版33　遺物－図版68・69　写真図版24）

4160地点のDE03グリッドを中心に検出した。西側は調査区外となり、東側は地形が削平されていたためその一部を確認した。確認された範囲での規模は長さ3.5m、幅1.5m、深さ30cmを測り、断面形は台形を呈する。全体の形状は不明であるが、埋土がSM01、SD44のものと類似しており、周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

遺物は覆土上層の黒褐色土中より混入と思われる弥生時代中期の土器片等が出土している。

時期は明確に断定できないが、弥生時代後期終末から古墳時代前期と推定される。

②SD44（遺構－図版32　遺物－図版68・74　写真図版24）

4155地点のDE26グリッドを中心に検出した。東側は調査区外となり、西側は既存建物によって壊されていたためその一部を確認した。確認された範囲での規模は長さ6.0m、最大幅2.8m、深さ50cmを測り、断面形は台形を呈する。全体の形状は不明であるが、埋土がSM01、SD41のものと類似しており、周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

遺物は覆土の黒色土中より礫と共に甕、高杯、器台、打製石斧等が出土している。

時期は出土遺物より弥生時代後期終末から古墳時代前期と推定される。

第3節　古墳時代の遺構

（1）住居址（SB）

①SB10（遺構－図版3　遺物－図版65・68・71　写真図版8）

4195地点のCQ20グリッドを中心に検出した。南西隅の一部が木の伐根により壊され、北側の一部が調査区外となるため全体の四分の三を調査した。平面形は（3.8）×4.8mの方形を呈し、主軸はN78°Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ18cmである。周溝は確認された範囲では全周していた。床面は比較的堅固である。炉は中央西寄りにあり、直径52cmの楕円形を呈する地床炉である。柱穴は4基（P1～4）確認されており、東壁隅のピット（P5）は貯蔵穴と考えられる。

遺物は台付甕の台部、器台、混入と思われる「かわらけ」等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

②SB12（遺構－図版3　遺物－図版65・71　写真図版9・31）

4200地点のCN22グリッドを中心に検出した。ST18を切る。平面形は4.1×3.9mの方形を呈し、主軸はN22°Wを示す。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ29cmである。周溝はほぼ全周していたが、北西隅が一部不明確である。床面は部分的に堅固な場所がある。炉の有無は不明であるが、床面上の数ヶ所に焼土が見られる。柱穴は4基（P1～4）確認されている。

遺物は多く、床面上より編物石、壺、台付甕の台部等が出土しており、その他覆土下層より甕、小型丸底、鉢、ミニチュア土器等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

③SB16（遺構－図版3　遺物－図版71　写真図版8）

4200地点のDV24グリッドを中心に検出した。SB19を切り、SD25に切られる。平面形は3.8×3.6mの方形を呈し、主軸はN95°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ28cmである。北西隅と南東隅の壁際で周溝が一部見られる。床面は全体的に堅固である。カマドは西壁中央に構築された粘土カマドであるが、壊されていた。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物が少ないため明確に断定できないが、古墳時代と推定される。

④SB20（遺構－図版4　遺物－図版65・68・72　写真図版10）

4200地点のDU26グリッドを中心に検出した。SB19を切り、SX03、SD25に切られる。平面形は4.8×4.6mの隅丸方形を呈し、主軸は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ17cmである。床面は全体的に軟弱である。炉址の有無は不明である。柱穴と思われるピットが3基（P1～3）確認されている。

遺物は土器の小破片が多く、甕、小型丸底等が出土している。

時期は出土遺物が少ないため明確に断定できないが、古墳時代中期と推定される。

⑤SB23（遺構－図版4　遺物－図版65・68・72　写真図版10・31）

4160地点のDV06グリッドを中心に検出した。SK163に切られる。北側の一部が調査区外となり、東側の一部も削平されていたため、全体の三分の二を調査した。平面形は（5.9）×（5.0）mの方形を呈し、主軸は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ20cmである。床面は全体的に軟弱である。周溝は西壁と南壁に沿って見られることから、全周していたと思われる。床面上には焼土、炭化物が多く見られたが、炉、カマドの有無は不明である。柱穴は3基（P2・P5・P6）確認されており、P4は貯蔵穴と考えられる。

遺物はP1付近より出土した甕等がある。

時期は出土遺物より古墳時代中期と推定される。

⑥SB24（遺構－図版4　遺物－図版66・69・72　写真図版11・32）

4160地点のDN05グリッドを中心に検出した。西側の一部が調査区外となり、東側の一部も削平されていたため、全体の三分の二を調査した。平面形は（4.8）×5.6mの方形を呈し、主軸はN80°Eである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ32cmである。床面は全体的に軟弱である。周溝は北壁と南壁に沿って見られることから、全周していたと思われる。床面上には焼土、炭化物が多く見られた。カマドは東壁中央に構築されていた粘土カマドと思われるが、削平されていたため床面上で粘土痕及び火床のみ確認した。柱穴は4基（P1・P10・P8・P7）確認されている。P2は貯蔵穴と考えられる。

遺物は貯蔵穴より一括して高坏、坏が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代中期と推定される。

⑦SB27（遺構－図版5　遺物－図版66・69・72　写真図版10）

4160地点のDJ04グリッドを中心に検出した。西側の一部が調査区外となり、東側、北側の一部も削平されていたため、全体の三分の一を調査した。平面形は（5.2）×5.4mの方形を呈し、主軸はN36°Wである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ23cmである。床面は全体的に軟弱である。周溝は西壁と北壁に部分的に見られた。床面上には焼土が見られる場所があるが、炉址は不明である。南西隅付近には、長さ2.2m、高さ約4cmほどの土手状の施設が見られ、入口部の可能性が考えられる。柱穴と思われるピットは3基（P1～3）確認されている。

遺物は甕、台付甕（台部）と混入と思われる弥生時代中期の土器片の二時期のものが出土しており、

北側の調査区外に別の遺構が存在する可能性がある。

時期は出土遺物より古墳時代前期から中期と推定される。

⑧SB28（遺構－図版5　遺物－図版66・69・72　写真図版12）

4160地点のDF13グリッドを中心に検出した。そのほとんどが攪乱、削平により壊されており、全体の四分の一を調査した。平面形は（2.3）×（3.8）mの方形を呈し、主軸は不明である。僅かに見られる壁は垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ8cmである。床面は全体的に軟弱である。柱穴は2基（P1～2）確認されている。

遺物は甕、台付甕の台部が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

⑨SB30（遺構－図版5　遺物－図版66　写真図版12・34）

4160地点のDH05グリッドを中心に検出した。そのほとんどが削平により壊されており、カマドのみ確認した。カマドは粘土カマドで、壊されていた。

遺物はカマドより長胴甕が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代後期と推定される。

⑩SB32（遺構－図版6　遺物－図版66・72　写真図版13・33）

4195地点のCL09グリッドを中心に検出した。平面形は4.6×4.4mの隅丸方形を呈し、主軸はN80°Wである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ26cmである。床面は全体的に堅固である。床面上には全面に炭化木材、小礫が見られた。炉址は中央部の西よりにあり、直径40cmの楕円形を呈する地床炉である。柱穴は4基（P1～4）確認されており、直径は16～20cmで比較的小さい。また、東壁中央部に入口部（P5）、その南側には貯蔵穴（P6）と考えられるピットがある。

遺物は多く、床面より小型壺、甕、高坏等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

⑪SB34（遺構－図版5　遺物－図版66・72　写真図版14・34）

4195地点のCQ11グリッドを中心に検出した。平面形は4.1×4.3mの方形を呈し、主軸はN58°Wである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ46cmである。床面は全体的に堅固である。周溝は全周している。柱穴は4基（P1～4）確認されており、直径は16～20cmで比較的小さい。明確に炉址と言えるものはないが、西壁際の南側と中央部南寄りの柱穴P2・P3の中間地点に焼土がまとまって見られる。また、東壁南側に造られたL字状の土手状施設が入口部と推定される。

遺物は中央部の覆土下層に集中しており、甕、台付甕の台部、器台等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代前期と推定される。

⑫SB35（遺構－図版６　遺物－図版67・72　写真図版12・34）

4160地点のCH11グリッドを中心に検出した。SB36を切る。平面形は3.1×3.4mの方形を呈し、主軸はN70°Wである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ20cmである。床面全体的に堅固である。周溝はほぼ全周していた。カマドは西壁の南隅に構築されてあり、煙道と火床のみ確認した。柱穴は不明で、東壁中央部付近で入口部（Ｐ１）と思われるピットを確認した。

遺物はカマド付近より出土しており、甕、長胴甕、坏等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代後期と推定される。

⑬SB36（遺構－図版６　遺物－図版72　写真図版15）

4160地点のCI10グリッドを中心に検出した。SB35に切られる。東側が削平され、そのほとんどをSB35に壊されているため平面形、主軸は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ12cmである。床面は全体的に軟弱で、北壁際で周溝が一部見られる。炉、柱穴等の住居内施設は不明である。

遺物は土師器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物が少ないため断定できないが、古墳時代と推定される。

⑭SB37（遺構－図版６　遺物－図版67　写真図版15）

4195地点のCO15グリッドを中心に検出した。北東側の一部を攪乱で、南東側の一部を削平で壊されていた。平面形は（3.8）×（4.2）mの方形を呈し、主軸はN34°Eである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ19cmである。床面は部分的に堅固である。炉は中央部の北寄りにあり、直径76cmの楕円形を呈する地床炉である。柱穴は３基（Ｐ１～３）確認されており、直径は20～30cmで比較的小さい。また、南側には貯蔵穴と思われるピット（Ｐ４）が見られる。

遺物は台付甕の一部と土師器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物が少ないため断定できないが、古墳時代前期から中期と推定される。

⑮SB38（遺構－図版７　遺物－図版67・72　写真図版16）

4195地点のCL15グリッドを中心に検出した。SB40を切る。平面形は4.8×5.2mの方形を呈し、主軸はN61°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ39cmである。床面は全体的に堅固である。周溝は西壁以外ほぼ全周していた。カマドは西壁中央に構築されている粘土カマドで、煙道も見られる。柱穴は４基（Ｐ１～４）確認されており、カマドの南側に貯蔵穴と思われるピット（Ｐ５）が見られる。

遺物は、カマド付近より出土しており、甕、坏、高坏、須恵器片等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代中期と推定される。

⑯SB39（遺構－図版７　写真図版１５）

4195地点のCU13グリッドを中心に検出した。ほとんどが調査区外にあり、平面形・主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ32cmである。床面は全体的に堅固で

ある。周溝は、調査した部分について全周していた。床面上ではピットが確認されているが、炉址・柱穴等は不明である。

遺物は土師器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物が少ないため断定できないが、古墳時代と推定される。

⑰SB42（遺構－図版8　遺物－図版67・73　写真図版16・35）

4155地点のCW23グリッドを中心に検出した。西壁及び北壁の一部が攪乱により壊されていた。平面形は5.2×5.2mの方形を呈し、主軸はN22°Wである。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ19cmである。床面は部分的に堅固である。周溝は全周していた。炉は中央部の北寄りにあり、直径60cmの楕円形を呈する地床炉である。柱穴は4基（P1～4）確認されており、直径は32～58cmである。また、西南隅には貯蔵穴と思われるピット（P5）が見られる。なお、南壁、東壁より長さ1.2～1.4m、幅30cmほどの溝状の掘り込みが見られる。

遺物は床面上より甕、高坏等が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代中期と推定される。

⑱SB45（遺構－図版8　遺物－図版67・73　写真図版17・35）

4155地点のCY15グリッドを中心に検出した。SB46に切られる。東側が削平され、南側が調査区外となり、全体の三分の二を調査した。平面形は4.3×（3.5）mの方形を呈し、主軸はN76°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ21cmである。床面は全体的に堅固である。西壁の一部で周溝が見られる。炉は中央部の西寄りにあり、直径34cmの楕円形を呈する地床炉である。柱穴は4基（P1～4）確認されており、それぞれ直径22～40cmである。

遺物は床面上より高坏が出土している。

時期は出土遺物が少ないため断定はできないが、古墳時代中期と推定される。

⑲SB46（遺構－図版8　写真図版17）

4155地点のCX17グリッドを中心に検出した。SB45を切る。南側が調査区外となり、全体の三分の一を調査した。平面形は4.6×（0.9）mの方形を呈し、主軸は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ7cmである。床面は全体的に堅固である。確認された範囲で周溝が全周していた。炉、柱穴等は不明である。

遺物は土師器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物が少ないため断定できないが、古墳時代と推定される。

（2）建物址（ST）

①ST18（遺構－図版11　写真図版19）

4200地点のCN21グリッドを中心に検出した。SB12に切られる。規模は桁行5間（約7.8m）×梁行3間（約4.7m）の長方形を呈し、棟方向はN35°Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.5～1.7m、梁行で1.4～1.7mを測る。柱穴は比較的大型で、径36～72cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。

時期は柱穴の形状及び埋土の違いにより古墳時代と推定される。

②ST22（遺構－図版12　写真図版19）

4195地点のCR15グリッドを中心に検出した。半分は撹乱等により削平されていた。確認された範囲での規模は桁行３間（約４m）×梁行１間（約1.7m）の長方形を呈し、棟方向はN32°Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.3m、梁行で1.7～2.4mを測る。柱穴は比較的大型で、径44～56cmを測り、楕円形を呈す。柱穴の中には大型の礫が見られるものもある。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。

時期は柱穴の形状及び埋土の違いにより古墳時代と推定される。

③ST24（遺構－図版12　写真図版19）

4155地点のCX25グリッドを中心に検出した。SB42・44に切られる。規模は桁行２間（約3.2m）×梁行１間（約2.3m）の長方形を呈し、西側桁方向に関連遺構と思われる一対の柱穴が見られる。棟方向はN11°Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.3～1.6m、梁行で2.1～2.3mを測る。柱穴は比較的大型で、径44～68cmを測り、楕円形を呈す。柱穴の中には柱痕が見られるものもある。西側桁方向の柱穴は、柱間3.3mで、柱穴は径48～60cmを測る。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。

時期は柱穴の形状及び埋土の違い、切り合い関係より古墳時代と推定される。

（３）土坑（SK）

①SK168（遺構－図版24　遺物－図版68　写真図版22）

4195地点のCW08グリッドを中心に検出した。平面形は1.0×0.9mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ16cmである。土坑内には一辺が50～60cmの四角形状の扁平な石が置かれていた。

遺物は石の底部より甕、ミニチュア土器が出土している。

時期は出土遺物より古墳時代と推定される。

第４節　平安時代の遺構

①SB43（遺構－図版８　遺物－図版67　写真図版18）

4155地点のCW27グリッドを中心に検出した。SB44を切る。西側の一部は撹乱により壊されており、全体の三分の二を調査した。平面形は3.4×（3.2）mの方形を呈し、主軸はN160°Wである。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ６cmである。床面は全体的に堅固である。周溝は全周していた。カマドは南壁中央に構築されている粘土カマドであるが、袖部は壊されていた。東側袖部の心材と思われる石が確認された。柱穴は３基（Ｐ１～Ｐ３）確認されている。

遺物はカマド付近より出土しており、長胴甕、灰釉陶器、軟質須恵器等が出土している。

時期は出土遺物より9世紀後半と推定される。

②SB44（遺構－図版9　遺物－図版67・68　写真図版17・36）

4155地点のCX27グリッドを中心に検出した。ST24を切り、SB43に切られる。その大部分を撹乱により壊されており、全体の三分の一を調査した。平面形は5×（1.9）mの方形を呈し、主軸はN81°Wである。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ5cmである。床面は全体的に堅固である。床面上には炭化物が広い範囲で見られ、焼却家屋と思われる。周溝は北壁隅で一部確認した。カマドは西壁中央に構築されていたが、壊されており詳細は不明である。柱穴は2本（P1～2）確認されている。カマド南側には、貯蔵穴と思われるピット（P3）が見られる。

遺物はカマド南側のピットより出土しており、長胴甕、須恵器片が出土している。

時期は出土遺物より9世紀代と推定される。

第5節　中世の遺構

（1）竪穴状遺構（SB）

①SB09（遺構－図版9　遺物－図版73　写真図版18・35）

4188地点のDG12グリッドを中心に検出した。平面形は2.2×1.9mの不整形を呈し、主軸は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ35cmである。柱穴等の住居内施設は不明である。

遺物は「かわらけ」片、混入と思われる須恵器片、石製紡錘車が出土している。

時期は13世紀代と推定される。

（2）建物址（ST）

①ST01（遺構－図版12）

4188地点のCO11グリッドを中心に検出した。規模は桁行2間（約5.8m）×梁行1間（約2.7m）の長方形を呈し、棟方向はN51°Wを指向する。柱間寸法は桁行で2.9～3.0m、梁行で2.5～2.7mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

②ST02（遺構－図版13　写真図版20）

4188地点のCV08グリッドを中心に検出した。規模は桁行2間（約3.5m）×梁行2間（約3.7m）の正方形を呈する総柱建物である。西側が調査区外となり、規模が拡大する可能性もある。棟方向はN64°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.7～1.8m、梁行で1.7～2.0mを測る。柱穴は径32～36cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

③ST03（遺構－図版13）

4188地点のCQ12グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.5m）×梁行１間（約2.4m）の長方形を呈し、棟方向はN115°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.5～2.0m、梁行で2.4mを測る。柱穴は径24～36cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

④ST04（遺構－図版13）

4188地点のCR13グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約4.7m）×梁行２間（約4.7m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN42°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.6～3.1m、梁行で2.2～2.6mを測る。柱穴は径20～32cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礫が見られるものもある。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑤ST05（遺構－図版13）

4188地点のCQ16グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約5.5m）×梁行１間（約2.9m）の長方形を呈し、棟方向はN46°Eを指向する。柱間寸法は桁行で2.3～3.1m、梁行で2.7～2.9mを測る。柱穴は径24～48cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑥ST06（遺構－図版14）

4188地点のCN25グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.6m）×梁行１間（約2.6m）の長方形を呈し、棟方向はN53°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～2.4m、梁行で2.4～2.6mを測る。柱穴は径28～40cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礫が見られるものもある。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑦ST07（遺構－図版14）

4188地点のCU15グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約8.8m）×梁行１間（約4.6m）の長方形を呈し、比較的大型である。棟方向はN40°Wを指向する。柱間寸法は桁行で3.8～5.0m、梁行で4.0～4.6mを測る。柱穴は径24～36cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑧ST08（遺構－図版14）

4188地点のCU13グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約6.6m）×梁行２間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN61°Wを指向する。柱間寸法は桁行で3.0～3.7m、梁行0.7～1.3mを測る。柱穴は径24～40cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑨ST09（遺構－図版14）

4188地点のCV13グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.6m）×梁行１間（約2.6m）の長方形を呈し、棟方向はN12°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.4～2.0m、梁行2.4～2.6mを測る。柱穴は径12～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑩ST10（遺構－図版15）

4188地点のCS21グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約5.0m）×梁行１間（約2.4m）の長方形を呈し、棟方向はN70°Wを指向する。柱間寸法は桁行で2.1～2.8m、梁行2.4mを測る。柱穴は径24～88cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑪ST11（遺構－図版15）

4188地点のDD14グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.0m）×梁行２間（約2.9m）の正方形を呈し、棟方向はN53°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.4～1.5m、梁行1.4～1.5mを測る。柱穴は径24～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑫ST12（遺構－図版15）

4188地点のDD14グリッドを中心に検出した。規模は桁行３間（約5.4m）×梁行１間（約2.2m）の長方形を呈し、棟方向はN74°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.3～1.9m、梁行2.1～2.2mを測る。柱穴は径12～40cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礫が見られるものもある。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑬ST13（遺構－図版15　写真図版20）

4188地点のDN08グリッドを中心に検出した。西側の一部が調査区外となる。規模は桁行２間（約3.7m）×梁行１間（約1.8m）の長方形を呈し、棟方向はN23°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.5～2.1m、梁行1.8mを測る。柱穴は径20～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑭ST14（遺構－図版15　写真図版20）

4188地点のDO09グリッドを中心に検出した。西側の一部が調査区外となるため規模は広がる可能性がある。確認された範囲での規模は桁行１間（約1.6m）×梁行１間（約1.7m）の長方形を呈し、棟方向はN71°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.6～1.7m、梁行2.0mを測る。柱穴は径36～56cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑮ST15（遺構－図版16　写真図版20）

4188地点のDO08グリッドを中心に検出した。西側の一部が調査区外となるため規模は広がる可能性がある。確認された範囲での規模は桁行３間（約5.1m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN27°Eを指向する。柱間寸法は桁行で0.8～2.2m、梁行2.0mを測る。柱穴は径24～44cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑯ST16（遺構－図版16）

4200地点のCM27グリッドを中心に検出した。規模は桁行３間（約3.9m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN41°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.1～1.6m、梁行1.8～2.0mを測る。柱穴は径28～48cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑰ST17（遺構－図版16）

4200地点のCG25グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約4.3m）×梁行２間（約4.2m）の正方形を呈する総柱建物である。棟方向はN91°Wを指向する。柱間寸法は桁行で2.1～2.2m、梁行1.7～2.4mを測る。柱穴は径28～40cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑱ST19（遺構－図版16）

4200地点のCH27グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.6m）×梁行１間（約1.7m）の長方形を呈し、棟方向はN5°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.8～1.9m、梁行1.7mを測る。柱穴は径20～36cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑲ST20（遺構－図版17）

4200地点のCJ25グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約4.0m）×梁行２間（約3.2m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN82°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.7～2.3m、梁行1.1～1.9mを測る。柱穴は径24～44cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑳ST21（遺構－図版16）

4200地点のCL27グリッドを中心に検出した。東側の一部が調査区外となる。規模は桁行２間（約2.5m）×梁行１間（約0.9m）の長方形を呈し、棟方向はN36°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～1.4m、梁行0.9mを測る。柱穴は径16～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉑ST23（遺構－図版17　写真図版20）

4195地点のCL11グリッドを中心に検出した。規模は桁行３間（約4.2m）×梁行１間（約2.6m）の長方形を呈し、棟方向はN47°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.1～1.3m、梁行2.3～2.6mを測る。柱穴は径36～44cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉒ST25（遺構－図版16）

4200地点のCH28グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.3m）×梁行１間（約1.6m）の長方形を呈し、棟方向はN49°Wを指向する。柱間寸法は桁行で0.9～1.6m、梁行1.3～1.6mを測る。柱穴は径20～36cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉓ST26（遺構－図版16）

4200地点のCE24グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.8m）×梁行１間（約1.4m）の長方形を呈し、棟方向はN49°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～1.6m、梁行1.3～1.4mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、楕円形を呈す。一部の柱穴に礎が見られるものもある。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉔ST27（遺構－図版17）

4200地点のCF22グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約4.4m）×梁行２間（約3.4m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN35°Wを指向する。柱間寸法は桁行で2.2～2.4m、梁行1.0～2.0mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉕ST28（遺構－図版17）

4200地点のCJ21グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約4.3m）×梁行２間（約3.3m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN55°Wを指向する。柱間寸法は桁行で2.0～2.3m、梁行1.6～1.7mを測る。柱穴は径16～36cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉖ST29（遺構－図版17）

4200地点のCD18グリッドを中心に検出した。規模は桁行３間（約3.4m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN45°Wを指向する。柱間寸法は桁行で0.8～1.8m、梁行2.0mを測る。柱穴は径20cmを測り、円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉗ST30（遺構－図版17）

4195地点のCF16グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.3m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN49°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～1.3m、梁行1.9～2.0mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉘ST31（遺構－図版18）

4195地点のCI14グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約6.0m）×梁行２間（約5.3m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN48°Wを指向する。柱間寸法は桁行で2.6～3.4m、梁行1.5～3.4mを測る。柱穴は径16～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉙ST32（遺構－図版18）

4200地点のCJ27グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.0m）×梁行１間（約1.4m）の長方形を呈し、棟方向はN44°Eを指向する。柱間寸法は桁行で0.8～1.2m、梁行1.3～1.4mを測る。柱穴は径20～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉚ST33（遺構－図版18）

4200地点のCG22グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.0m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN34°Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.3～1.6m、梁行2.0mを測る。柱穴は径24～36cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉛ST34（遺構－図版18）

4195地点のCG15グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約5.0m）×梁行２間（約2.0m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN40°Eを指向する。柱間寸法は桁行で2.2～2.5m、梁行0.8～2.0mを測る。柱穴は径16～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉜ST35（遺構－図版18）

4195地点のCK18グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.7m）×梁行１間（約2.3m）の長方形を呈し、棟方向はN47°Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～2.6m、梁行2.1～2.3mを測る。柱穴は径24～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉝ST36（遺構－図版19）

4195地点のCN19グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.9m）×梁行１間（約2.6m）の長方形を呈し、棟方向はN50°Eを指向する。柱間寸法は桁行で1.5～2.4m、梁行2.4～2.6mを測る。柱穴は径12～24cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉞ST37（遺構－図版18）

4200地点のCG23グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.8m）×梁行２間（約2.4m）の長方形を呈する総柱建物である。棟方向はN89°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～1.6m、梁行0.8～1.6mを測る。柱穴は径12～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㉟ST38（遺構－図版19）

4200地点のCH21グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.1m）×梁行１間（約0.9m）の長方形を呈し、棟方向はN90°Wを指向する。柱間寸法は桁行で１.０m、梁行0.7～0.9mを測る。柱穴は径20～32cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㊱ST39（遺構－図版19）

4195地点のCF18グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約3.8m）×梁行１間（約1.6m）の長方形を呈し、棟方向はN90°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.5～2.1m、梁行1.6mを測る。柱穴は径16～24cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㊲ST40（遺構－図版19）

4200地点のCC17グリッドを中心に検出した。西側が調査区外となるため規模が広がる可能性がある。確認された範囲での規模は桁行３間（約4.4m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN69°Wを指向する。柱間寸法は桁行で0.7～2.1m、梁行2.0mを測る。柱穴は径16～20cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

㊳ST41（遺構－図版19）

4195地点のCJ18グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.9m）×梁行１間（約1.4m）の長方形を呈し、棟方向はN85°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.2～1.5m、梁行1.4mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は柱穴内より土器の小破片が出土している。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑲ST42（遺構－図版19）

4195地点のCG13グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.8m）×梁行１間（約2.0m）の長方形を呈し、棟方向はN106°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.3～1.6m、梁行2.0mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

⑳ST43（遺構－図版19）

4195地点のCG13グリッドを中心に検出した。規模は桁行２間（約2.9m）×梁行２間（約1.9m）の長方形を呈し、棟方向はN89°Wを指向する。柱間寸法は桁行で1.3～1.5m、梁行0.8～1.2mを測る。柱穴は径20～28cmを測り、楕円形を呈す。

遺物は出土していない。時期は柱穴の形状等により中世と推定される。

（３）井戸址（SE）

①SE01（遺構－図版25　遺物－図版68・75　写真図版23）

4188地点のDI09グリッドを中心に検出した。平面規模は長径3.0m、短径2.7mの方形を呈し、深さは、作業の安全性の面から遺構検出面より約1.7m掘り下げたが、底部まではさらに深さが増すと思われる。壁は、検出面より0.5m下までは緩やかであるが、そこから最深部までは垂直に落ち込んでいた。最深部での平面規模は長径1.4m、短径1.2mの正方形を呈する。壁面に板枠は見られず、巣掘りの井戸であると推定される。堆積土層は、上層より明褐色土、灰色土、シルト層となるが、灰色土中で大型の円礫、角礫が多く見られ、その中に井戸廃棄後の投げ込みと考えられる加工が施された木製品が多く含まれていた。

遺物は覆土の灰色土中より木製品を中心に山茶碗・「かわらけ」等が出土している。

時期は、出土遺物より12世紀代と推定される。

（４）土坑（SK）

①SK160（遺構－図版23　写真図版22）

4192地点のDL02グリッドを中心に検出した。平面規模は1.3×1.1mの楕円形を呈する。検出面からおよそ18cm下層で大型の礫が多く見られる。井戸址の可能性も考えられるが、調査の時間的制約もあり底部までは掘り下げなかった。

遺物は出土していない。時期は周辺の状況より中世と推定される。

（５）溝址（SD）

①SD13（遺構－図版27　遺物－図版68・74　写真図版25）

4188地点のCN25グリッドを中心に検出した。ST06、SD14に切られる。東側は調査区外となり、北側は攪乱により壊されていたためその一部を確認した。確認された範囲での規模は長さ7.1m、幅1.4～1.6m、深さ20cmを測る。

遺物は覆土中より白磁、古瀬戸の壺、「かわらけ」等が出土しているが、一部のものは切り合い関係

のあるST16の混入品の可能性もある。

時期は出土遺物より12～13世紀代と推定される。

第6節　近世の遺構

（1）土坑（SK）

①SK153（遺構－図版23　遺物－図版68）

4200地点のCO25グリッドを中心に検出した。SK155を切る。平面規模は1.1×0.8mの方形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ10cmである。

遺物は覆土中より天目茶碗が出土している。

時期は出土遺物より近世と推定される。

②SK163（遺構－図版24　遺物－図版73　写真図版22）

4160地点のDV05グリッドを中心に検出した。SB23を切る。平面規模は1.0×1.0mの円形を呈し、検出面から底面までの深さはおよそ59cmである。検出面から約20cm下層で直径38cmの扁平な石が見られ、さらに下層では小型の礫が複数見られた。その形状より土葬墓と考えられる。

遺物は、覆土中より擂り鉢、砥石片が出土している。

時期は出土遺物より近世と推定される。

第7節　その他

（1）住居址（SB）

①SB04（遺構－図版9）

4188地点のCR11グリッドを中心に検出した。SD04に切られ、SB05を切る。北側は撹乱で壊されていたため全体の三分の二を調査した。平面形は3.3×（2.9）mの方形を呈し、主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ21cmである。柱穴等は不明である。

遺物は覆土より打製石斧、土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

②SB05（遺構－図版9）

4188地点のCQ12グリッドを中心に検出した。SB04・SD07に切られる。北側は撹乱で壊されていたため全体の三分の一を調査した。平面形は（2.5）×（2.5）mの方形を呈し、主軸は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さはおよそ18cmである。柱穴等は不明である。

遺物は覆土より土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

③SB06（遺構－図版９）

4188地点のCU18グリッドを中心に検出した。SB07を切り、SD08・09・10・ST06に切られる。北側が削平されていたため全体の三分の二を調査した。平面形は2.9×（2.8）mの方形を呈し、主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ12cmである。柱穴等は不明である。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

④SB07（遺構－図版９）

4188地点のCT20グリッドを中心に検出した。SB06・ST10に切られる。北側が削平されていたため全体の三分の一を調査した。平面形は（3.7）×（1.6）mの隅丸方形を呈し、主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ10cmである。柱穴等は不明である。

遺物は覆土より土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

⑤SB08（遺構－図版９）

4188地点のCY13グリッドを中心に検出した。SD08・10に切られる。北側が削平されており、全体の三分の二を調査した。平面形は4.3×（3.0）mの方形を呈し、主軸は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ８cmである。柱穴等は不明である。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

⑥SB13（遺構－図版９）

4200地点のCN27グリッドを中心に検出した。ほとんどが調査区外になるため規模、主軸等は不明であるが、平面形は方形を呈すると思われる。床面は軟弱部である。調査した範囲では住居内施設は確認されなかった。

遺物は覆土中より土師器、須恵器片等が出土しており、古墳時代の住居址の可能性がある。

⑦SB14（遺構－図版９　遺物－図版71）

4200地点のCP24グリッドを中心に検出した。SB11を切る。北側の一部が調査区外となり、全体の三分の二を調査した。平面形は（2.5）×2.2mの方形を呈し、主軸はN12°W である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ32cmである。床面は全体的に堅固である。西壁際で見られるピットが柱穴の可能性がある。

遺物は覆土中より扶入打製石包丁が出土している。その形状より中世の竪穴状遺構の可能性がある。

⑧SB17（遺構－図版10）

4200地点のDW20グリッドを中心に検出した。SD29、30、39に切られる。平面形は3.9×3.9m

の隅丸方形を呈し、主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ20cmである。床面は全体的に軟弱である。炉の有無は不明であるが、床面上に焼土が見られる場所がある。柱穴等は不明である。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

⑨SB18（遺構－図版10）

4200地点のDX19グリッドを中心に検出した。平面形は3.0×2.1mの長方形を呈し、主軸はN22°W である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ10cmである。床面は全体的に堅固である。住居内施設は不明である。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

⑩SB21（遺構－図版10）

4200地点のDP25グリッドを中心に検出した。南側の一部が調査区外となり、全体の三分の二を調査した。平面形は（1.5）×2.8mの方形を呈し、主軸は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ6cmである。床面は全体的に軟弱である。壁際で見られるピットが柱穴の可能性がある。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

⑪SB22（遺構－図版10）

4200地点のDQ21グリッドを中心に検出した。南側の一部が調査区外となり、全体の二分の一を調査した。平面形は（1.8）×2.5mの方形を呈し、主軸はN10°W である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ20cmである。床面は全体的に軟弱である。床面上にピットが1基見られる。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

⑫SB29（遺構－図版10）

4160地点のCY13グリッドを中心に検出した。南側の一部が調査区外となり、東側が削平を受けているため全体の三分の一を調査した。平面形、主軸は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ10cmである。床面は全体的に軟弱である。床面上にピットが3基見られる。

遺物は出土していない。

時期は不明である。

⑬SB33（遺構－図版10）

4195地点のCM10グリッドを中心に検出した。南東側は削平されており、全体の二分の一を調査した。平面形は（3.2）×3.5mの方形を呈し、主軸は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さはおよそ17cmである。炉、柱穴等の住居内施設は不明である。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は不明である。

（2）溝址（SD）

①SD08（遺構－図版27　写真図版25）

4188地点のCX14グリッドを中心に検出した。SB06・SK128を切る。南北方向から東西方向に延びる平面形状がL字状を呈しており、規模は南北方向に4.5m、東西方向に10.5m、幅は30～40cm、深さは11～16cmを測る。調査時は溝址の両端がそれぞれ終息すると判断したが、検出面が削平されていたことを考えるとさらに延びる可能性もある。溝址の外側には、平面形状が同様のL字状になるSD10が存在しており、区画溝の可能性も考えられる。

遺物は出土しておらず、時期が確定できない。

②SD10（遺構－図版27　写真図版25）

4188地点のCY15グリッドを中心に検出した。SK128、SD11を切る。SD08と同様に南北方向から東西方向に延びる平面形状がL字状を呈しており、確認された範囲での規模は南北方向に7.5m、東西方向に8.5m、幅は50～85cm、深さは10～22cmを測る。溝址の両端はさらに延びると考えられる。内側には、平面形状が同様のL字状になるSD08が存在しており、区画溝の可能性も考えられる。

遺物は出土しておらず、時期が確定できない。

（3）その他の遺構（SX・SI）

①SX02（遺構－図版25）

4200地点のCQ20グリッドを中心に検出した。平面形状は不定形を呈し、長軸が3.7m、短軸が2.2m、深さ14cmを測る。底部には小礫が多数みられ、その間で焼土、炭化物、遺物が出土している。遺構の具体的な性格は不明である。

遺物は土器の小破片が比較的多く出土している。

時期は出土遺物から判断できなかった。

②SX03（遺構－図版25）

4200地点のDV27グリッドを中心に検出した。SB20を切る。平面形状は不定形を呈し、長軸が3.9m、短軸が2.2m、深さ16cmを測る。遺構の具体的な性格は不明である。

遺物は土器の小破片が少量出土している。

時期は出土遺物から判断できなかった。

③SI02（遺構－図版25）

4195地点のDP12グリッドを中心に検出した。直径35cm大の自然石が3個直線上に並んでいた。遺構の具体的な性格は不明である

遺物はなく、時期は不明である。

挿図6　時期別　遺構分布図

第5章　遺物

調査区からは縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは時代毎の様相を記す。

第1節　縄文時代の遺物

（1）SB47出土の遺物について（図版65）

SB47からは縄文時代前期前半の土器が出土している。小破片が多く、復元できるものはなかった。土器は器壁が薄く、内面に指頭圧痕が付く東海地方に主な分布がみられる「木島式」と、木島式に比べて器壁が中厚手の感があり、伊那谷に主な分布がみられる「中越式」である。小破片のため詳細は不明であるが、それぞれ木島Ⅸ式、中越Ⅱ式（藤谷　2008）に比定される。

該期の遺構・遺物については、今次調査区の東側に立地していた「月の木古墳群」における平成9・10年度の発掘調査において確認された住居址03より木島Ⅶ式土器が出土している。

（2）その他の出土遺物について

4188地点のCP26グリッドの調査区壁面上において、正位に埋設されたと考えられる土器（図版69-12）が出土している。胴部下半より上は耕作による削平を受けていたため全体の器形及び遺構に伴うものかどうかは不明である。残存する土器は器壁が比較的薄く、胎土に長石が多く含まれている。文様は胴部に半裁竹管状工具による縦位の沈線が密接に施文されているが、底部付近は無文である。全体の器形が不明なため土器型式が特定できないが、時期は文様、胎土等から縄文時代中期前葉から中葉と推定される。

その他の遺物としては、遺構及び遺構外より縄文時代中期から後期の土器（図版68-1～5、69-7、70-1～3・6・7）が小破片で出土している。また、石器についても遺構及び遺構外より高砂岩製の打製石斧、横刃型石器、敲石、磨石等（図版71～74）が出土しており、特に打製石斧が数多く出土している。

第2節　弥生時代の遺物

（1）SK156・158出土の遺物について（図版68）

SK156・158からは弥生時代中期中葉の「阿島式土器」が出土している。阿島式土器は昭和13年に大沢和夫氏によって命名された喬木村阿島遺跡出土の資料を標識資料としている土器である。その後地元研究者を中心に器種組成や編年的位置づけが検討されているが、該期の遺跡及び出土資料が少ないためその様相についてはいまだ不明な部分が多い。このような現状のなか、平成9年度に月の木遺跡の北側に位置する井戸下遺跡において実施された飯田市教育委員会による発掘調査で、該期の土器を伴う住居址が3軒確認され、出土遺物に関する検討がされている。

SK156からは甕形土器が2個体出土している。（図版68-7）は底部を除いてほぼ復元された個体である。器壁は薄く、頸部がややくびれ口縁部が緩やかに外反する器形で、口唇部は面取りされて外傾し、端部に刻みが施されている。器面全体には櫛状工具による条痕が斜め方向に施されている。（図版

68-9）は復元実測された個体である。（図版68-7）と器形、器面の施文が類似している。

SK158からは帝形土器の口縁部（図版68-10）が出土している。井戸下遺跡で分類された壺形土器aに該当する。外面は朱彩されており、口縁部は緩やかに外側に開き、口唇部は面取りされて外傾している。残存している範囲での文様構成は口縁部が無文で、頸部には指頭による円形刺突文が横位に一条巡らされ、その下に半裁竹管状工具による連続押し引き文、太沈線文が一条づつ施文されており、以下連続押し引き文、太沈線文が交互に施文されていくことが推測される。

（2）その他の出土遺物について

遺構・遺構外より弥生時代中期から後期にかけての土器・石器が出土している。

①弥生時代中期

SK156・158以外に該期の遺構として確認されたものはなく、遺物は遺構覆土もしくは遺構外から出土したものである。土器は阿島式と思われる小破片が多く、SK156・158周辺のグリッドからの出土（図版69-24他）が目立つ。また、4160地点においてSB27・SD41の覆土より北原式土器の小破片（図版69-4・5・9・10）が数点出土しており、西側の調査区外に該期の遺構の存在が予想される。

その他、（図版69-25）は壺形土器の頸部であり、器面全体に条痕文が施されている。小破片のため詳細は不明であるが、阿島式土器にはみられない施文であり、検討を要する土器の一つである。

②弥生時代後期

該期の遺構としてはSB15・19・31・40、SM01・02、SD41・44がある。完形のものは少ないが、甕、壺の出土がみられ、後期最終末の様相を示すものが多い。石器は遺構外を中心に硬砂岩製の抉入打製石包丁、有肩扁状形石器、打製石斧が出土している。

第3節　古墳時代の遺物

古墳時代は月の木遺跡の中心的な時代の一つであり、遺構・遺構外より前期から後期にかけての遺物が出土している。しかし、住居址より出土する遺物は小破片の土器が多く、復元してその器形を確認できたものは以外と少なかった。故におおよその時期は推定できても一時期における器種組成は部分的なものを示すにとどまっている。よって、ここでは各時期の土器様相を比較的器種組成が見られる住居址出土遺物を中心に概観する。

（1）住居跡出土の土器について

①古墳時代前期

該期の遺構としてはSB10、12、27、28、32、34がある。この中でSB12・32・34の出土遺物が器種組成を比較的示している。SB12からは壺、甕、台付甕（台部）、鉢、小型丸底、ミニチュア土器が出土している。壺（図版65-27）・甕（図版65-24）は、4160地点DL07P1より並列して出土した埋設土器（図版69-37・38）と同じ器形である。SB32からは壺、甕、高坏が出土している。壺（図版66-16）は小型で胴部が球胴を呈している。高坏（図版66-18）は坏部の口径が大きく、脚部は八の字状に

広がり3ヵ所に円形の透かしがみられる。井戸下遺跡48号住居址から出土している高坏と同様のものである。SB34からは壺、甕、台付甕（台部）、器台もしくは高坏の脚部が出土している。

②古墳時代中期

該期の遺構としてはSB20、23、24、38、42、45がある。器形のわかるものは少なく、高坏等の器形で判断した。その中でSB24出土の土器はカマド横のピットより一括して出土したものである。器種としては高坏と坏がある。高坏は坏部下半で明瞭な段をもち、脚部は円錐形で裾部が屈折すると思われるもの（図版66-5）、脚部の様相は不明であるが坏部下半で稜をもつもの（図版66-4）、坏部が半球形を呈し下半に稜をもち、脚部はスカート状に広がるもの（図版66-2・3）の3種類がみられる。坏は半球形を呈し、口縁端部が外反するものが2個体（図版66-7・8）みられる。SB23、38、遺構外からは器形が明確に特定できないが、須恵器片（図版67-13～16）が数点出土している。

③古墳時代後期

該期の遺構としてはSB30、35がある。SB30からはカマド内より長胴甕（図版66-15）が出土している。SB35からは長胴甕（図版67-1）と口縁端部がやや内傾し内面が黒色処理された坏（図版67-3）が出土している。

第4節　平安時代の遺物

該期の遺構としてはSB43・44がある。SB43からは光ヶ丘窯址群産の灰釉陶器碗、在地系の軟質須恵器、器面がハケ調整された長胴甕（図版67-22・25）が出土しており、9世紀末の時期が推定される。SB43に切られるSB44からも猿投産と思われる須恵器片（図版67-30・31）、器面がハケ調整された長胴甕（図版67-26～29）が出土しており、9世紀代の時期が推定される。その他遺構外からの出土であるが、虎渓山窯址群産の灰釉陶器碗（図版69-36）、明和27号窯産の灰釉陶器碗の転用硯（図版69-20）があり、10世紀後半から11世紀後半の時期が推定される。

第5節　中世・近世の遺物

（1）SE01出土遺物（図版68・75）

4188地点で確認したSE01は中世の井戸址と考えられ、覆土中より山茶碗、かわらけ、木製品等様々な遺物が出土している。

山茶碗（図版68-15）は三分の一ほど欠けているが全体の器形がわかるものである。東濃地域の窯洞窯産である。口径14.8㎝、器高5.7㎝、高台径6㎝を測り、高台端部には籾殻痕が明瞭にみられる。器面は灰白色で、胎土は緻密である。時期は12世紀末から13世紀初頭と推定される。「かわらけ」は小破片のため図示できなかったが、手捏ね成形のもので、時期は13世紀前半と推定される。

その他、覆土の灰色土中からは木製遺物が多く出土している。大形のものはほとんど見られず、比較的細かい木片が多かった。その中で用途のわかる製品は横槌（図版75-1）・曲物の底板（図版75-

2)、舗板（図版75-3)・鳥形（図版75-4）箸（図版75-5～8)・下駄（図版75-9）で、その他のものは用途不明（図版75-10・11）である。鳥形は鳥の側面を表しており、嘴が細かく表現されている。

（2）その他の出土遺物について

4188・4200地点の遺構外を中心に陶磁器類、「かわらけ」等が出土しているが、小破片のため全ては図化することができなかった。よって、ここではおおよその様相を記す。

①かわらけ

6点出土しており、そのうち図示できたものは4点（図版68-27・28、69-22・23）である。小破片のため細かな器形までは不明であるが、どれも手捏ね成形のもので、時期は13世紀前半と推定される。

②山茶碗

14点出土しており、器種は碗10点、小皿3点、仏供1点（図版69-15）である。産地は尾張産が8点、美濃産が6点である。時期は12世紀後半から13世紀中頃にかけてのものが多い。

③古瀬戸他

古瀬戸前期様式の四耳壺・壺、古瀬戸後期様式の天目茶碗・深皿、常滑産の甕、中津川産の壺等が出土している。時期は12世紀後半から15世紀後半のものであるが、13世紀から14世紀にかけてのものが多い。

④輸入陶磁器

全て小破片で、青磁碗1点、青白磁碗1点、白磁碗12点（図版69-14、17）が出土している。青磁碗は同安窯系のもので、白磁碗は横田・森田分類（横田・森田1978）のⅣ・Ⅴ類が多い。時期としては11世紀後半から12世紀後半のものである。

⑤近世陶器

SK153より瀬戸美濃系の天目茶碗（図版68-13）が出土している。時期は17世紀と推定される。

第6章　まとめ

第1節　集落の様相

（1）縄文時代

今次調査では前期（前半）の住居址2軒（SB26、47）が調査されている。2軒とも調査範囲北端の4160・4155地点の調査区北側で確認されており、天龍川の氾濫原を眼下に望む月の木台地の突端に位置する場所である。SB26は炉址、柱穴のみの確認であるが、周辺からは黒耀石の剥片が多く出土しておりSB47とほぼ同時期の住居址と思われる。今回の調査では2軒の出土であるが、4160・4155地点はもともと住宅地として使われていた場所であるため土地が深く削平されており、かつ広い範囲で既存建物の基礎と思われる攪乱がみられたため遺構の残存数が少なかった。故に当初存在したと思われる遺構数はもう少し多いと思われる。

月の木台地における発掘調査は近年までほとんど皆無であり、表採遺物によってしかその様相を知るすべがなかった。しかし、今次調査区より東の天龍川に面する地点において平成9・10年度に飯田市教育委員会が実施した「月の木古墳群」の発掘調査では、1号古墳の墳丘下よりSB47号住居址とほぼ同時期の住居址（SB01）が1軒出土しており、今次調査と合わせて考えると、月の木台地の北端部を中心とした広い範囲で集落が形成されていたことが推測される。

前期以降の時代については住居址の存在が確認されていないものの、4188地点を中心に中期と思われる打製石斧等を伴う土坑が8基確認されており、周辺部における該期の遺構の存在が予想される。

（2）弥生時代

今次調査では中期の土坑2基（SK156・158）、後期から古墳時代初頭にかけての住居址4軒（SB15・19・31・40）が調査された。

弥生時代中期については住居址が確認されず、土坑のみの確認である。ただ、4160地点の古墳時代中期の住居址であるSB27の覆土からは中期後半の北原式土器の小破片が数点出土しており、西側調査区外で遺構が切り合っている可能性が考えられる。

確認された2基の土坑からはそれぞれ阿島式土器の甕、壺が出土しており、土坑墓である可能性が考えられる。阿島式土器が出土する遺跡はいまだ少なく、その様相は不明な部分が多い。その中で、月の木遺跡の北側段丘崖下で隣接する井戸下遺跡においては平成9年度の発掘調査で阿島式期の住居址が3軒確認されている。3軒の住居址は調査区の縁辺部にまばらに分布している状況であるが、未調査の周辺部に集落の中心が存在し、かなり密に住居址が立地すると推定されている。（飯田市教委　2001）今回調査された2基の土坑は井戸下遺跡が立地する天龍川氾濫原より一段高い台地上に存在しており、井戸下遺跡における阿島式期の集落の墓域に相当する可能性も考えられる。しかし、該期における集落と墓域の位置関係については調査事例が少ないため不明な部分が多い。今後の調査事例の増加を待って検討すべき課題である。

中期以降については後期末から古墳時代初頭にかけての住居址4軒が確認されている。該期については隣接する井戸下遺跡においても住居址が6軒確認されている。井戸下遺跡においては、阿島式期の集

落以降が断絶しており、後期終末で再び居住域としている。しかし、この集落以降も継続することなく古墳時代中期まで断絶している。台地上に立地する月の木遺跡における該期の住居址は、井戸下遺跡に展開する集落の消長に少なからず関係しているのかもしれない。

（3）古墳時代

今次調査では4188・4192地点を除く調査区で竪穴住居址19軒、掘立柱建物址３棟、土坑１基が調査されており、月の木遺跡の中心を成す時代といえる。しかし、各々の住居址から出土した遺物は小破片が多く、器形がわかるものは比較的少量であったため一時期の器種組成を示すまでには至らなかった。故に、住居址の時期を検討するにあたり時期不明とした遺構も存在する。その他の遺構については出土遺物を根拠に時期を設定した。尚、出土遺物の土器については、西山克己氏（西山1999）、山下誠一氏（山下2003・2004）、井戸下遺跡（下平2001）によって行われた飯田・下伊那地域における古墳時代の土器編年研究を参考に時期を検討した。

今回検出した住居址はその出土遺物、住居構造より判断して古墳時代前期・古墳時代中期前半・古墳時代中期後半・古墳時代後期のものに分けられる。

古墳時代前期に比定される住居址はSB10、12、27、28、32、34であり、SB32、34が古相を示す。住居内に地床炉をもち、SB32・34の柱穴は直径16～20cmと細いのが特徴である。住居址の多くは、主軸方向を北西に向けている。

古墳時代中期前半に比定される住居址はSB20、42、45である。SB20、45は遺構の重複、部分的調査等のため住居構造に不明な部分が多いが、SB42は一辺が5.2mを測る比較的大型の住居址であり、住居内に地床炉をもつ。

古墳時代中期後半に比定される住居址はSB23、24、38である。SB23は未調査部を含みなおかつ部分的に削平を受けているため不明であるが、SB24、38はカマドを伴う住居址である。

古墳時代後期に比定される住居址はSB30、35である。SB30はカマドのみの検出であるため全体の住居構造は不明である。SB35もカマドを伴う住居址であり、一辺が約３mを測る小型の住居址である。カマドは東壁の西隅に作られていた。

今回の調査で確認された古墳時代の住居址は４世紀代より６世紀前半にかけてのものである。調査範囲北端の4160・4155地点では土地の削平が広い範囲でみられ、未確認の遺構が多く存在していた可能性を考慮すると、月の木台地上に存在した住居址数はさらに多いものと推定される。故に今回確認した住居址のみで集落の傾向を論じることは正確さに欠けるものであるが、下伊那地域において類例が少ない前期の住居址群を確認したことは一つの成果である。該期の遺構について同じ川路地区でみると、井戸下遺跡、殿村遺跡、西の塚遺跡等で住居址が若干数確認されている程度で、他の地区においても遺構がまとまって検出された遺跡は座光寺地区の恒川遺跡群以外はみられず、以降の時期のものに比べて遺構数が少ないのが特徴である。このことについては、「前段階である弥生時代後期終末集落の廃絶後に少数の集落が規模を縮小させて存在した姿を示すもの」と指摘する論（山下　2003）もある。

川路地区及び天龍川を挟んで向かい側の龍江地区においては、治水対策事業に伴う発掘調査が広い範囲で行われ、多くの集落遺跡（細新・井戸下・殿村・留々女・辻前・久保田）の存在が確認された。その中で古墳時代集落の傾向として、中期から後期にかけて隆盛する集落（井戸下・細新・久保田）、後

期に隆盛する集落（留々女・辻前）に分けられる。これらの集落の存在は当地域における古墳の築造開始とも密接な関係をもつことがいわれている。月の木遺跡の集落は前期から後期初頭まで小規模化しつつ継続しており、前者に若干先行する時期を含む集落である。このことから、月の木遺跡は川路地区において古墳築造が本格的にはじまる前段階から古墳築造期の様相を示す集落遺跡であるといえる。

（4）平安時代

今次調査では9世紀代の住居址2軒（SB43、44）が調査されている。2軒とも4155地点で検出されており、SB43が44を切っていた。月の木台地周辺ではこれまで該期の住居址が確認されておらず、今回の調査で初めて確認されたことは集落の存在を考えるうえで大きな成果であった。4155地点における検出位置は調査区の東南端部の一角であり、東側を中心とした周辺の未調査部に該期の遺構がさらに存在する可能性も考えられる。故に集落としての規模は未知数で、その様相については周辺部の調査結果をふまえて今後判断すべき課題である。

その他の調査区においては、4188・4200・4195地点の遺構外より転用硯をはじめとする遺物が出土しており、10世紀から11世紀後半の年代が推定されている。確認された住居址より新相を示す年代であり、9世紀後半以降も月の木台地上においては集落が継続して存在していた可能性が推定される。

この集落に関連する遺構として、井戸下遺跡において確認された古墳時代中期から9世紀後半以前に使用された水田址の存在が挙げられる。井戸下遺跡では該期の住居址は確認されておらず、平安時代におけるこの場所は生産域として土地利用がされていたと考えられる。時期的にみて月の木台地上において集落を営んでいた人々の水田である可能性は高く、集落に住む人々の生産域であったと思われる。

（5）中世

今次調査では4188・4200地点を中心に住居址1軒、掘立柱建物址40棟、井戸址1基、土坑1基が調査されている。遺構からの出土遺物は非常に少なく、遺構外の出土遺物より判断して12世紀から13世紀を中心とした時期が推定される。

遺構は掘立柱建物址が中心で、4188・4200・4195地点で検出されている。各地点とも遺構が重複しながら存在しており、長期間にわたって集落が営まれていたことが推定される。各遺構の切りあい関係については確定できないが、立地場所から4188地点と4200・4195地点の遺構群に大きく分けられ、さらに各地点の中で棟方向の違いによって建物址が分けられそうである。

4188地点は今調査範囲の最南端に位置する場所であり、該期遺物が最も多く出土した地点でもある。この調査区の北東隅部は湿地化した黒褐色土が厚く堆積しており、流れ込みと思われる遺物は出土するが、遺構は確認されない場所であった。4188地点の遺構はこの湿地帯の周辺に存在しており、掘立柱建物址、井戸址、溝址がある。建物址は大きく3つのグループ（ST01・02・06・07・08・10・11・12）（ST03・04・05・09）（ST13・14・15）に分けられ、数次期の変遷が推定される。集落の時期については明確に示せないが、井戸址と思われるSE01の状況をみると、その覆土上層からは12世紀末から13世紀初頭にかけての東濃産山茶碗、13世紀代と思われるかわらけ等が出土しており、この事から実際に井戸が使用されていた時期（12世紀末以前）と廃棄後の時期（13世紀以降）が想定される。周辺でも11世紀末から12世紀前半にかけての白磁碗、13世紀から15世紀にかけての瀬戸産陶磁器等の出土

がみられ、12世紀代と13世紀代に集落の時期相がみられる。

4200・4195地点では掘立柱建物址が検出されており、大きく3つのグループ（ST16・21・23・25・26・27・28・29・30・31）（ST17・19・20・37・38・39・40・41・42・43）（ST32・33・34・35・36）に分けられ、4188地点同様に数次期の変遷が推定される。全ての掘立柱建物址を把握しきれていないが、4200地点の北側を中心に遺構が分布している。時期については、遺物の出土が4188地点と比べて少なく詳細は不明であるが、およそ13世紀代が中心と思われる。

その他、4188・4200地点からは時期を示す遺物がないため時期不明とした竪穴住居址（SB14等）や方形状の土坑（SK155、159等）が検出されている。これらの遺構は大小様々な平面規模であり、遺構内にピットがみられるものとそうでないものがあり、その性格は不明である。その形状より該期の所謂「方形竪穴」状遺構である可能性も考えられ、検討を要する遺構である。また、4188地点で検出したSD08・10は、時期を示す遺物がないため時期不明とした溝址である。この2条の溝址は同じ角度でL字状に曲がっており、人為的な溝址である。特にSD10は北側、東側にさらに延長していくものと思われたが、後世の耕作により土地が削平されており状況は不明であった。周辺で出土する遺物から中世の区画的な役割を持つ溝址とも考えられるが、SD10の内側では想定される施設の存在が不明であり、確認された範囲の中でその性格を推定することは困難であった。

月の木遺跡内には中世の城跡とされる「幾島城」が存在すると伝承されており、その実態を解明することが今回の調査目的の一つでもあった。しかし、調査の結果「月の木古墳群」の発掘調査時と同様にその痕跡を明確に確認することはできなかった。その存在は不明な部分が多く、井戸下遺跡の報告書でも述べられているように、井戸下遺跡で確認された屋敷址の名残が「幾島城」の伝承となった可能性が高いと思われる。

今次調査では12世紀から13世紀を中心とする集落の存在を確認した。これは北側の台地下に立地する井戸下遺跡で確認された14世紀から15世紀後半が主体となる建物址群より先行する時期のものである。また、飯田市内における該期の集落は山本地区の「神平南遺跡」等類例が少なく、今回の集落の確認は川路地区及び下伊那地域における中世集落の変遷を考えるうえでの大きな成果といえる。

（6）近世

土坑2基を確認した。そのうちSK163は土葬墓であり、台地北端の一部は墓域として利用されていたと考えられる。

第2節　墓域としての月の木遺跡

今次調査では、北端の台地端部でもある4155・4160地点で円形周溝墓（SM01）方形周溝墓（SM02）をそれぞれ検出した。どちらの遺構も削平もしくはその一部が調査区外へかかるため全体の平面形を把握することが出来ず、出土遺物も小破片であるため詳細な時期は不明であるが、その形状からSM01は古墳時代、SM02は弥生時代後期から古墳時代中期頃が推定される。また、同地点では溝址としてSD41（4160地点）、SD44（4155地点）が検出されているが、その覆土が他の周溝墓と類似しており、そこから弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物や礫が多数出土している事などから周溝墓

の一部である可能性が考えられる。同地点は広い範囲で削平されている場所である点も考慮すると、さらに多くの周溝墓が存在していたかもしれない。これら周溝墓と思われる遺構は今回の調査では同地点でしか検出されておらず、この台地端部を中心に弥生時代後期から古墳時代前期の墓域が存在していた可能性は高い。これらの周溝墓は、台地の東端に存在する5世紀後半を中心とする「月の木古墳群」に時期的に先行するものであり、同古墳群築造前における墓域としてその存在は重要である。この周溝墓群に対し時期的に対応する集落は、今次調査で確認した月の木遺跡や台地下に展開する井戸下遺跡にもみられ、集落と墓域の関係は周溝墓の時期、周辺集落の状況をさらに検討して判断すべき課題である。

第3節　おわりに

今回の調査では、月の木台地のほぼ中央部で発掘調査を実施することができた。月の木遺跡での調査は平成9・10年度に実施した「月の木古墳群」に続く二度目のものであり、これまで不明であった台地上に展開する集落の様相の一端を確認することができた。時期としては縄文時代から中世にかけての遺構が存在し、古墳時代前期から中期及び中世の集落を確認した。この時期の集落は市内での確認事例が少ないものであり、今次調査の大きな成果といえる。

川路地区は天龍川治水対策事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が数年間にわたって実施され、近年では三遠南信自動車道整備に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から古墳時代を中心にその様相が次第に明らかになりつつある地域である。調査担当者の力量不足のため調査結果を十分に報告しきれたか心もとないが、これまでの調査成果と合わせて今回の発掘調査結果が川路地区ないし飯田市の歴史を考えるうえでの一助になれれば幸いである。

なお、発掘調査にあたり地元川路地区の方々、調査に携わった方々には多大なご支援、ご協力をいただいた。また、出土遺物については県立歴史館の原明芳氏、長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏よりご指導いただいた。文末ではあるが記して感謝する次第である。

〈参考文献〉

佐藤甦信・宮沢恒之　1967「喬木村阿島遺跡」『長野県考古学会誌』第4号
鋤柄俊夫　1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4号
鋤柄俊夫　1986「長野県の中世集落遺跡について」『長野県考古学会誌』第50号
鋤柄俊夫　1988「信濃における平安時代後期以降の土器様相」『東国土器研究』第1号
長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編』
(財)長野県埋蔵文化財センター　1989『吉田川西遺跡』
下伊那郡誌編纂会　1991『下伊那史　第1巻』
藤澤良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター　研究紀要』第3号
飯田市教育委員会　1998『細新遺跡Ⅱ』
西山克巳　1999「下伊那の古墳時代における新来文化の受容」『伊那』第47-4号
山下誠一他　1999「長野県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号
山下誠一他　1999「'99　シンポジウム『長野県の弥生土器編年』」長野県考古学会　弥生部会
飯田市教育委員会　2001『井戸下遺跡』
山下誠一　2001「飯田盆地における周溝墓の動向－弥生時代から古墳時代における墓制の一様相－」飯田市美術博物館研究紀要　第11号
飯田市教育委員会　2002『月の木遺跡・月の木古墳群』
飯田市教育委員会　2002『久保田遺跡　久保田1号古墳　閻魔王塚古墳　その1　集落編』
飯田市教育委員会　2003『留々女遺跡』
飯田市教育委員会　2003『辻前遺跡』
飯田市教育委員会　2003『殿村遺跡・大荒神の塚古墳』
山下誠一　2003「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向－発掘調査された竪穴住居址を基にして－」飯田市美術博物館研究紀要　第13号
佐々木満　2004「中世前期における中部地区の土器様相」『中近世土器の基礎研究XⅤⅢ』日本中世土器研究会
山下誠一　2004「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向－発掘調査された竪穴住居址を基にして－」飯田市美術博物館研究紀要　第14号
小林達雄編　2008『総覧　縄文土器』
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』

表1 土坑(SK) 観察表

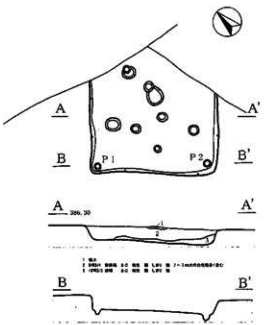
土坑No.	図版No.	検出調査区	検出位置	長×短×深(cm)	平面形	備考
SK121	20	4188	CS07	(150)×134×22	楕円形	
SK122	20	4188	CN12	120×46×18	楕円形	縄文
SK123	20	4188	CM15	274×140×30	楕円形	
SK124	20	4188	CO13	166×96×33	不整形	
SK125	20	4188	CU12	130×82×27	楕円形	
SK126	20	4188	CT15	99×46×50	楕円形	
SK127	20	4188	CS16	170×116×22	楕円形	縄文
SK128	20	4188	CV16	(90)×108×22	楕円形	縄文
SK129	20	4188	CQ19	112×108×15	円形	
SK130	20	4188	CQ22	178×62×20	不整形	
SK131	21	4188	CM17	94×84×21	楕円形	
SK132	21	4188	CM18	104×74×35	楕円形	
SK133	21	4188	CI23	176×60×36	楕円形	
SK134	21	4188	CY16	80×65×17	不整形	
SK135	21	4188	CY19	38×23×22	楕円形	
SK136	21	4188	CY17	106×43×12	楕円形	縄文
SK137	21	4188	CS27	138×85×36	楕円形	縄文
SK138						欠番
SK139	21	4188	DB18	270×200×11	不整形	
SK140	21	4188	DC18	217×108×17	長方形	
SK141	21	4188	DE12	90×70×23	楕円形	
SK142	21	4188	DF13	110×98×45	楕円形	
SK143	21	4188	DG15	128×73×31	楕円形	
SK144	22	4188	DD15	116×53×10	楕円形	縄文
SK145	22	4188	DG06	130×(45)×35	楕円形	
SK146	22	4188	DH06	140×(83)×45	楕円形	
SK147	22	4188	DH13	120×63×24	楕円形	
SK148	22	4188	DH13	88×83×19	円形	
SK149	22	4188	DK09	108×90×35	楕円形	
SK150	22	4188	DL09	190×170×50	方形	
SK151	22	4188	DL16	197×90×56	楕円形	
SK152	22	4200	CK22	141×116×19	楕円形	縄文
SK153	23	4200	CO25	106×76×10	方形	近世
SK154	22	4200	CN26	130×65×44	楕円形	
SK155	23	4200	CO25	240×230×19	方形	
SK156	23	4200	DW23	58×54×26	円形	弥生
SK157						欠番
SK158	23	4200	DS26	114×70×10	楕円形	弥生
SK159	23	4200	CN25	148×146×14	方形	
SK160	23	4192	DL02	125×108×18	楕円形	中世
SK161	23	4160	DU22	106×85×11	不整形	縄文
SK162	23	4160	DT23	121×95×14	方形	
SK163	24	4160	DV05	102×95×59	円形	近世
SK164	24	4160	DK14	137×86×17	不整形	
SK165	24	4160	DG03	40×35×23	楕円形	
SK166	24	4195	CN07	87×76×16	楕円形	
SK167	24	4195	CS04	90×67×22	不整形	
SK168	24	4195	CW08	103×85×16	楕円形	古墳
SK169	24	4195	CO10	110×100×(17)	円形	
SK170	24	4195	CO10	215×129×17	方形	

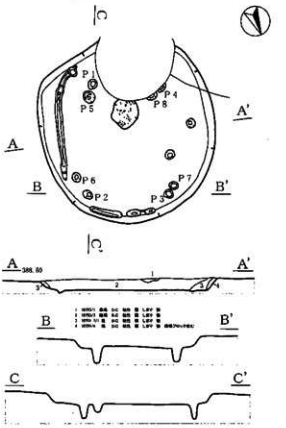
表2 溝址(SD) 観察表

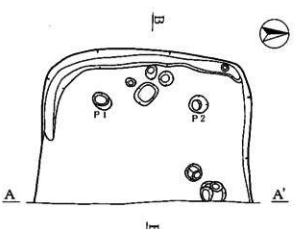
溝址No.	図版No.	検出調査区	検出位置	長×幅×深(cm)	備考
SD2	26	4188	CT08	(420)×100～210×6～15	
SD3	26	4188	CR09	(750)×100～260×9～20	
SD4	26	4188	CQ10	(680)×8～35×8～19	
SD5	26	4188	CM13	(310)×30～90×13～44	
SD6	26	4188	CV11	350×30～100×4～9	
SD7	26	4188	CP13	590×40～50×9～12	
SD8	27	4188	CX14	1420×28～49×11～16	中世？
SD9	26	4188	CV19	248×32～46×7～10	
SD10	27	4188	CY15	(1450)×50～85×10～22	中世？
SD11	26	4188	CX16	(200)×74～79×20～24	
SD12	27	4188	CI22	(620)×180～240×10～14	
SD13	27	4188	CN25	(710)×140～160×8～19	中世
SD14	27	4188	CM25	440×20～50×14～21	
SD15	28	4188	CT27	(960)×72～165×10～15	
SD16	28	4188	CV26	(1010)×96～238×16～38	
SD17	28	4188	DB17	460×80～108×6～13	
SD18	28	4188	DA21	880×16～30×2～13	
SD19	28	4188	DB24	620×64～86×2～10	
SD20	29	4188	DB19	252×70～80×2～20	
SD21	29	4188	DJ12	1230×42～110×1～10	
SD22	29	4188	DH13	(260)×70～116×2～6	
SD23	29	4188	DV25	(420)×54～72×2～12	
SD24	29	4188	DO09	(340)×16～40×2～5	
SD25	29	4200	DU24	560×14～26×2～6	
SD26	30	4200	DU19	(510)×24～30×4～7	
SD27	30	4200	DS19	(500)×70～80×13～19	
SD28	29	4200	DW19	500×18～36×2～6	
SD29	30	4200	DW20	(390)×40～60×2～4	
SD30	30	4200	DV20	(190)×14～22×1～2	
SD31	31	4200	DS20	(1880)×50～130×2～13	
SD32	30	4200	DW25	210×18～28×3～7	
SD33	30	4200	DV20	(280)×28～70×2～10	
SD34	30	4200	DW16	(750)×30～120×2～9	
SD35	30	4200	DR17	(440)×40～90×2～10	
SD36	30	4200	DR16	(260)×80～90×4～16	
SD37	33	4200	CW15	(610)×16～40×2～7	
SD38	31	4200	CR20	(200)×4～18×1～7	
SD39	30	4200	DW20	(1010)×14～30×6～9	
SD40	31	4160	DA12	(1540)×72～270×10～14	
SD41	33	4160	DE01	(350)×114～150×25～32	弥生終末～古墳初頭
SD42	33	4195	CJ06	(130)×9～18×7～17	
SD43	33	4195	CJ06	(120)×14～16×1～16	
SD44	32	4195	DE26	(600)×120～280×20～50	弥生終末～古墳初頭

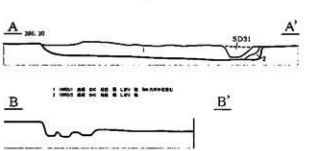
表3 SE01出土木製品観察表

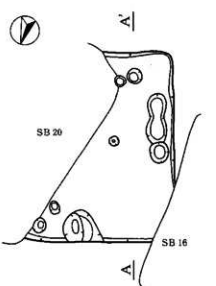
No.	図版No.	器種	法量(cm)			木取り	樹種
			全長	幅	厚さ		
1	75-1	横槌	34.7	6.2	4.7	丸木芯もち材	ブナ科クリ属クリ
2	75-2	曲物(底板)	26.4	9.2	0.8	板目	ヒノキ科アスナロ属
3	75-3	曲物(側板)	8.1	12	0.5	板目	ヒノキ科ヒノキ属
4	75-4	鳥形	14	3.4	0.5	柾目	ヒノキ科アスナロ属
5	75-5	箸	12.7	0.6	0.6	丸木削り出し	ヒノキ科アスナロ属
6	75-6	箸	12.8	0.6	0.5	丸木削り出し	ヒノキ科アスナロ属
7	75-7	箸	12.3	0.6	0.5	丸木削り出し	ヒノキ科アスナロ属
8	75-8	箸	16.3	0.7	0.5	丸木削り出し	ヒノキ科アスナロ属
9	75-9	下駄	18.6	10.1	6	柾目	ヒノキ科ヒノキ属
10	75-10	不明	16.7	5.2	4.5	柾目	ヒノキ科ヒノキ属
11	75-11	不明	10.1	6.7	5.8	丸木削り出し	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節

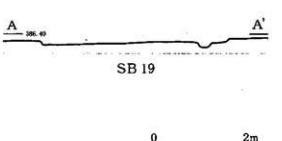




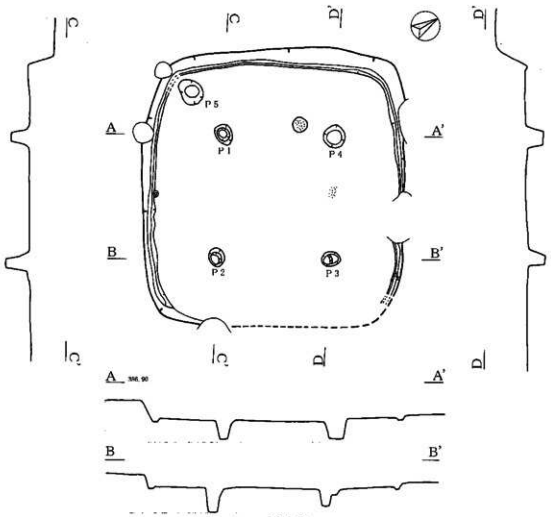






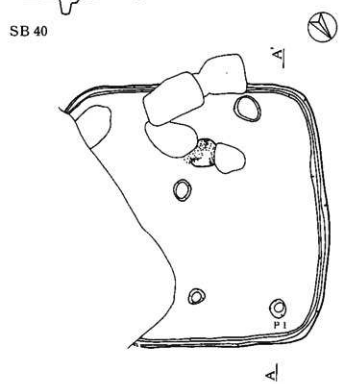


図版1　SB26・47・11・15・19



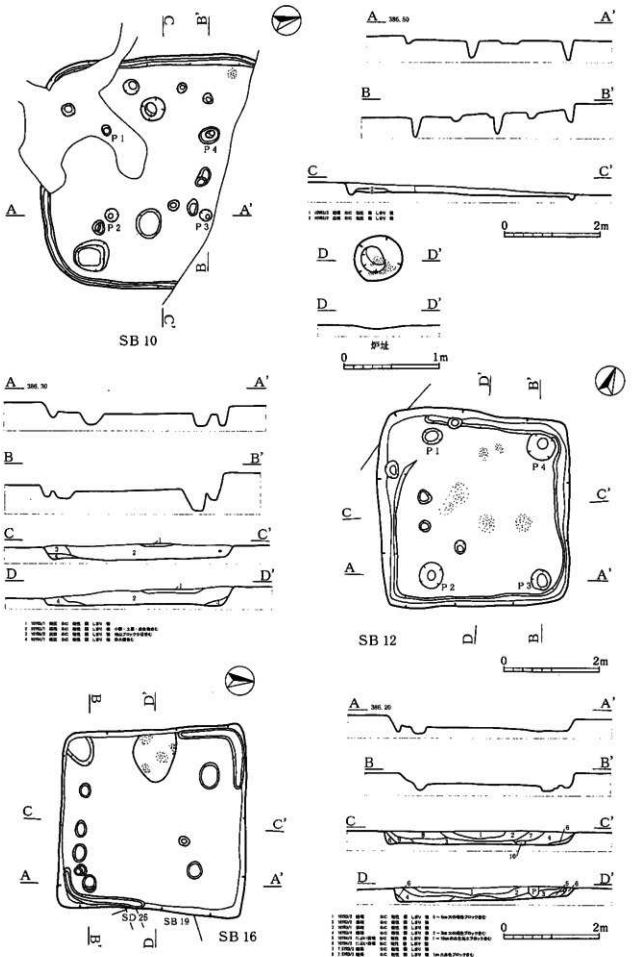
SB 40

SB 40　炭化物出土状況

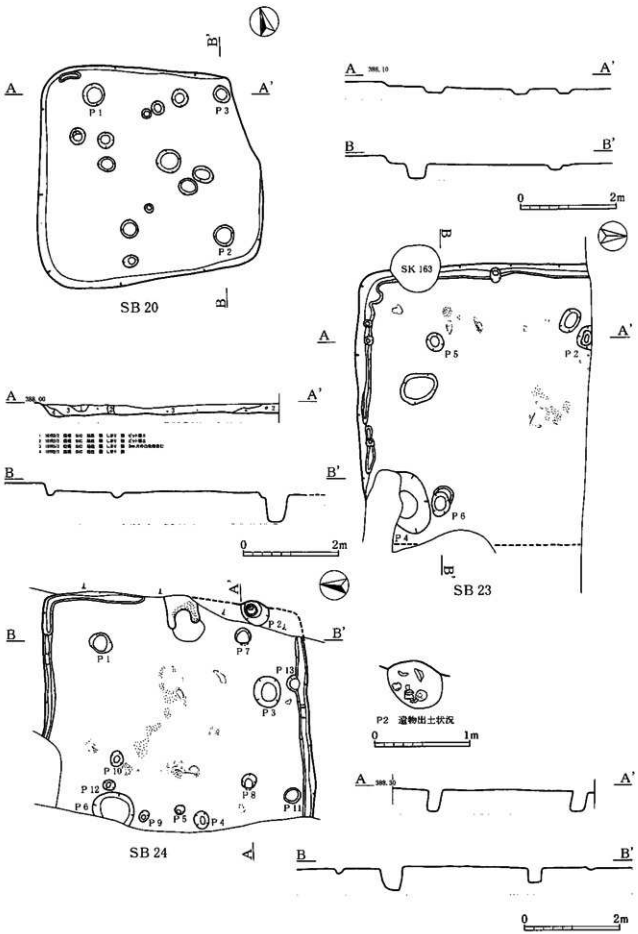


SB 31

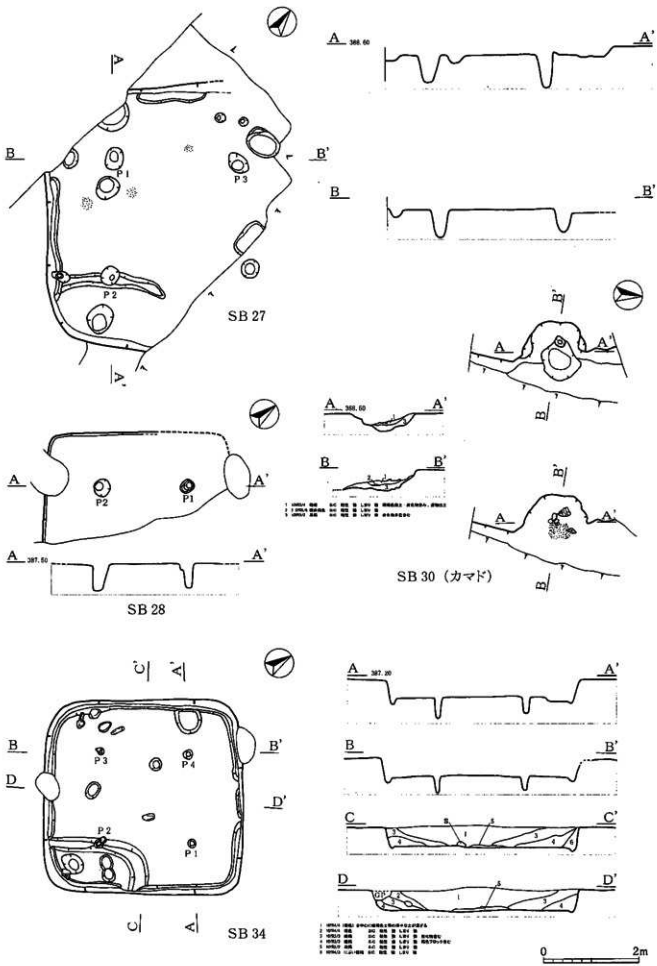
図版 2　SB31・40



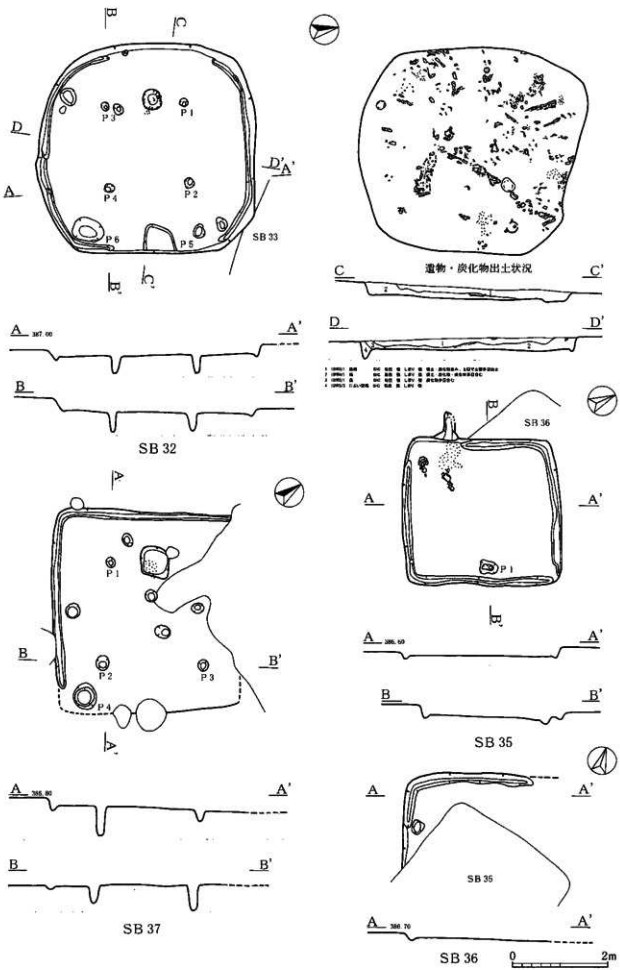
図版3　SB10・12・16



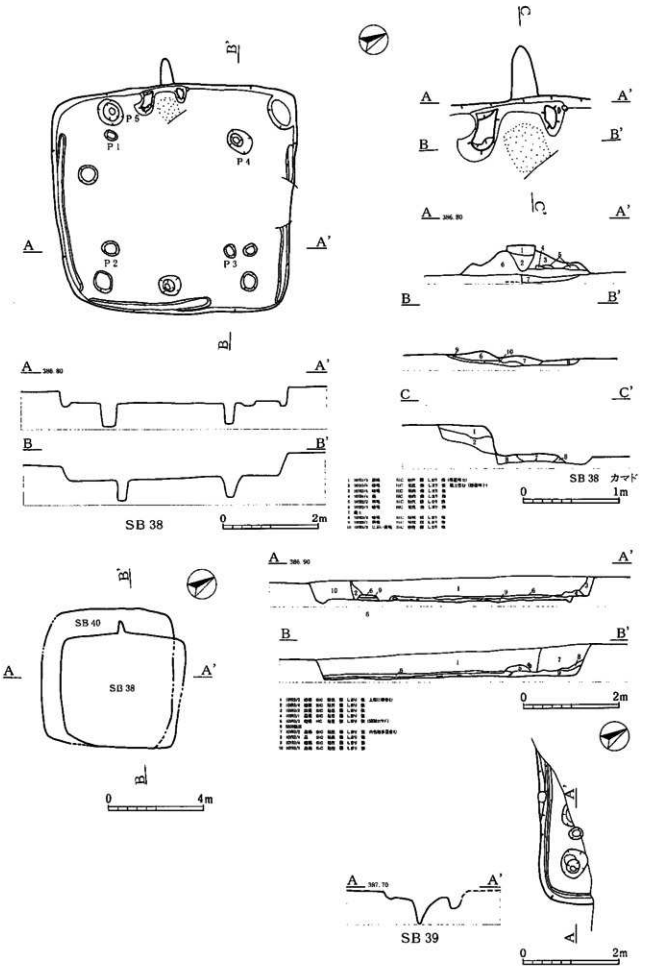
図版4　SB20・23・24



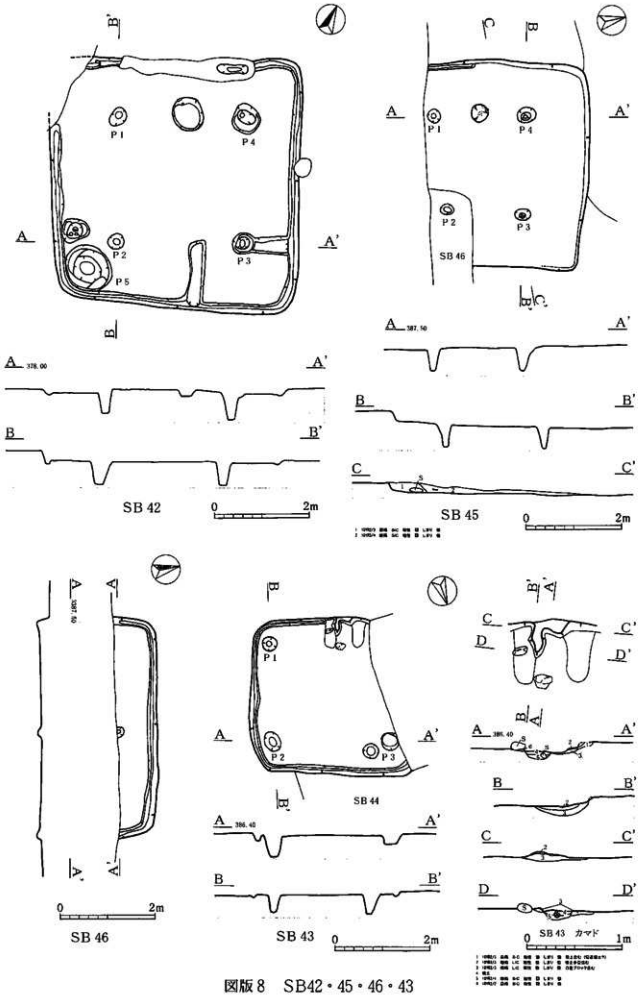
図版5　SB27・28・30・34



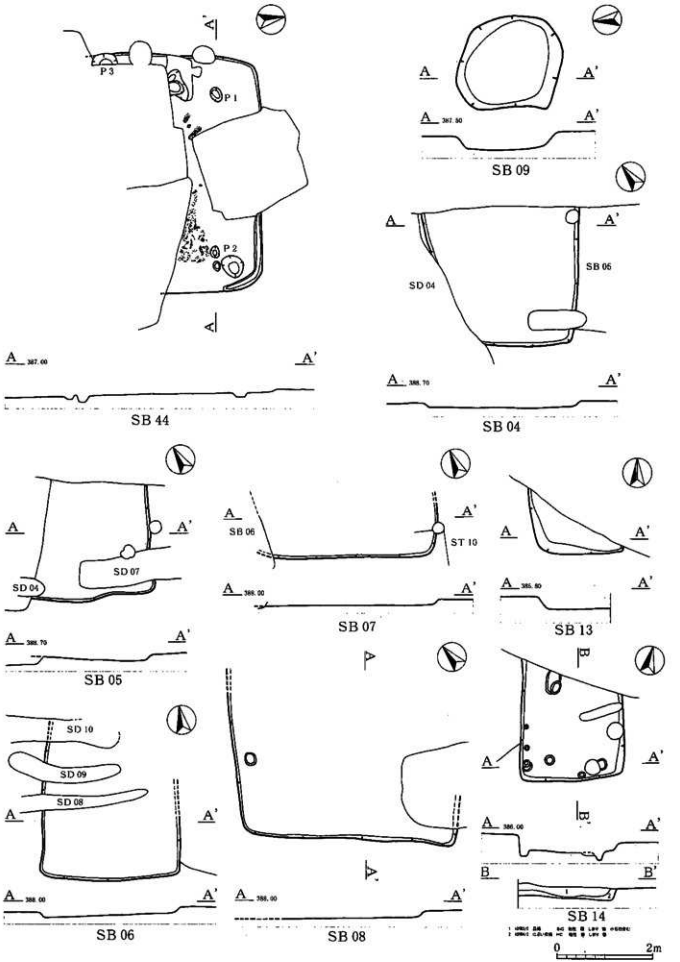
図版6　SB32・35～37



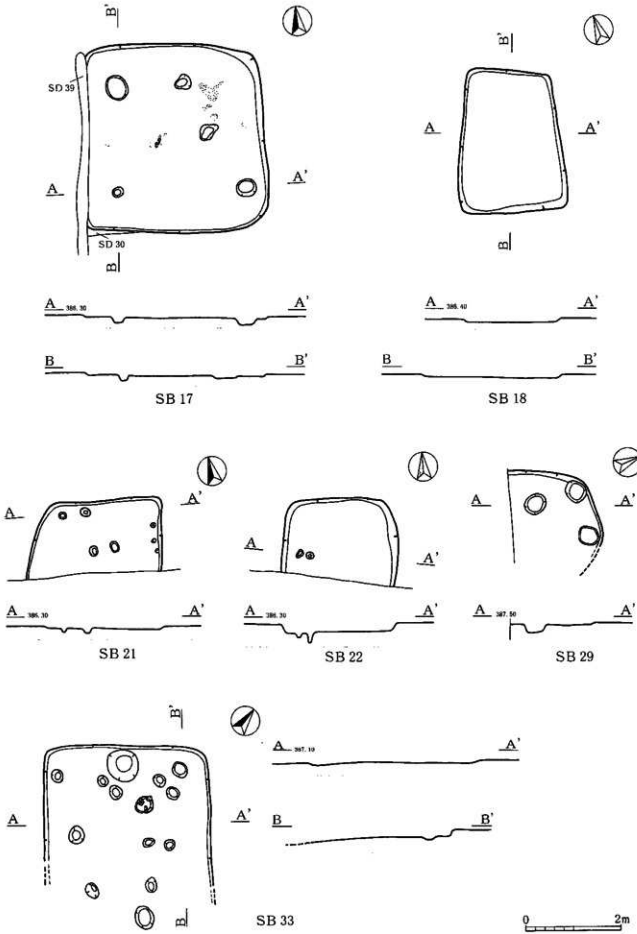
図版7　SB38・39



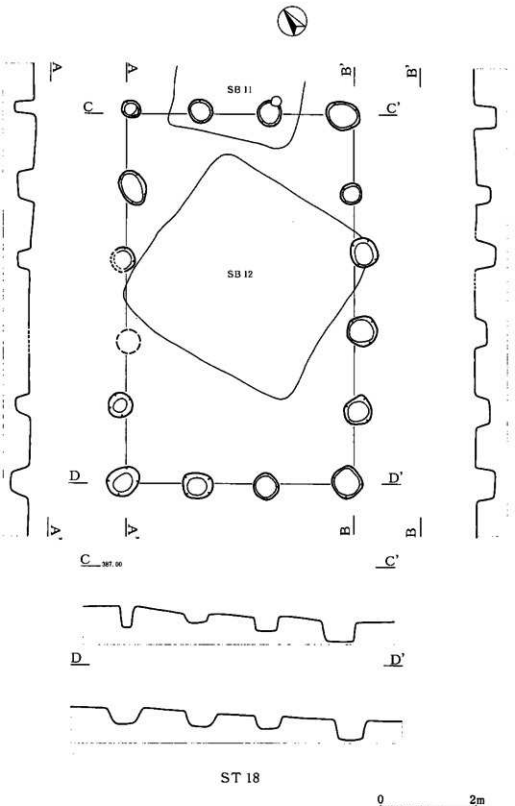
図版8　SB42・45・46・43



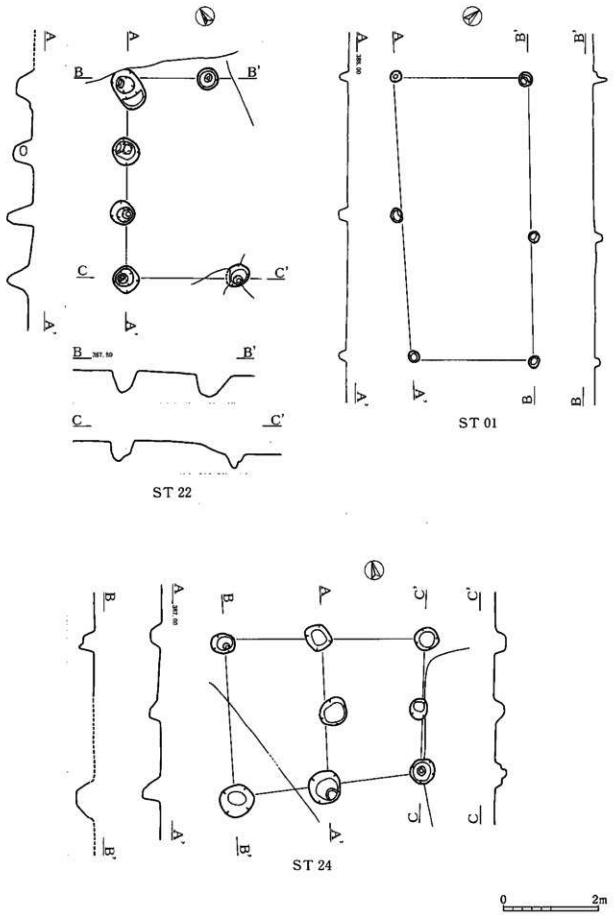
図版9　SB44・04～09・13・14



図版10　SB17・18・21・22・29・33



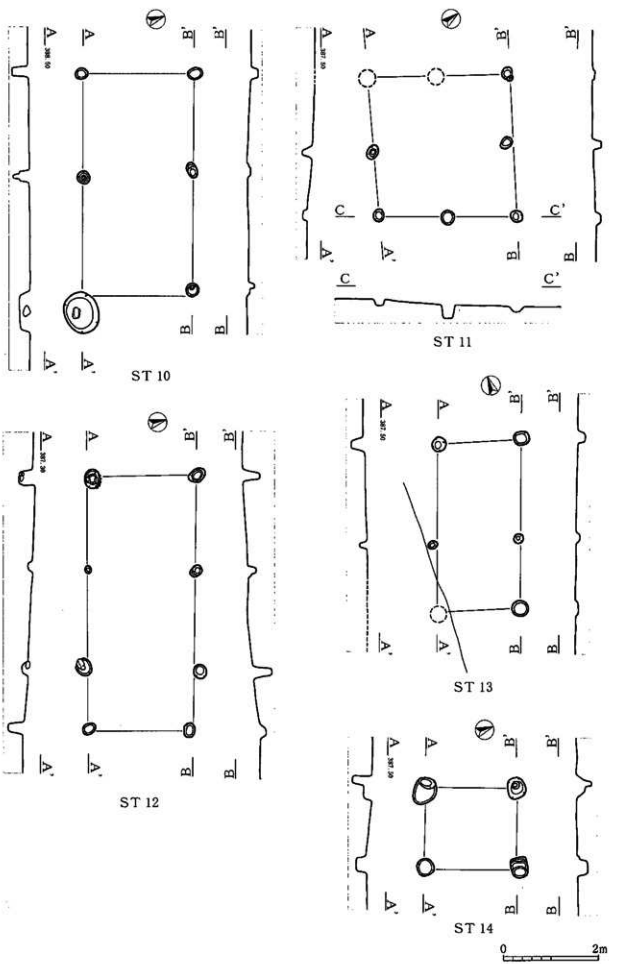
図版11 ST18



図版12　ST22・24・01

図版13　ST02~05

図版14 ST06~09

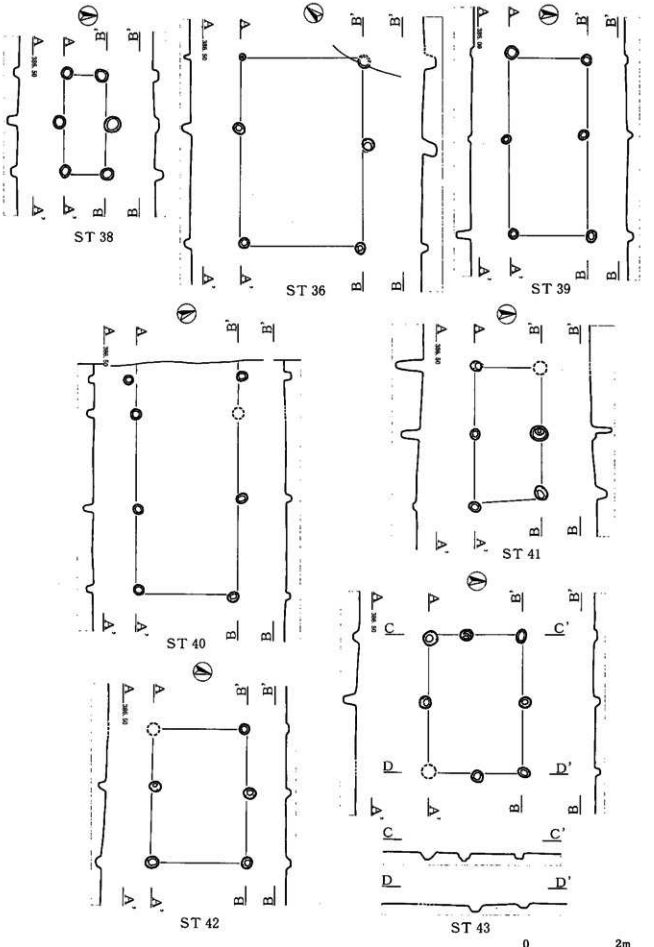


図版15　ST10~14

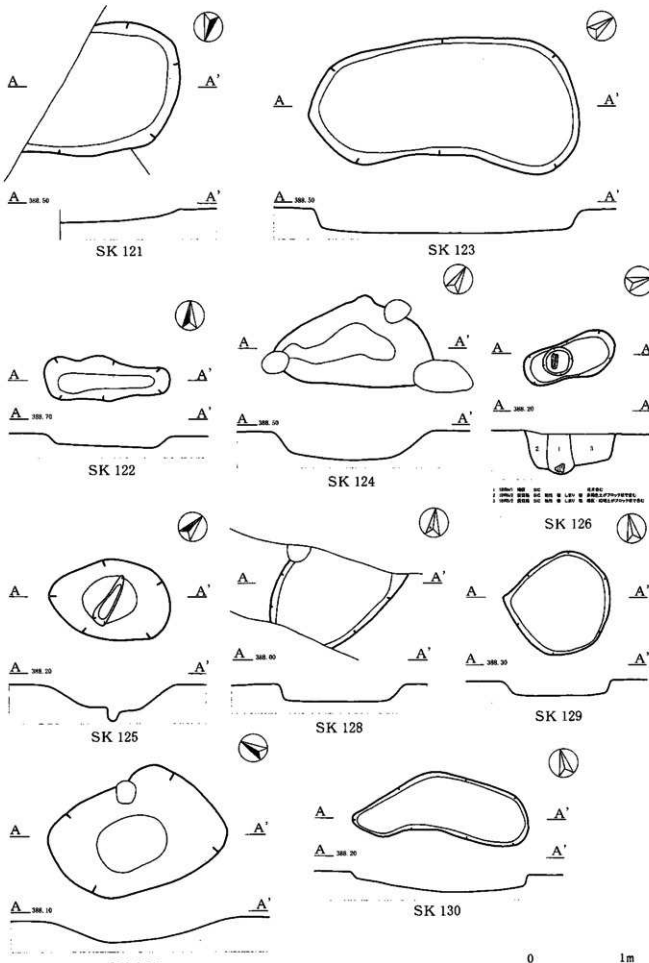
図版16　ST15~17・19・21・25・26

図版17　ST20・23・27～30

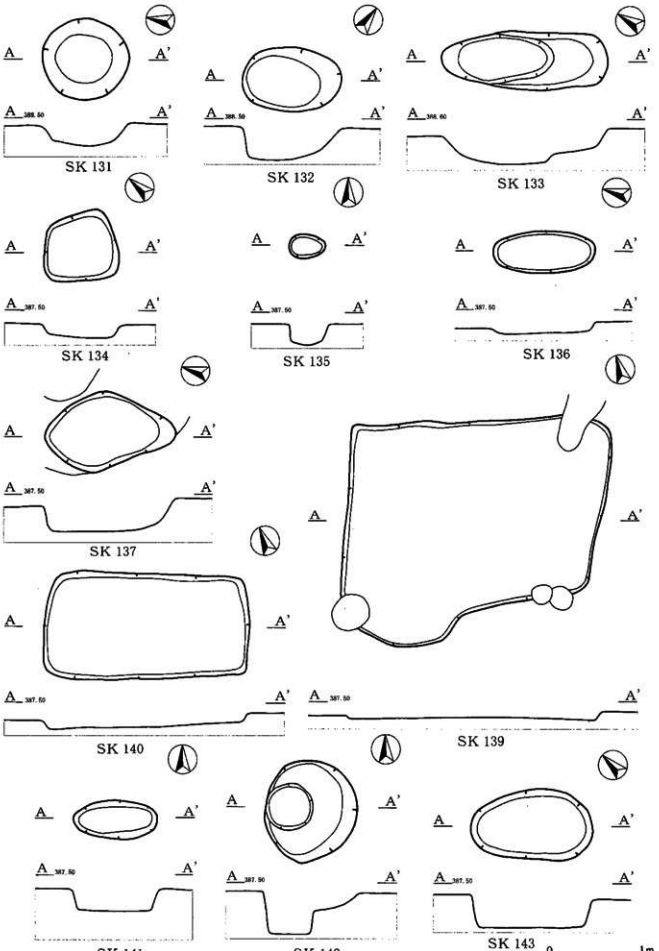
図版18　ST31～35・37



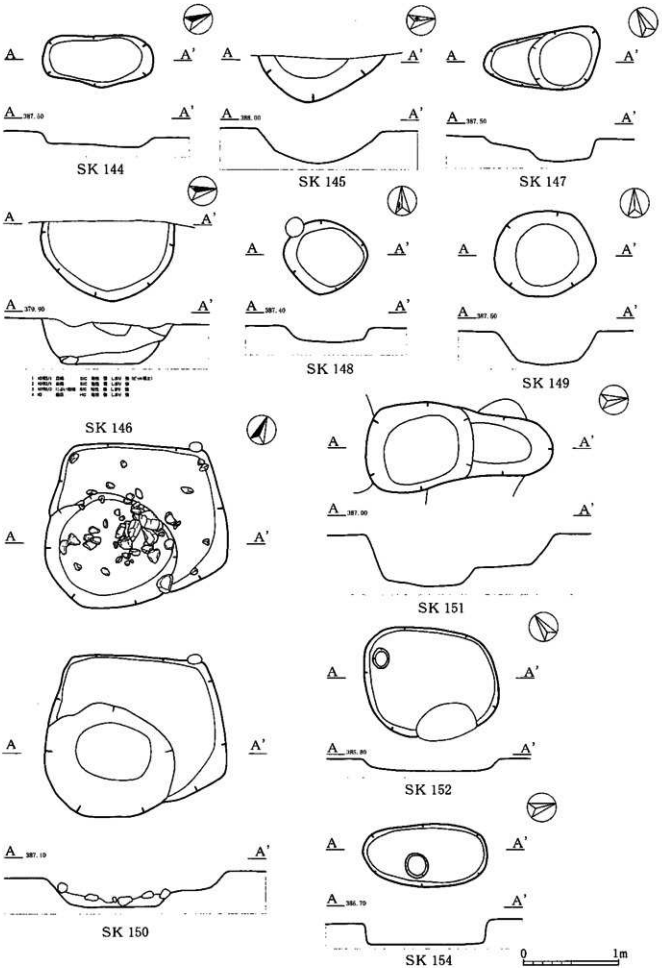
図版19　ST36・38～43



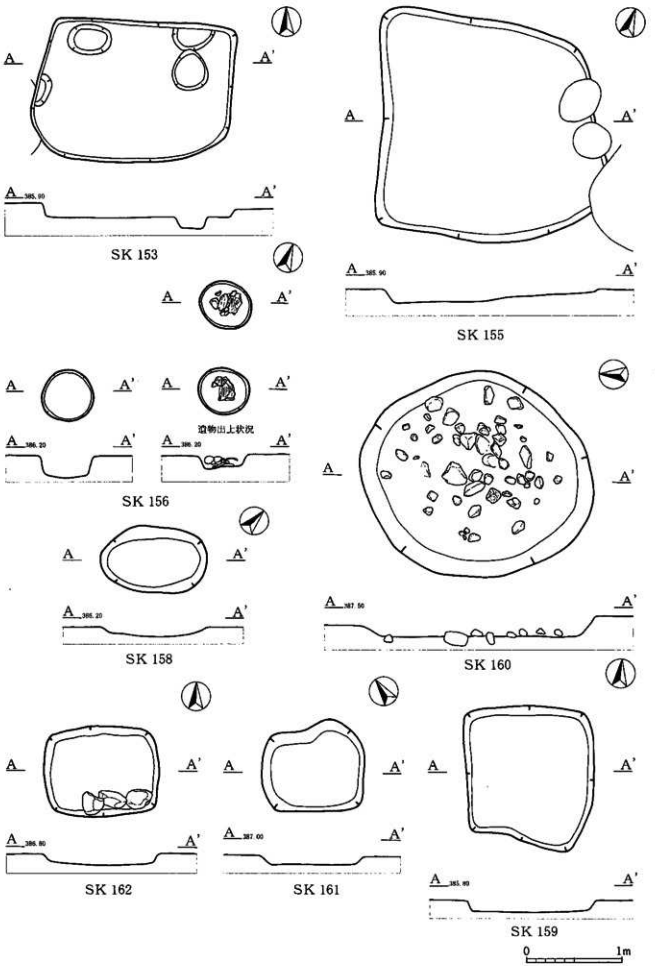
図版20　SK121~130



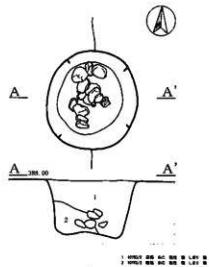
図版21　SK131～137・139～143



図版22　SK144～152・154

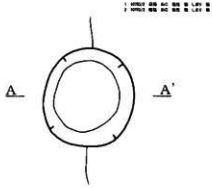


図版23　SK153・155・156・158～162

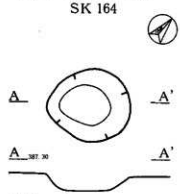


SK 164

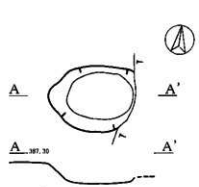
SK 165



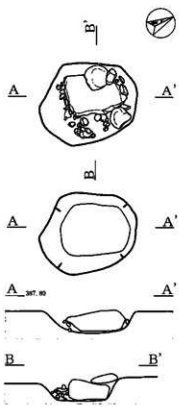
SK 163



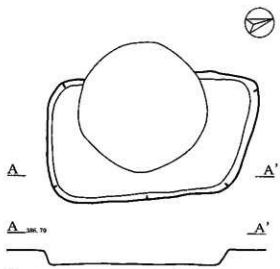
SK 166



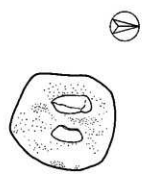
SK 167



SK 168

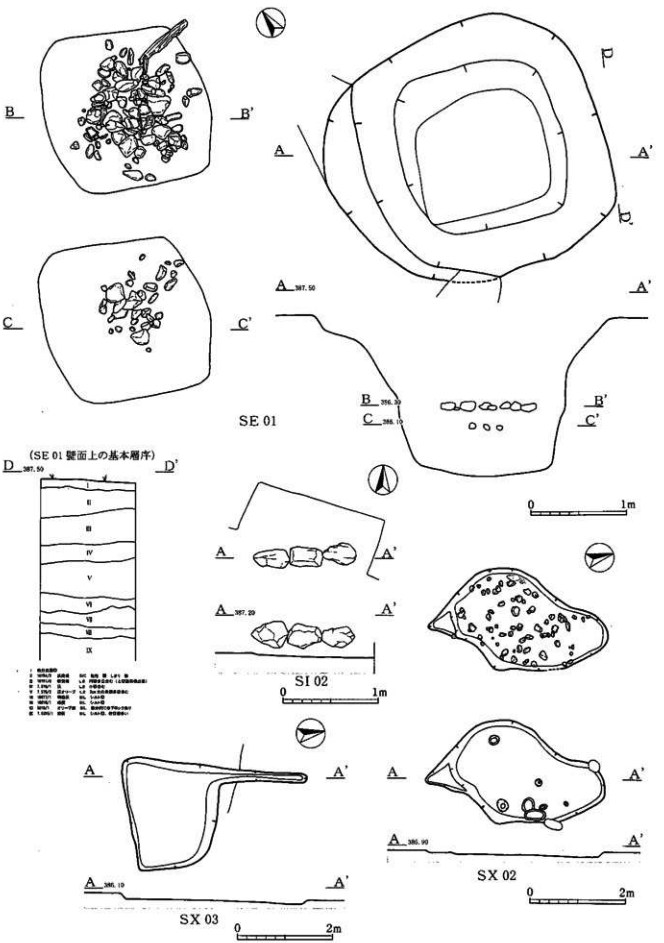


SK 170

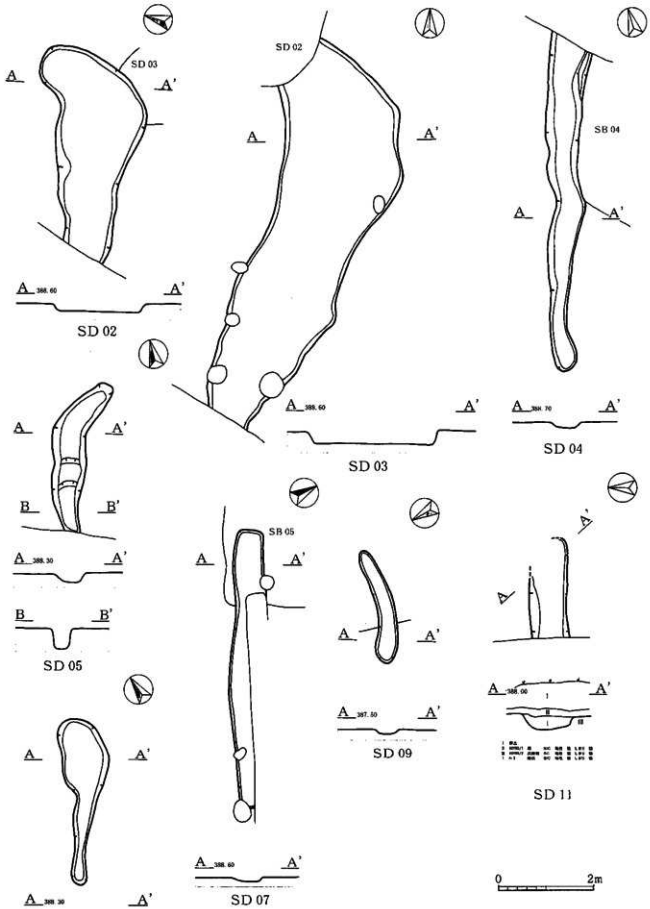


SK 169

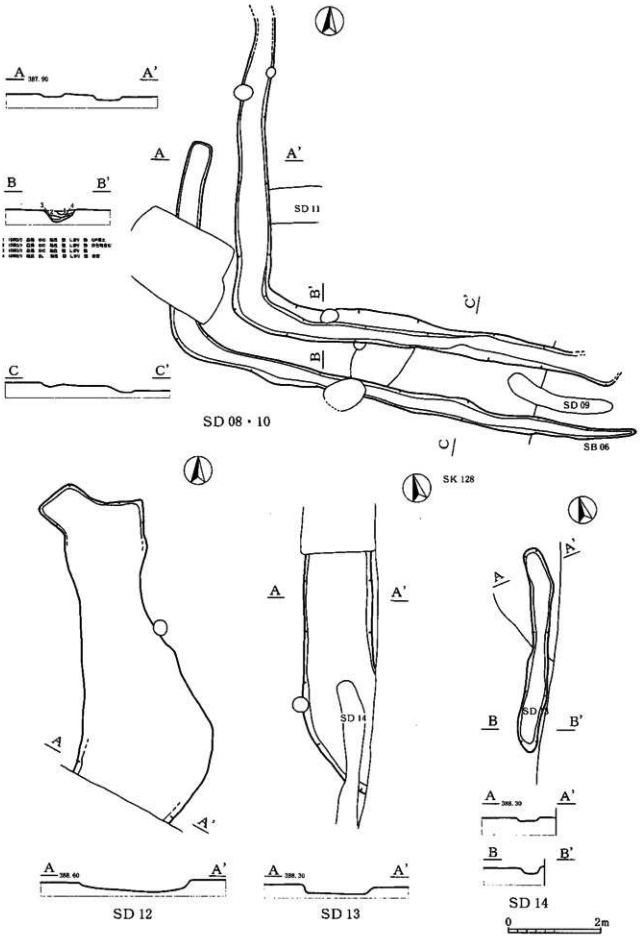
図版24　SK163~170



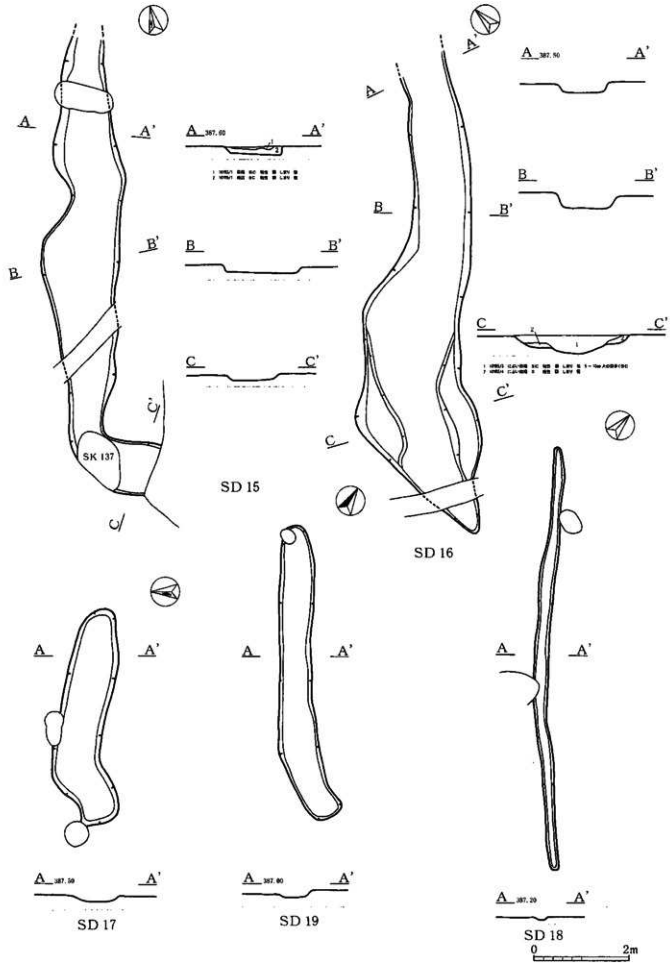
図版25　SE01・SI02・SX02・03



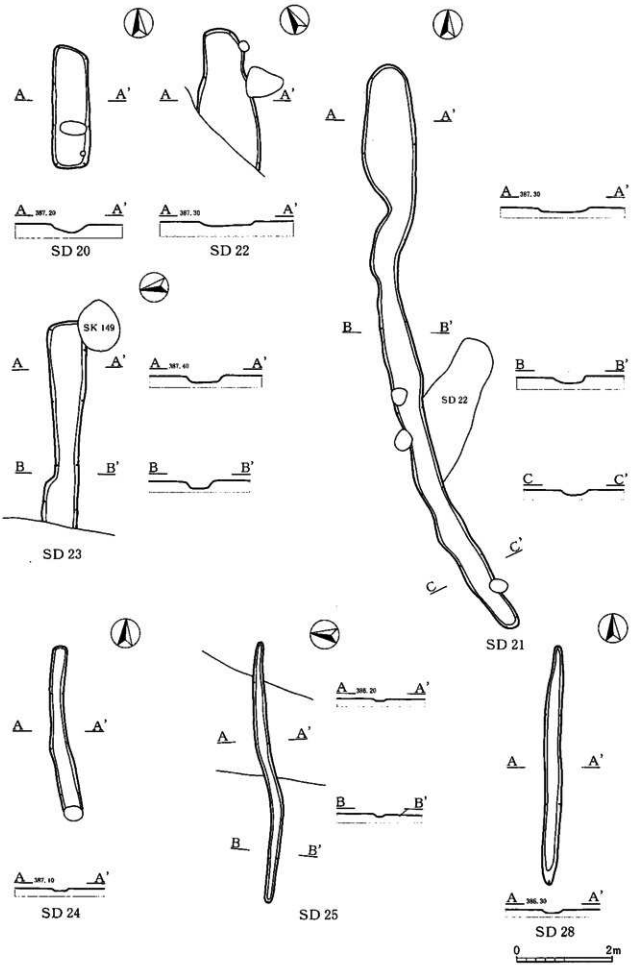
図版26　SD02～07・09・11



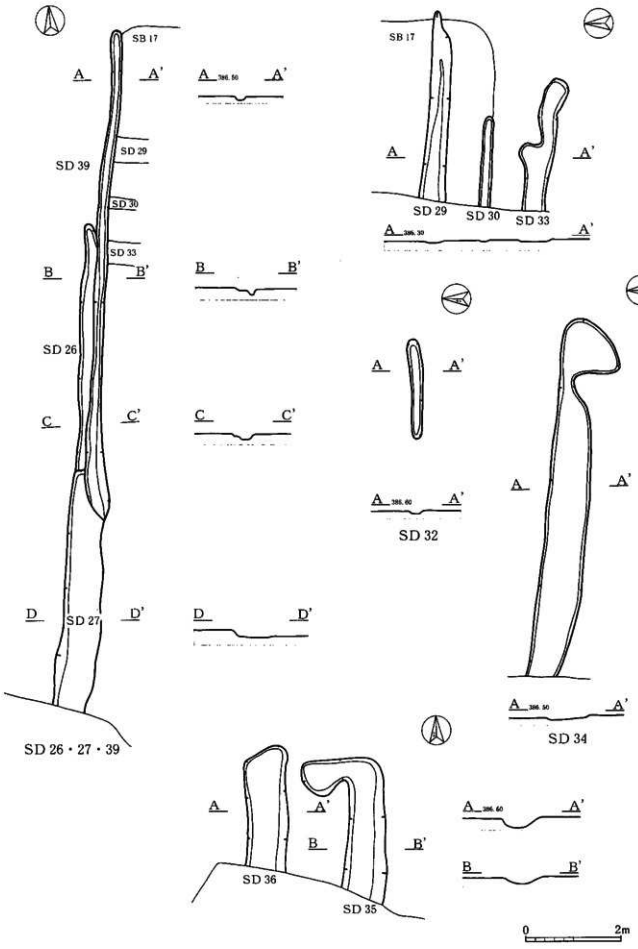
図版27　SD08・10・12～14



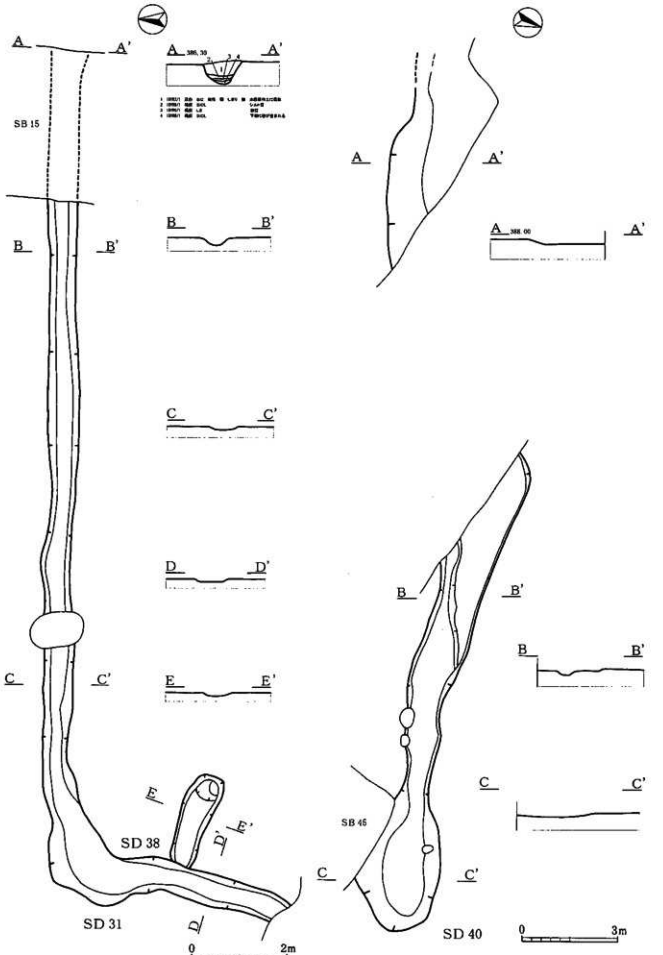
図版28　SD15~19



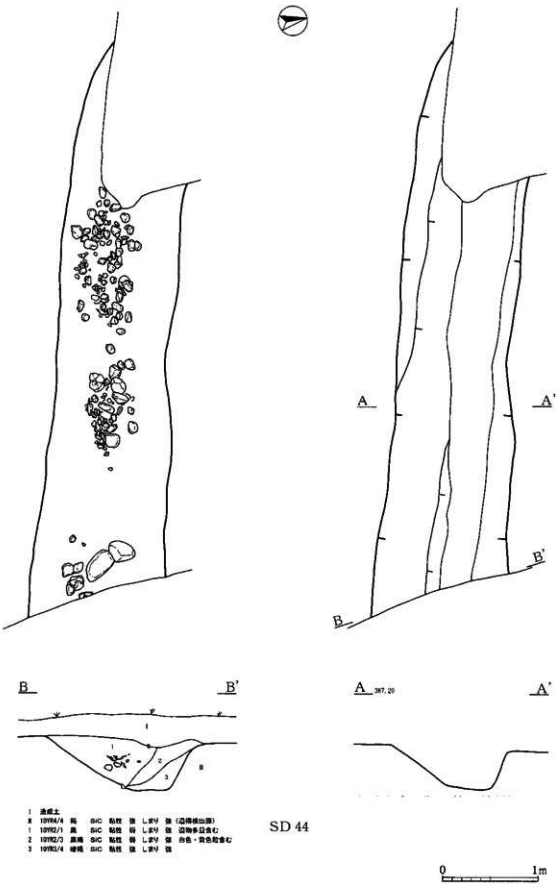
図版29　SD20～25・28



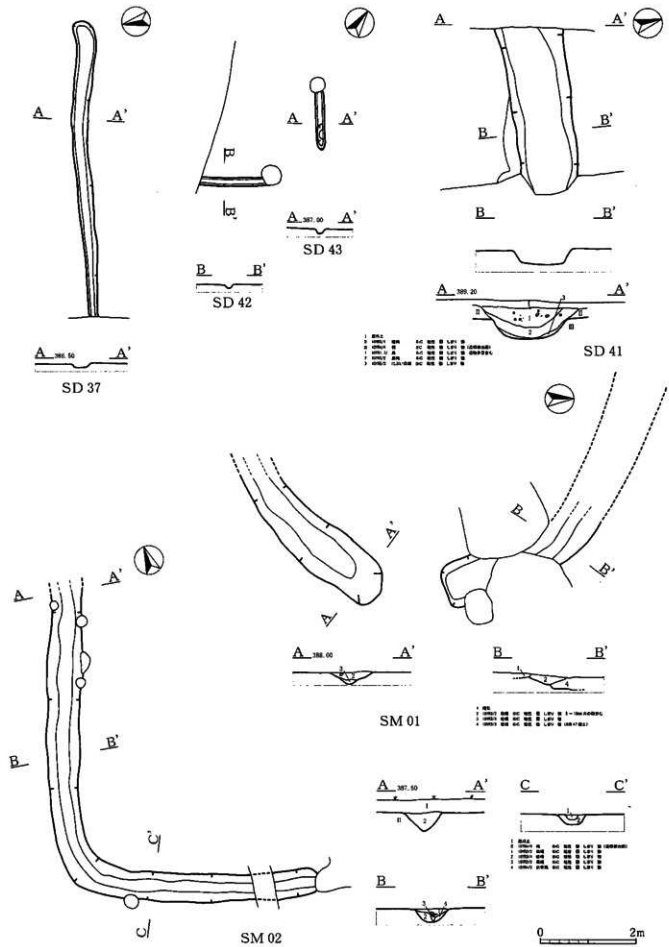
図版30　SD26・27・29・30・32～36・39



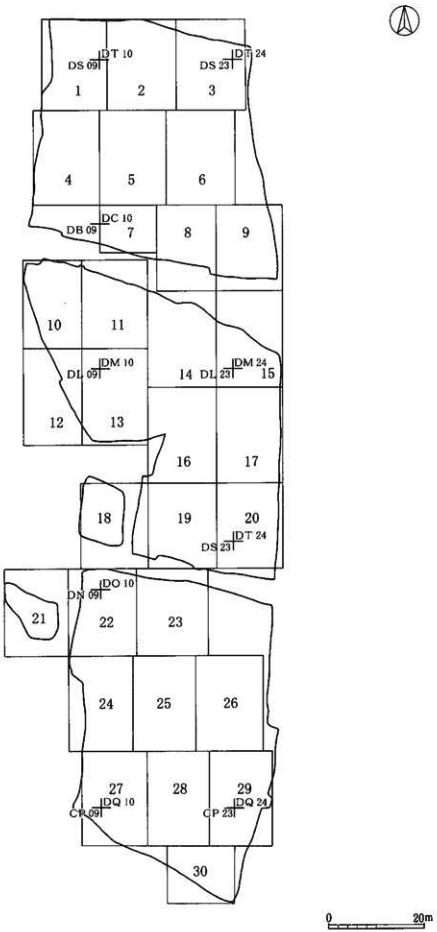
図版31　SD31・38・40



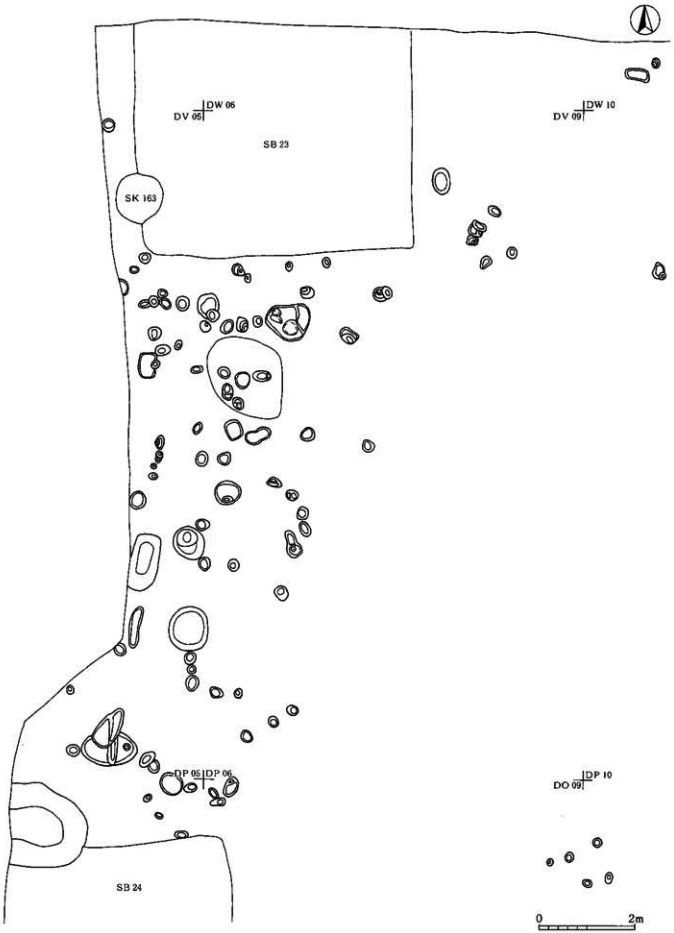
図版32　SD44



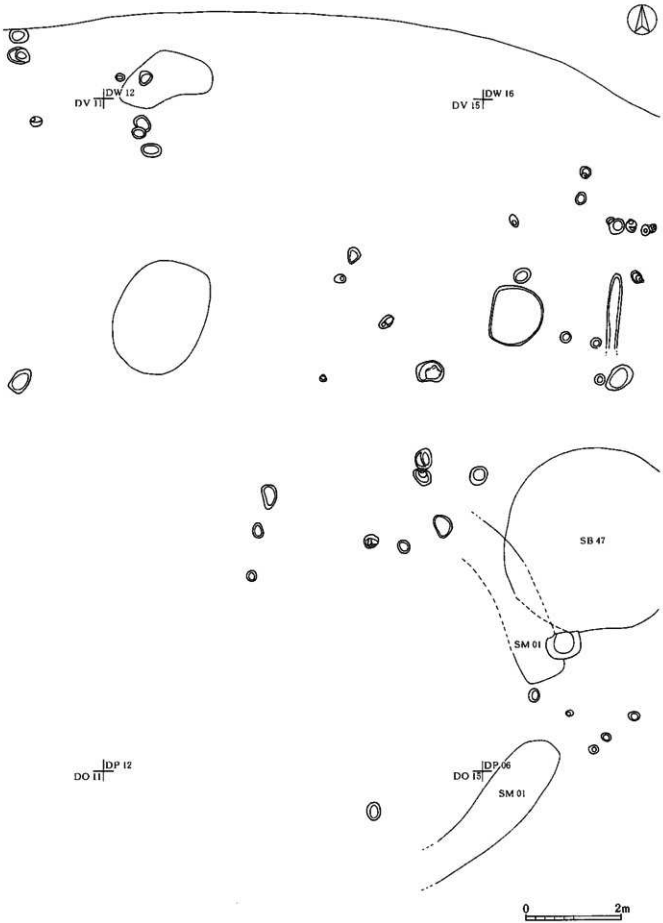
図版33　SD37・41～43　SM01・02



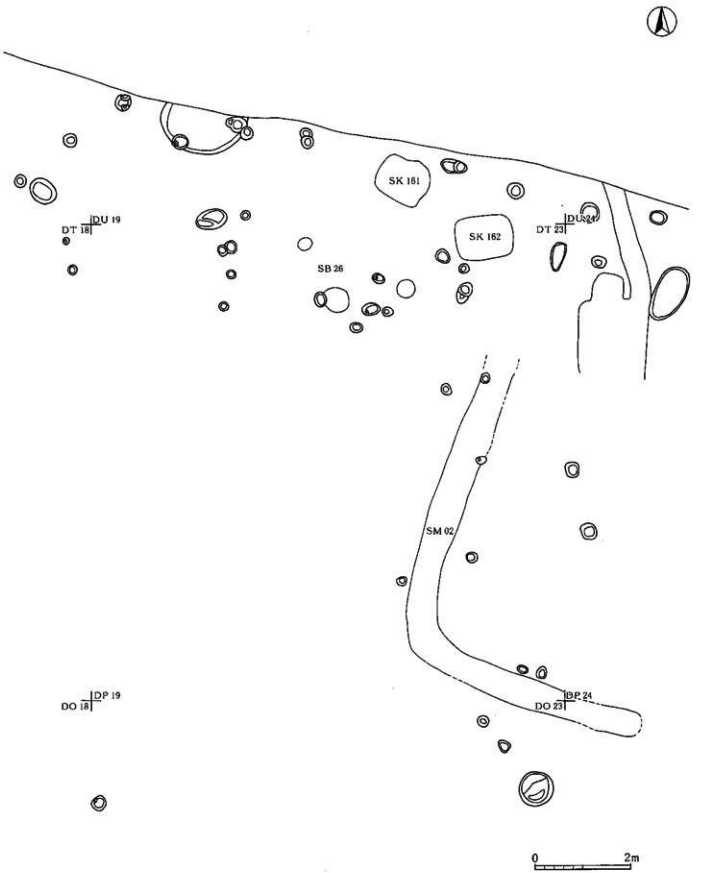
図版34　周辺ピット割付図



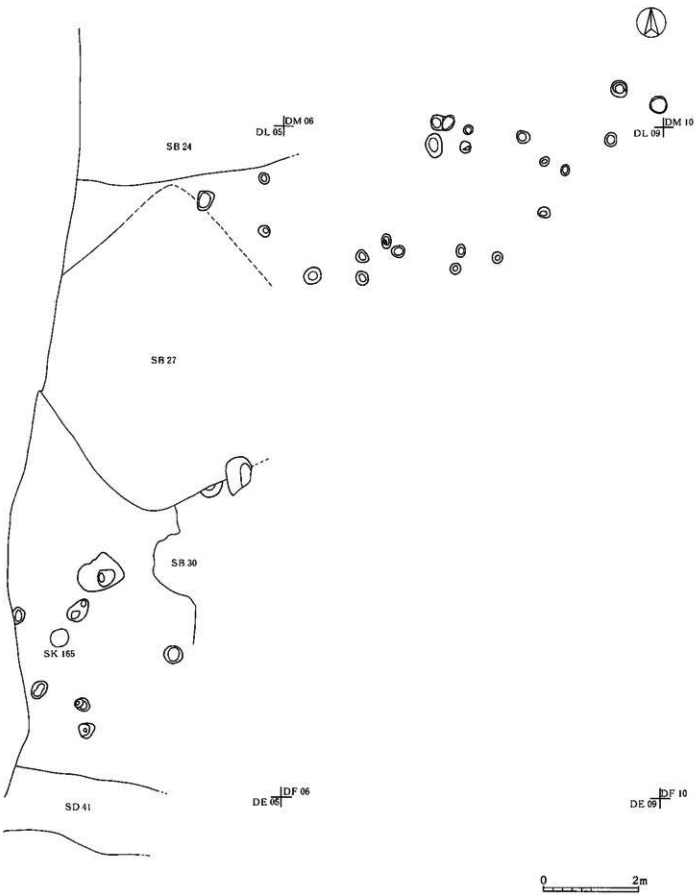
図版35　周辺ピット図1



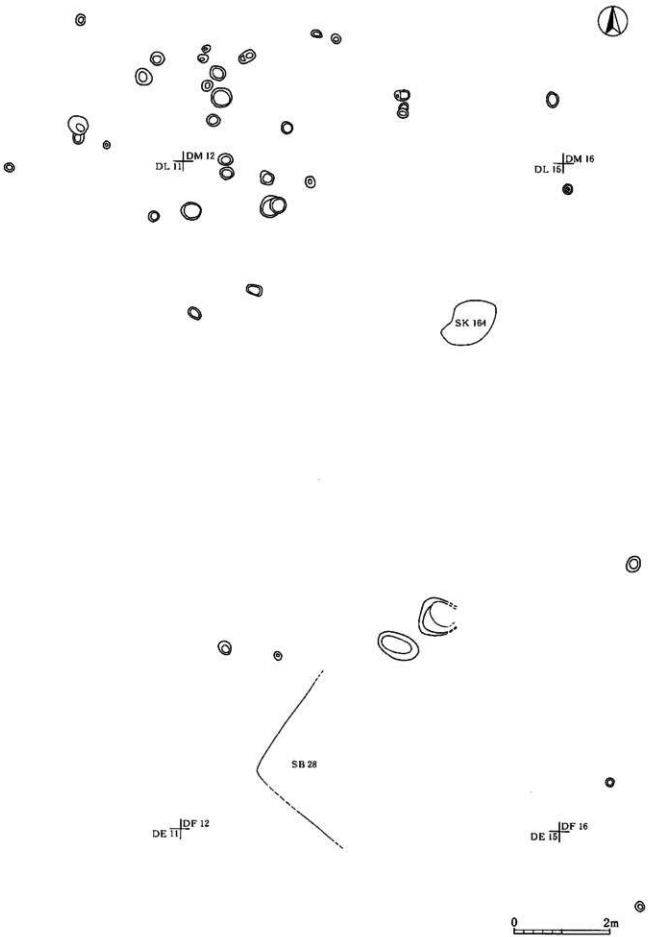
図版36　周辺ピット図2



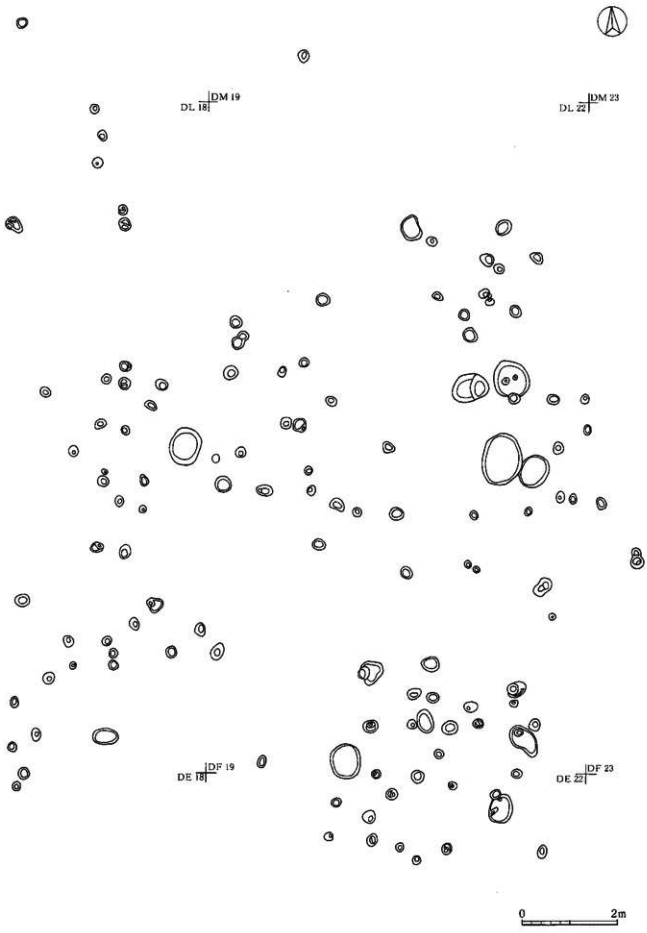
図版37　周辺ピット図3



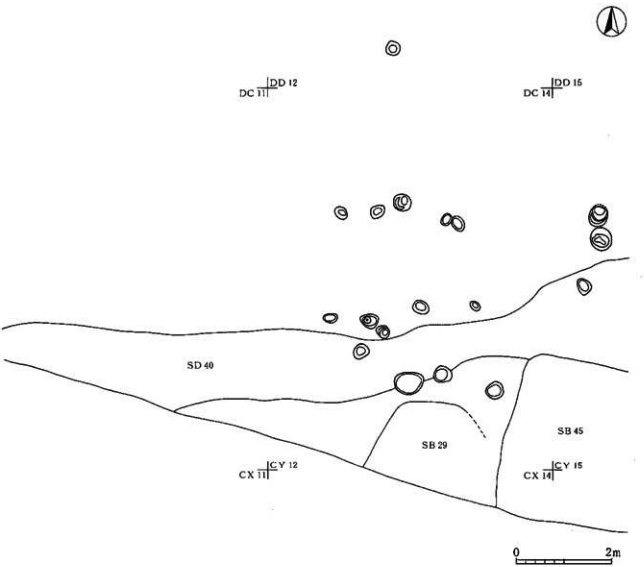
図版38　周辺ピット図4



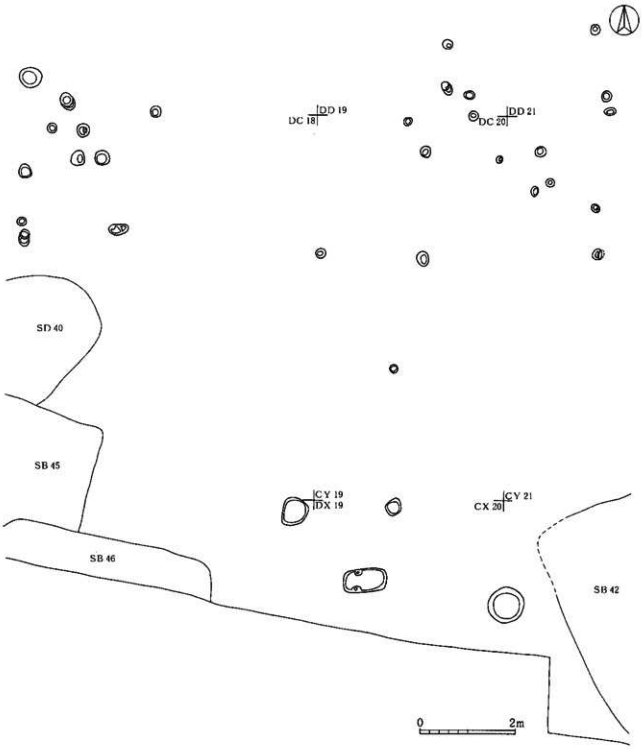
図版39　周辺ピット図5



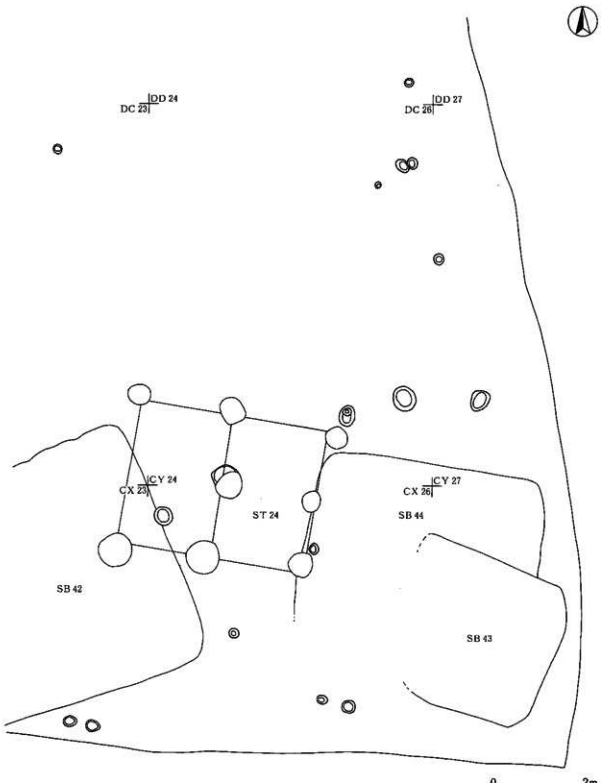
図版40　周辺ピット図6



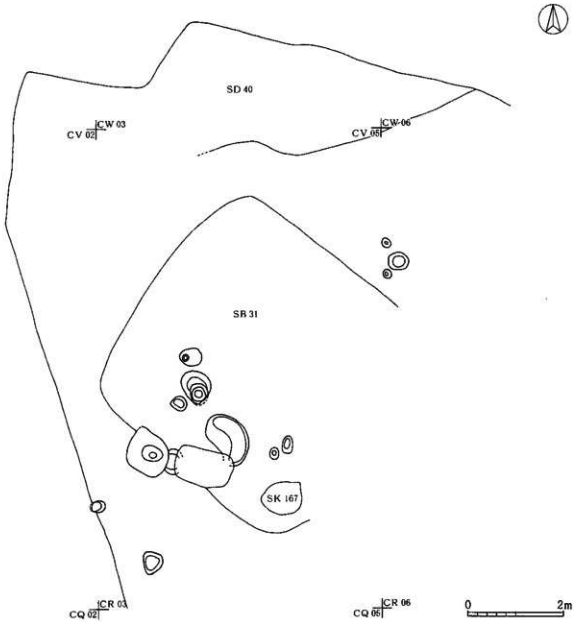
図版41　周辺ピット図7



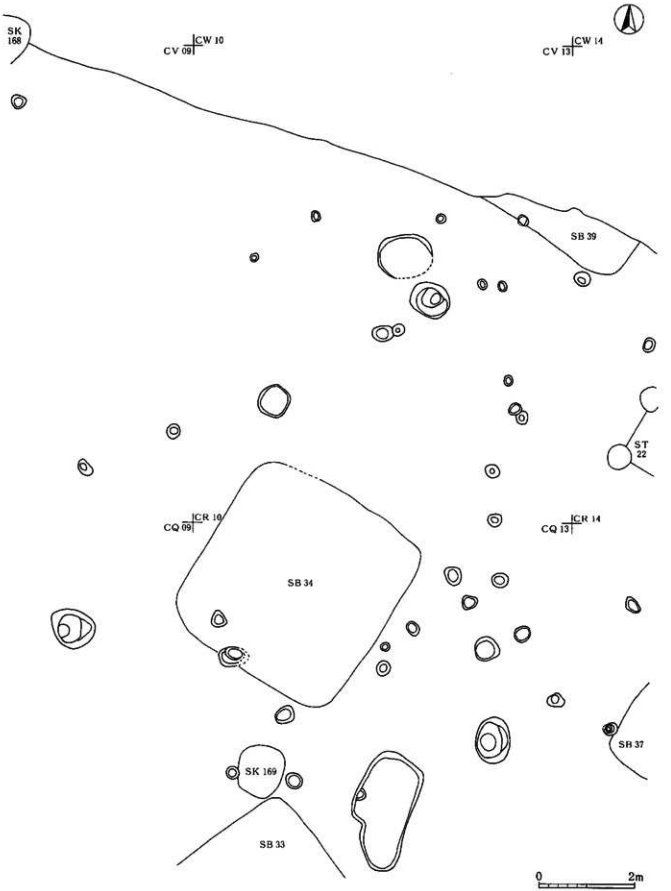
図版42　周辺ピット図8



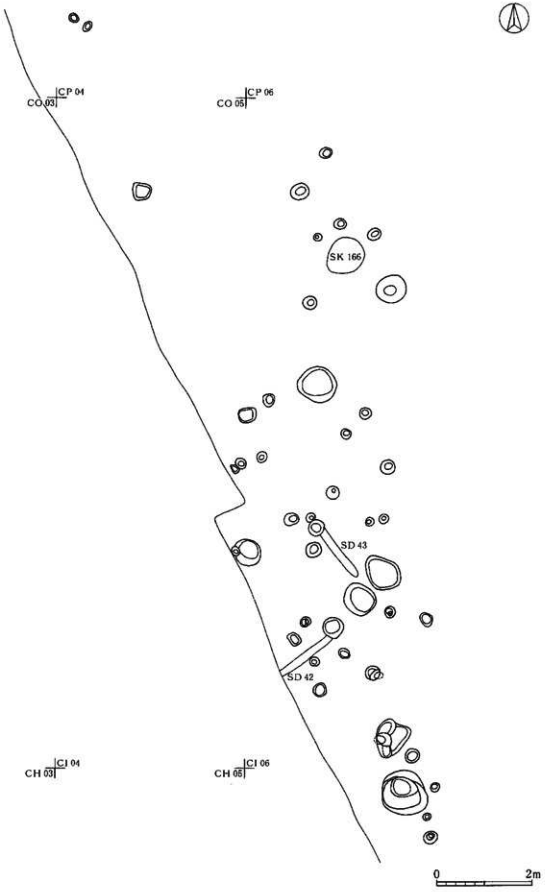
図版43　周辺ピット図9



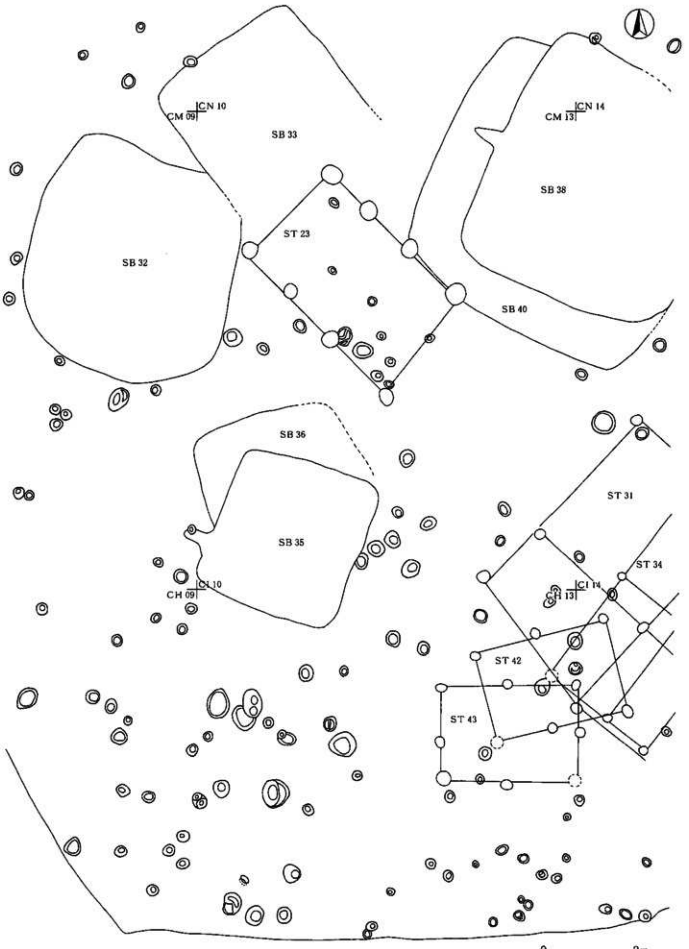
図版44　周辺ピット図10



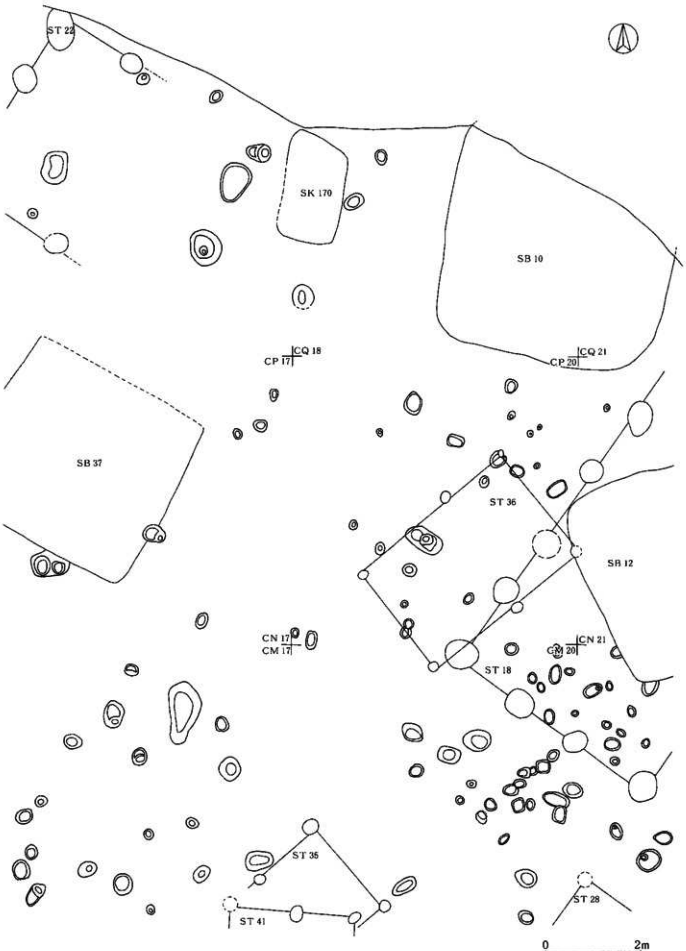
図版45　周辺ピット図11



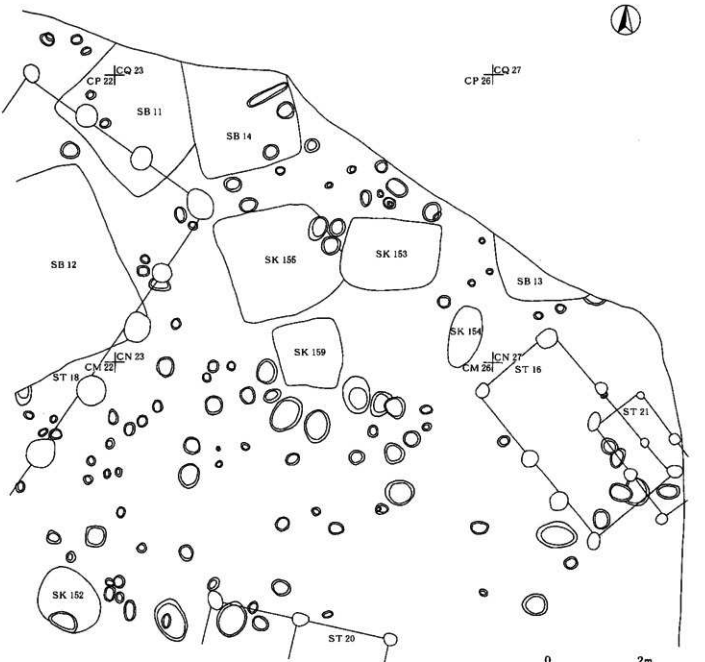
図版46　周辺ピット図12



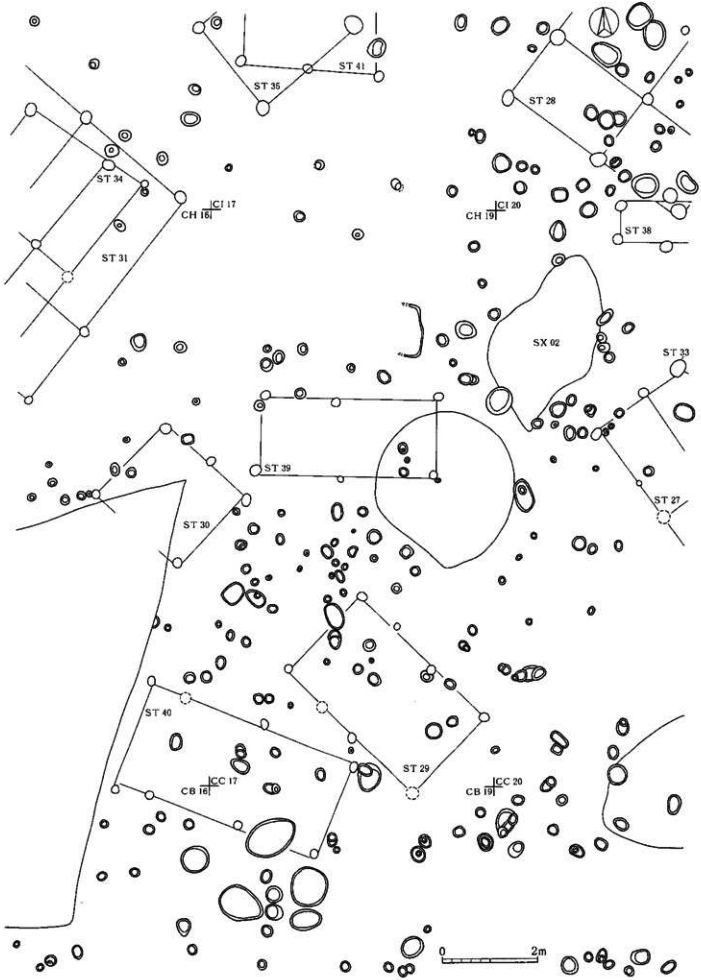
図版47　周辺ピット図13



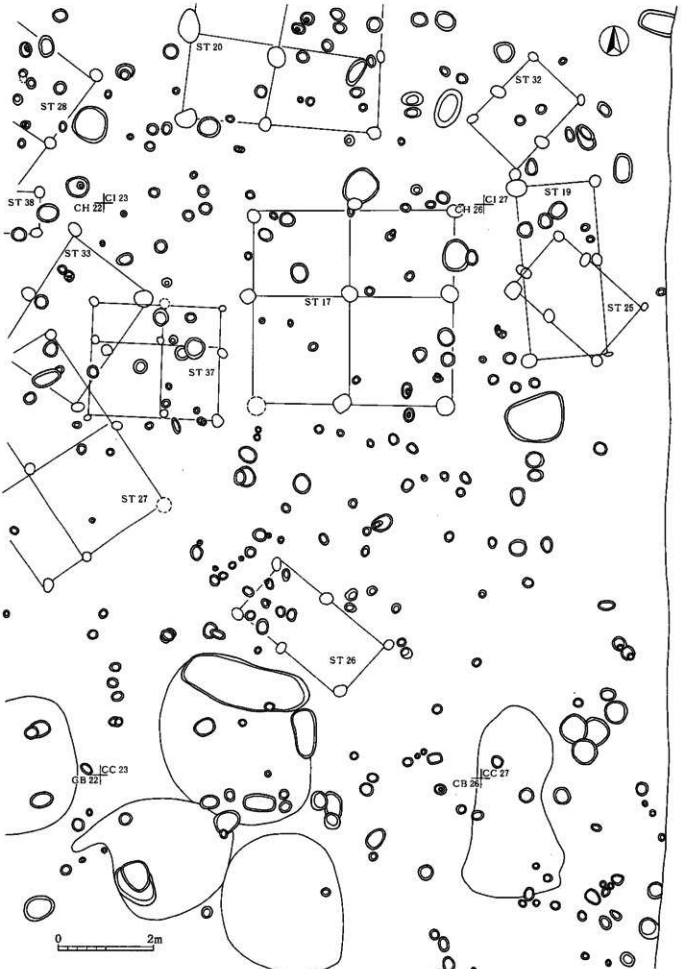
図版48　周辺ピット図14



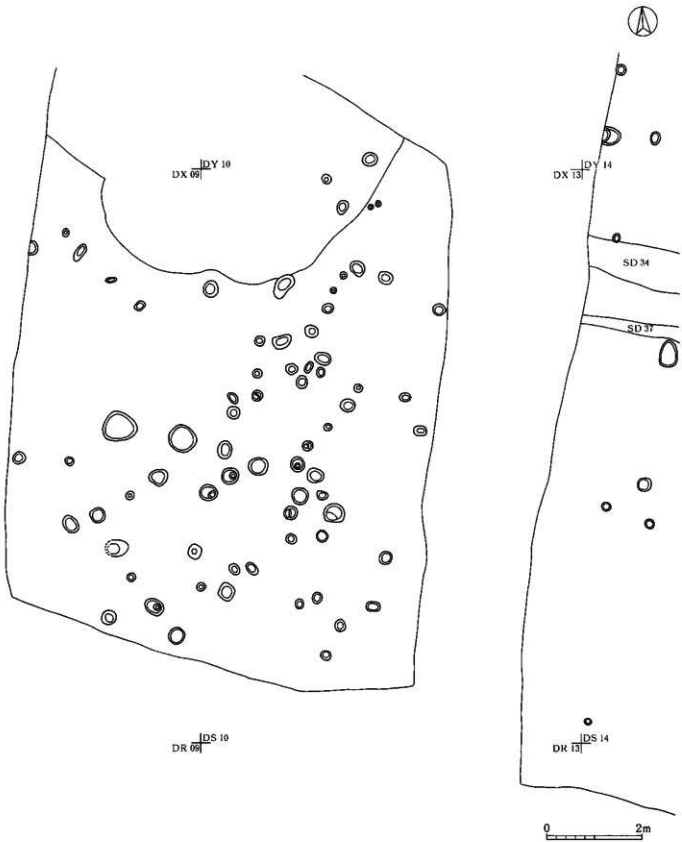
図版49　周辺ピット図15



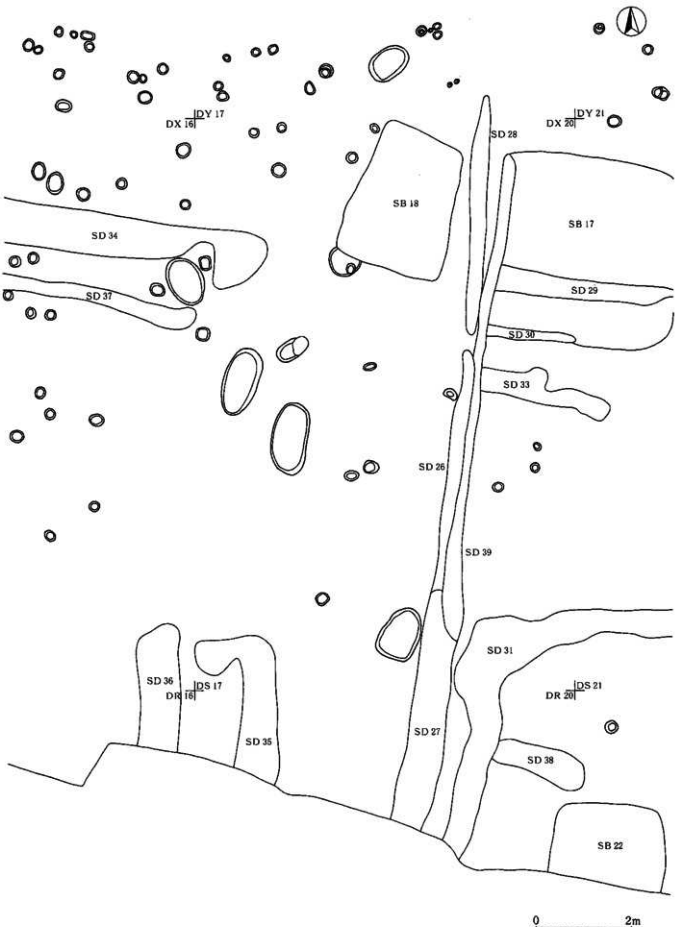
図版50　周辺ピット図16



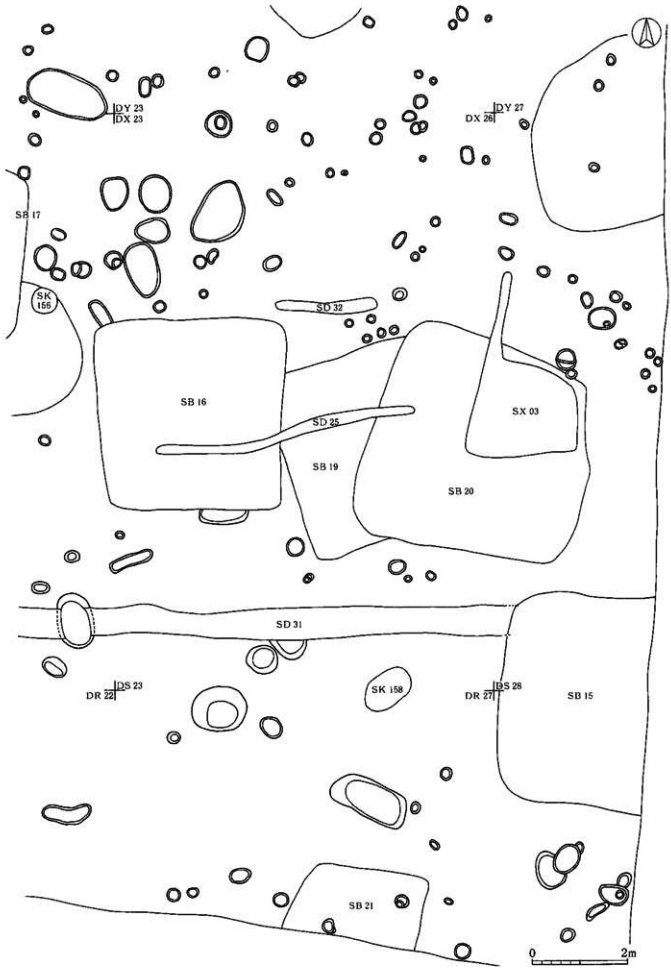
図版51　周辺ピット図17



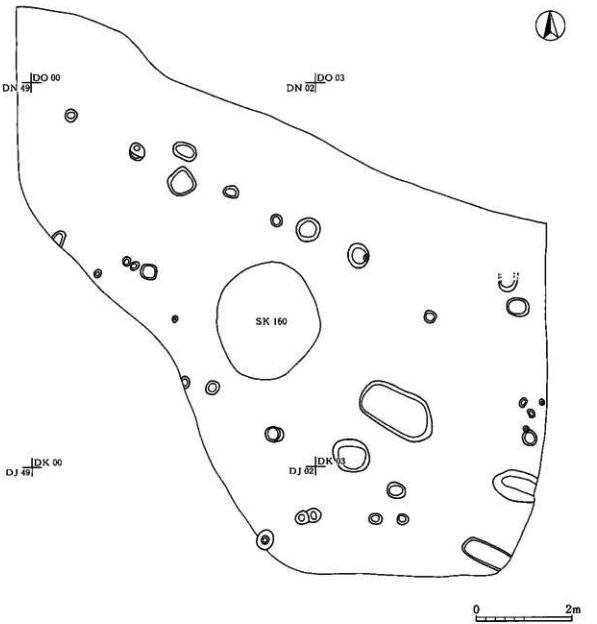
図版52　周辺ピット図18



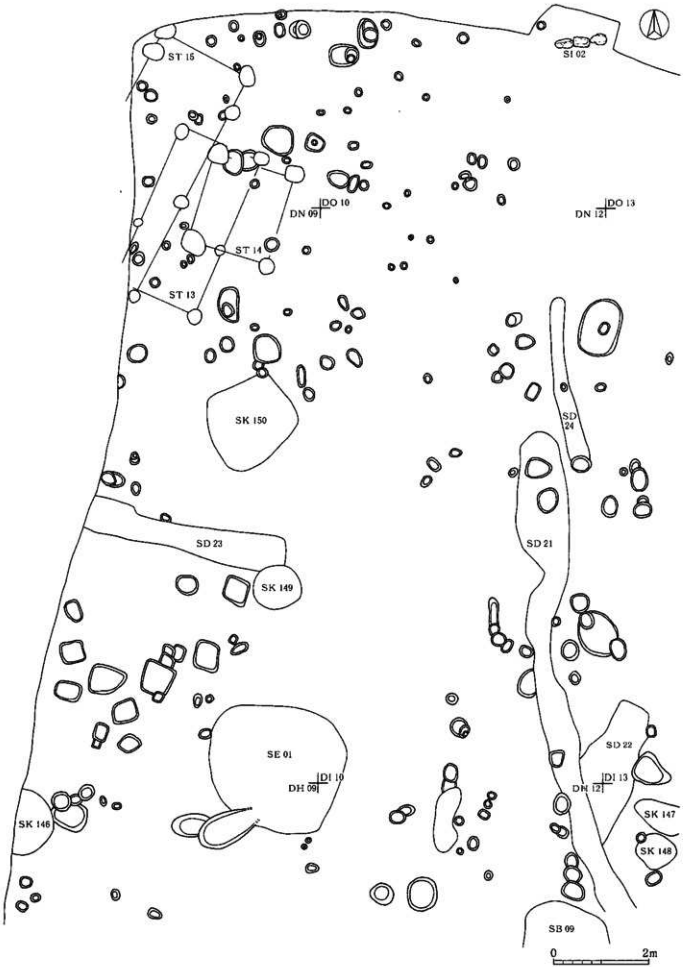
図版53　周辺ピット図19



図版54　周辺ピット図20

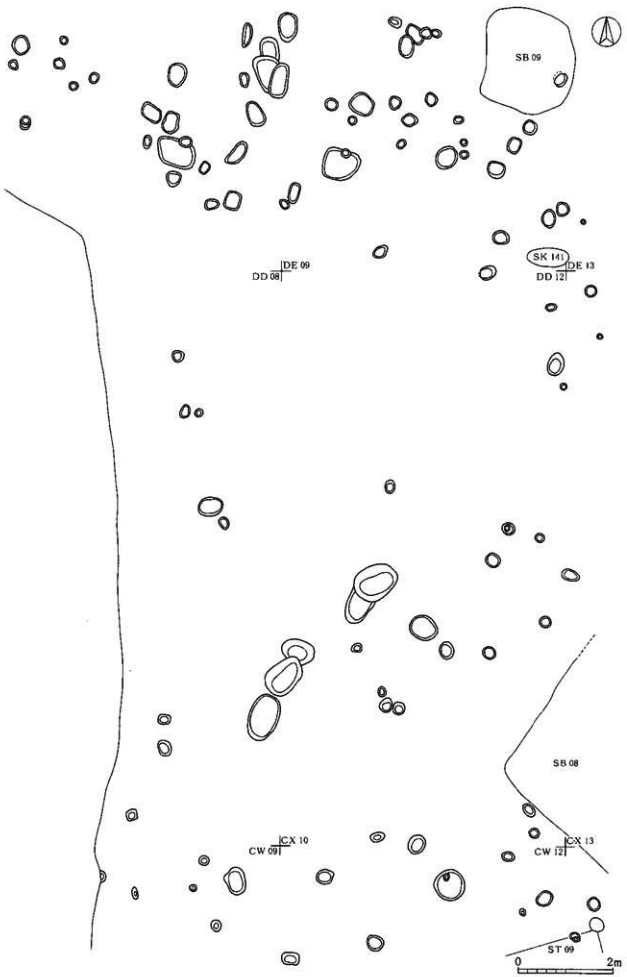


図版55　周辺ピット図21

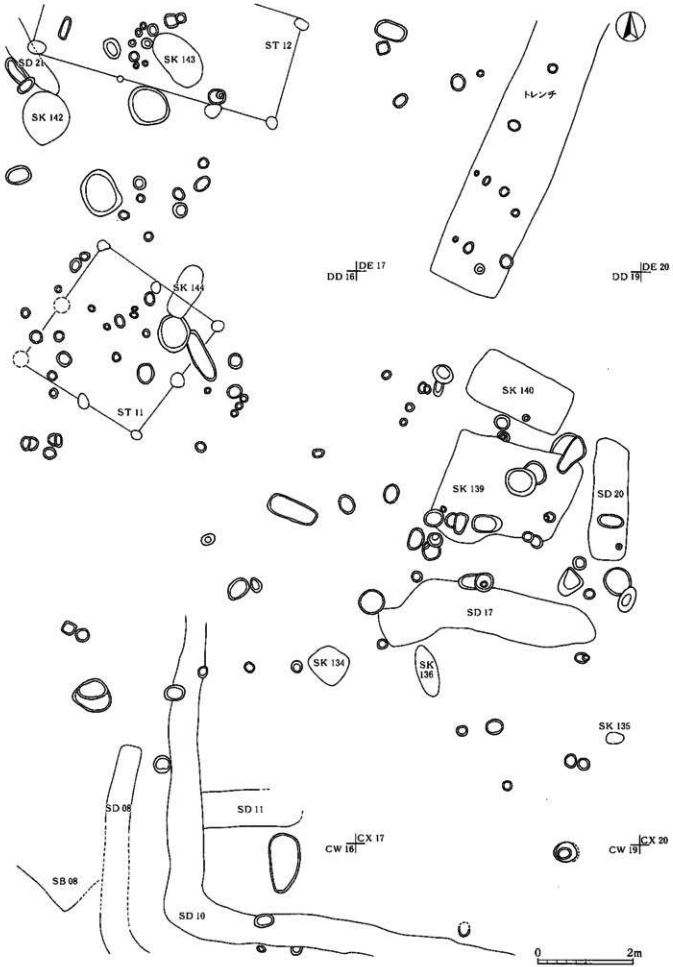


図版56　周辺ピット図22

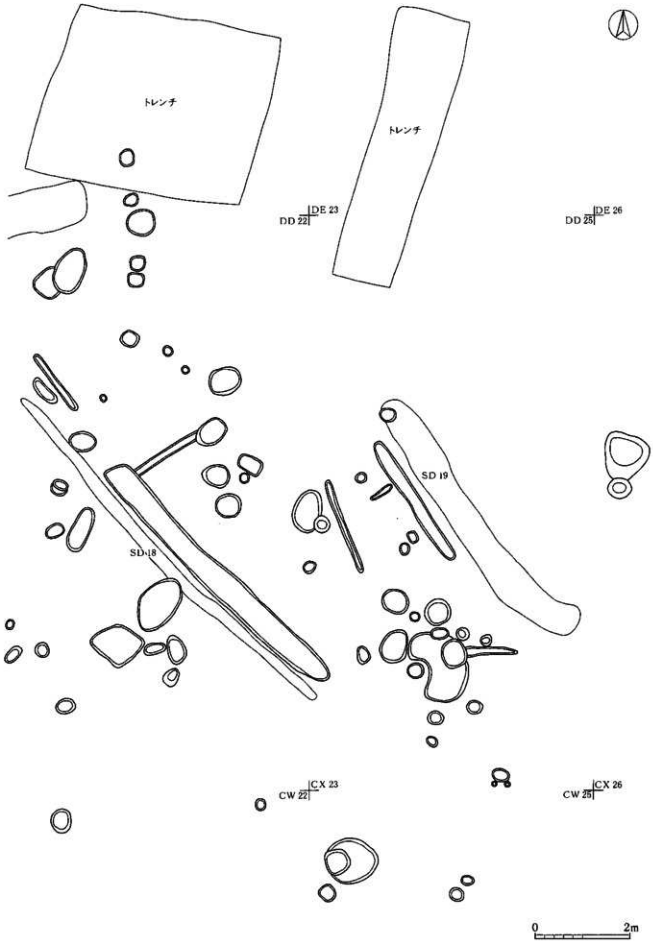
図版57　周辺ピット図23



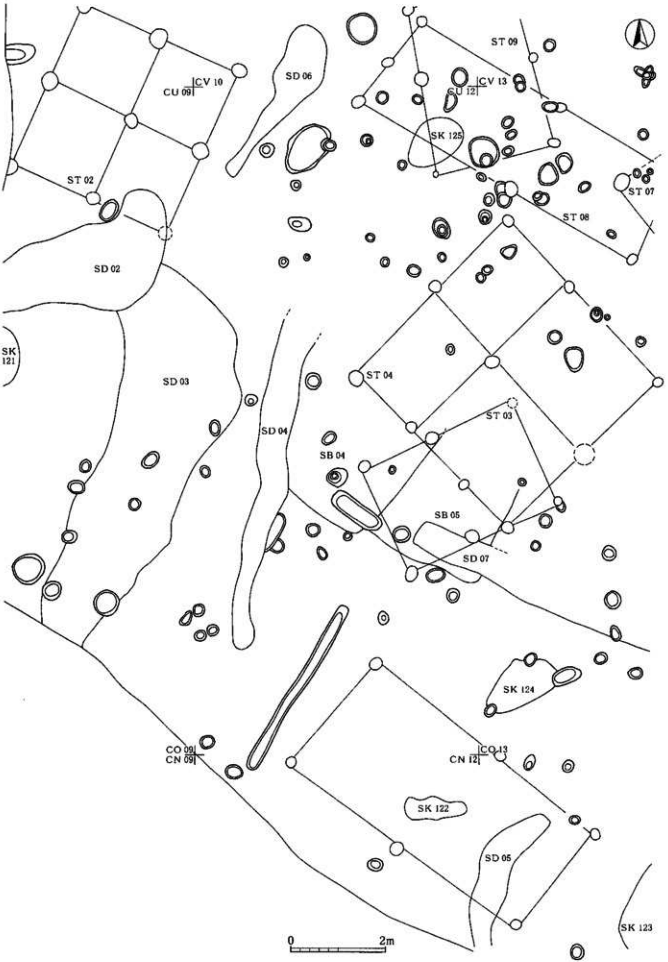
図版58　周辺ピット図24



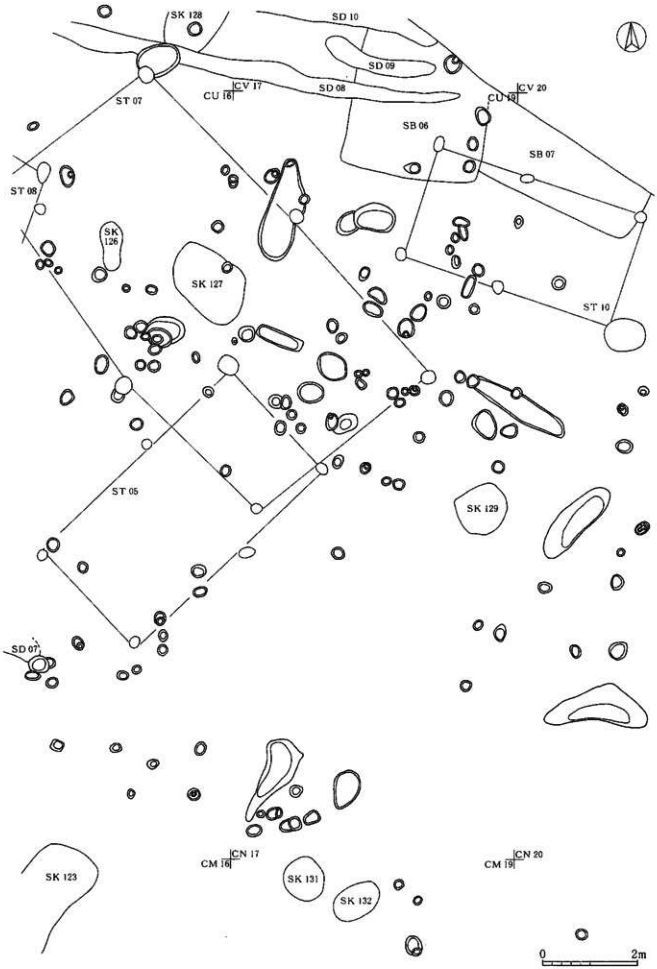
図版59　周辺ピット図25



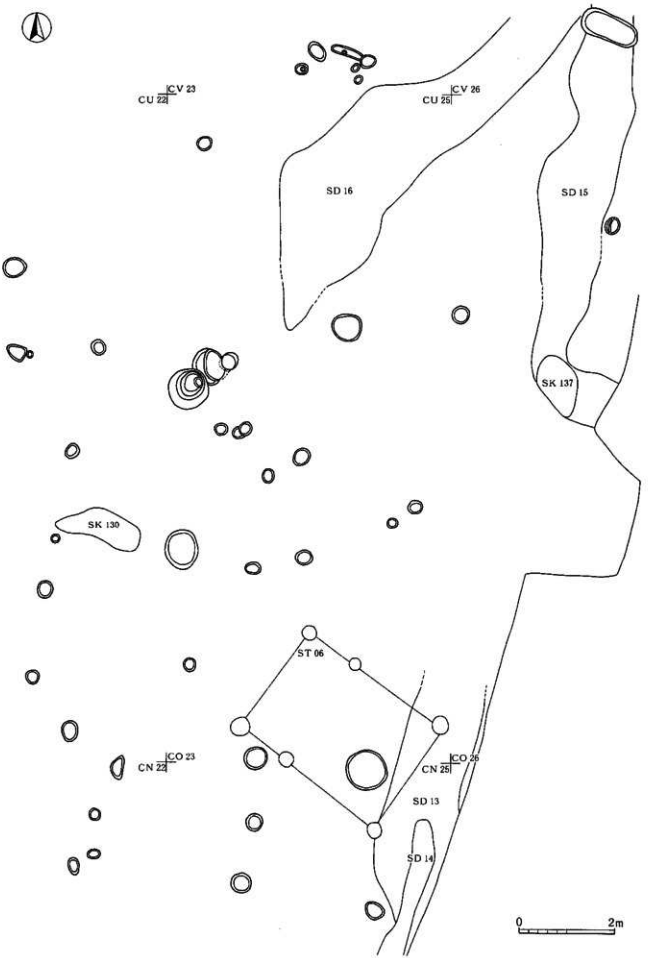
図版60　周辺ピット図26



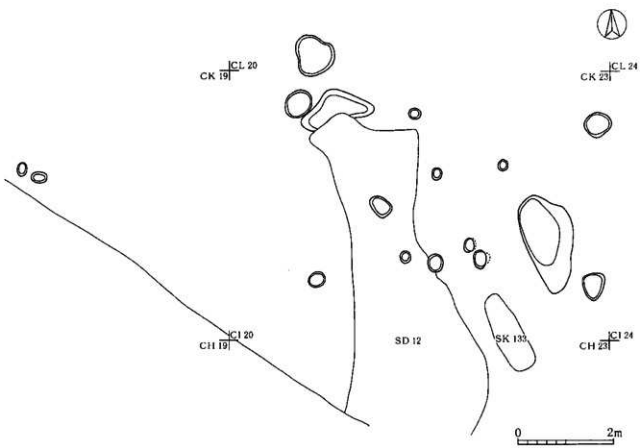
図版61　周辺ピット図27



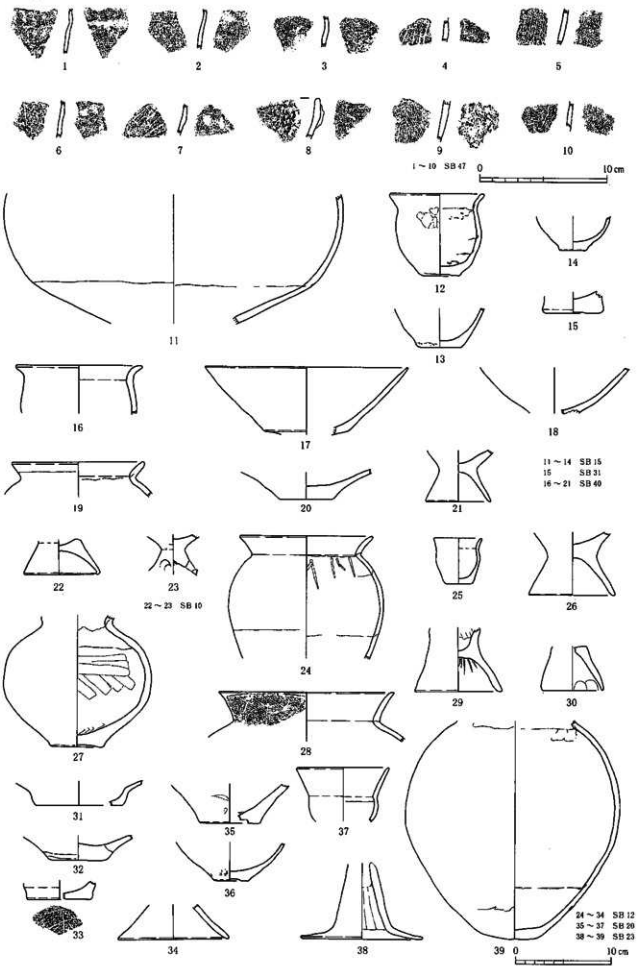
図版62　周辺ピット図28



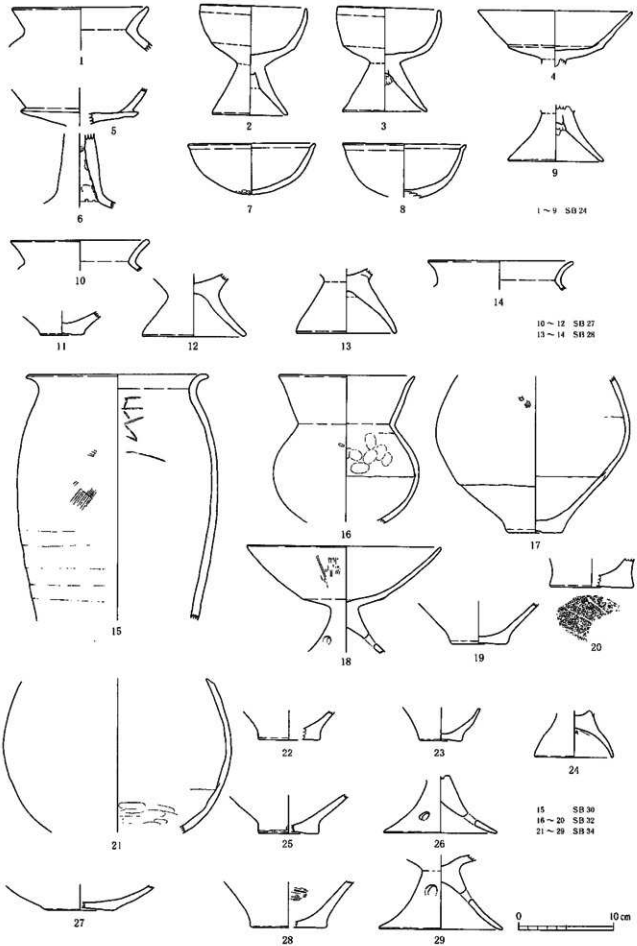
図版63　周辺ピット図29



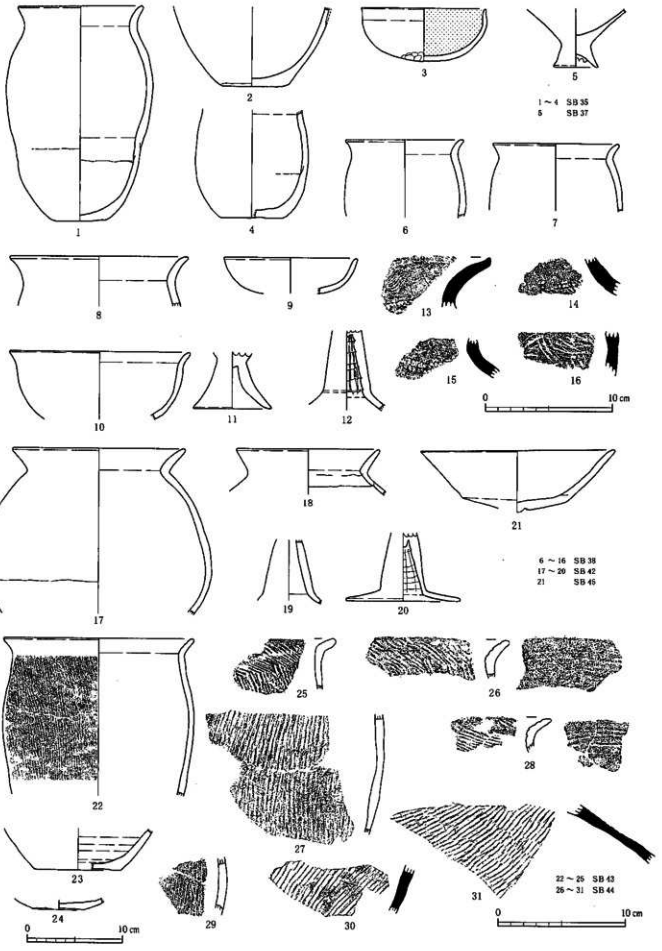
図版64　周辺ピット図30


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1～10 SB47
0
10cm
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
11～14 SB15
15 SB31
16～21 SB40
22
23
22～23 SB10
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
24～34 SB12
35～37 SB20
38～39 SB23

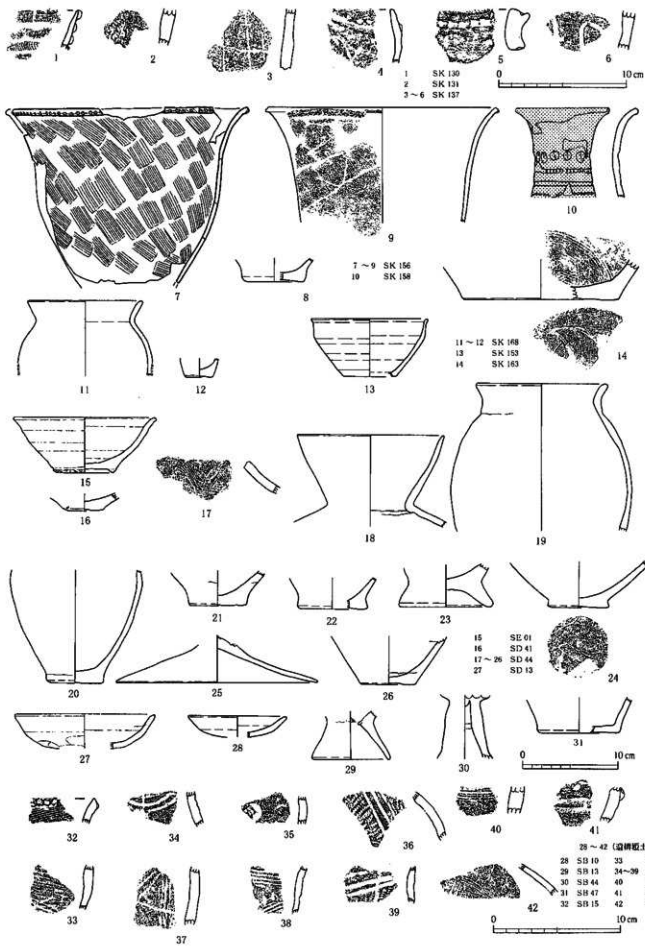
図版65 SB出土 土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
1～9 SB24
10
11
12
13
14
10～12 SB27
13～14 SB28
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
15 SB30
16～20 SB32
21～29 SB34
25
26
27
28
29
0
10cm

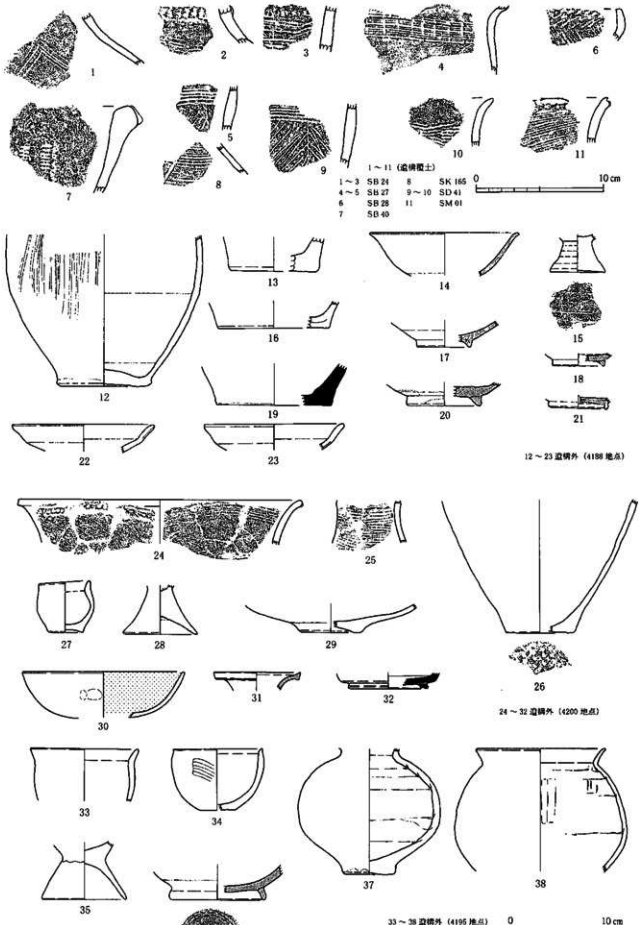
図版66 SB出土 土器


1
2
3
4
5
1～4 SB35
5 SB37
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
10cm
17
18
19
20
21
6～16 SB38
17～20 SB42
21 SB46
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
22～25 SB43
26～31 SB44
0
10cm

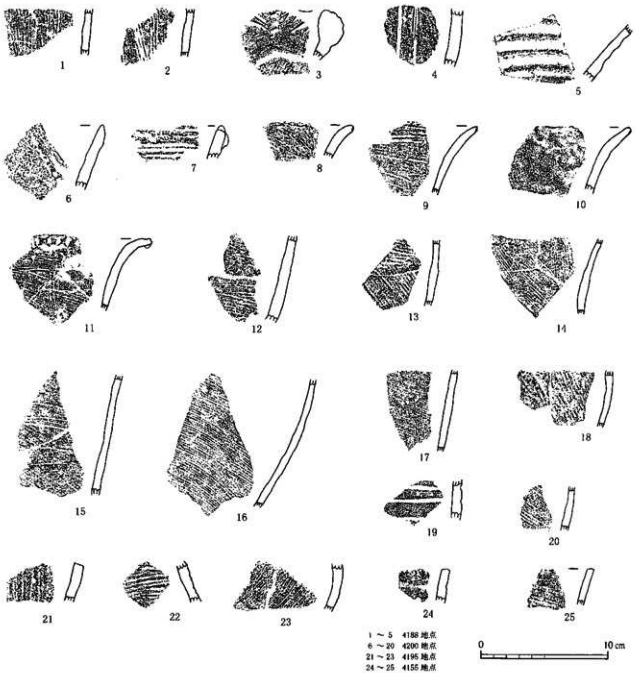
図版67　SB出土　土器



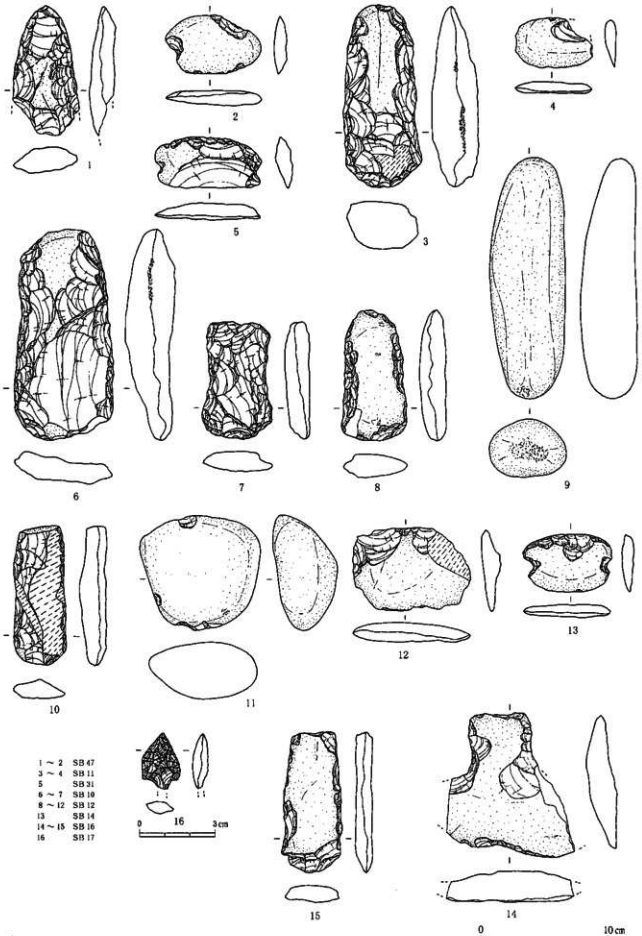
図版68　SK・SE・SD・遺構覆土出土　土器



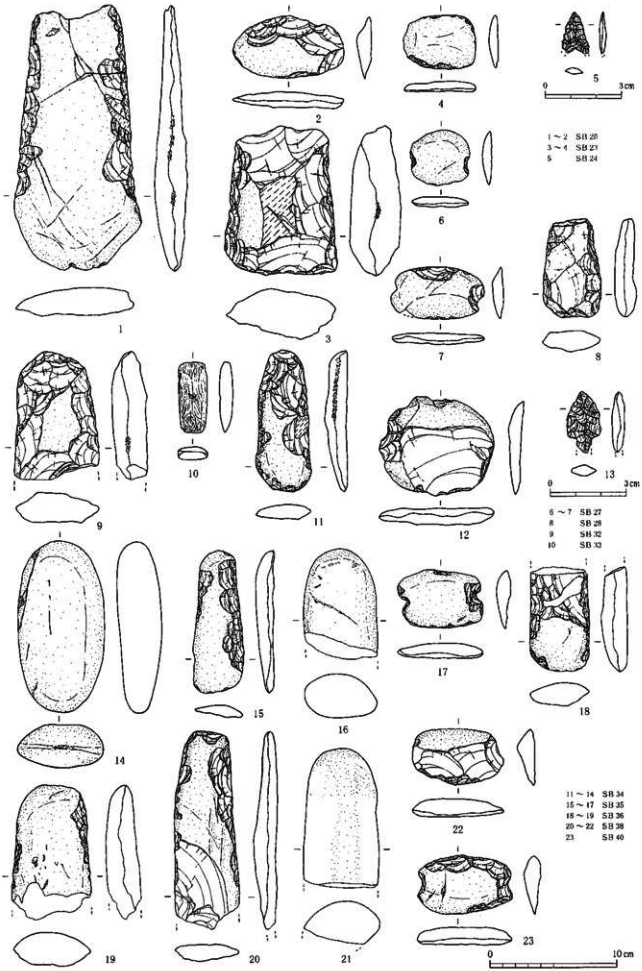
図版69　遺構覆土・遺構外出土　土器



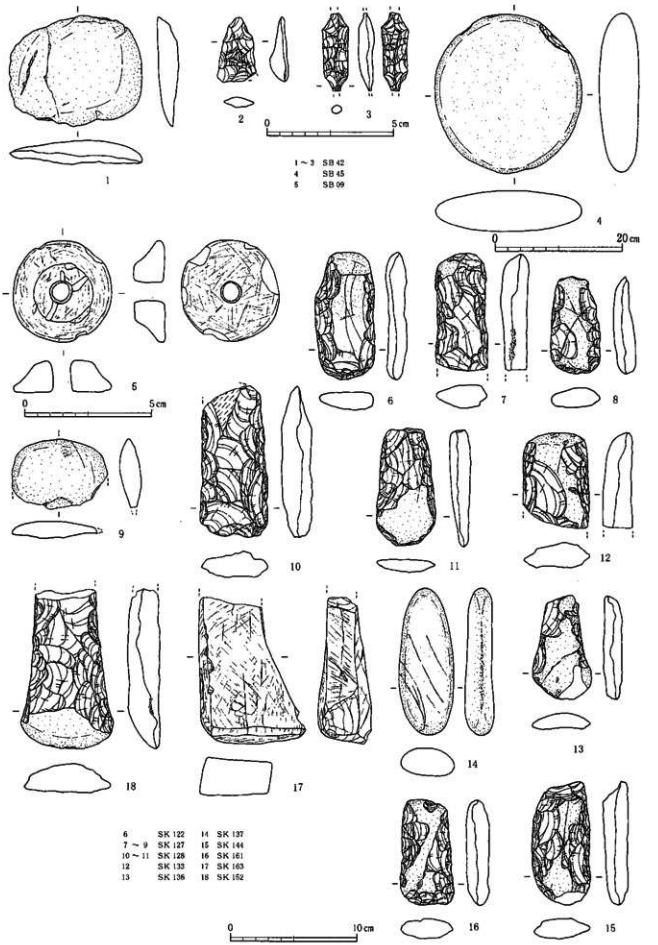
図版70　遺構外出土　土器


1 ～ 2 SB 47
3 ～ 4 SB 11
5 SB 31
6 ～ 7 SB 10
8 ～ 12 SB 12
13 SB 14
14 ～ 15 SB 16
16 SB 17
0 16 3cm
0 10cm

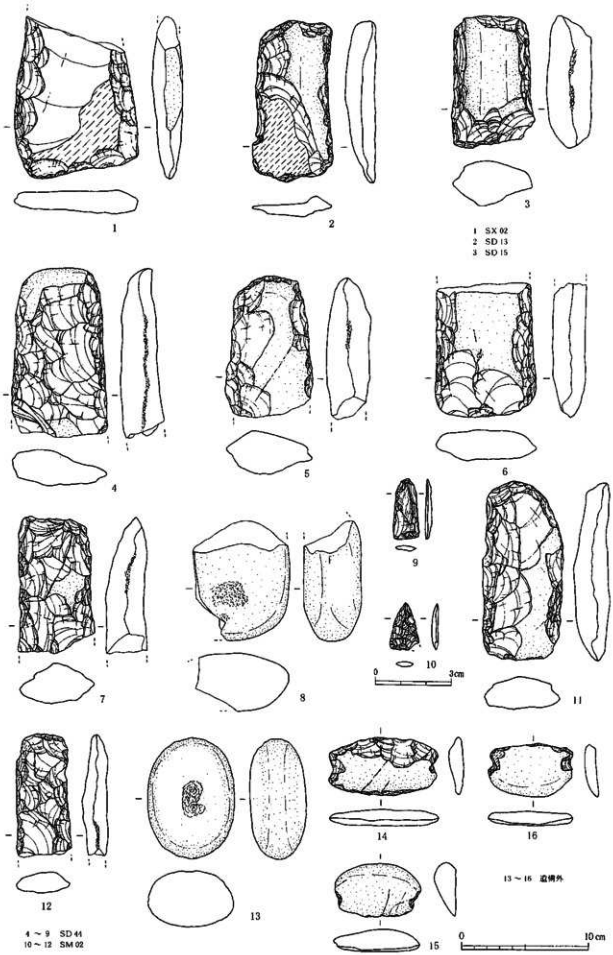
図版71 SB出土 石器


1
2
3
4
5
0 3cm
1～2 SB 20
3～4 SB 27
5 SB 24
6
7
8
9
10
11
12
13
0 3cm
6～7 SB 27
8 SB 28
9 SB 32
10 SB 33
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
11～14 SB 34
15～17 SB 35
18～19 SB 36
20～22 SB 38
23 SB 40
0 10cm

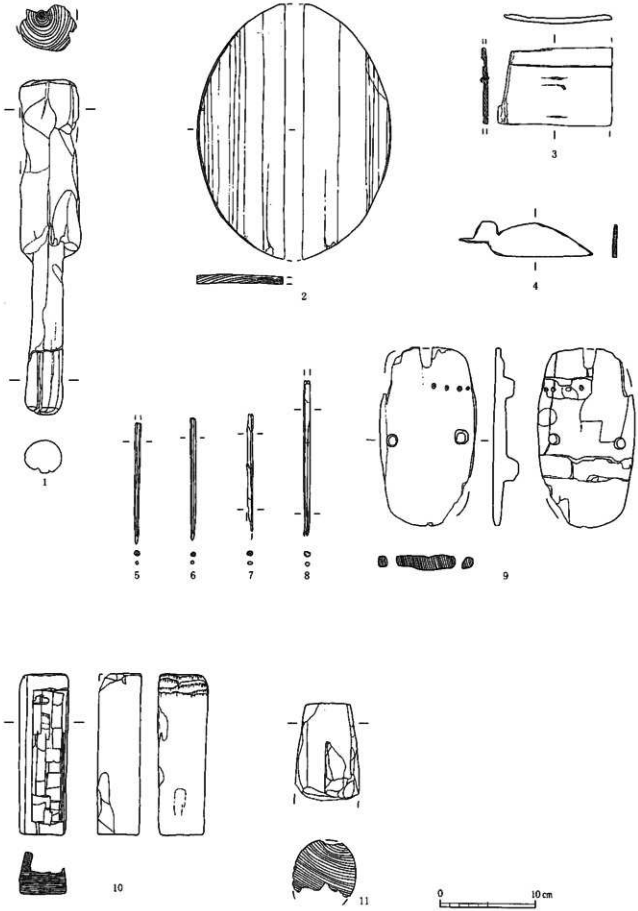
図版72　SB出土　石器



図版73　SB・SK出土　石器



図版74　SX・SD・SM・遺構外出土　石器



図版75　SE01出土　木製品

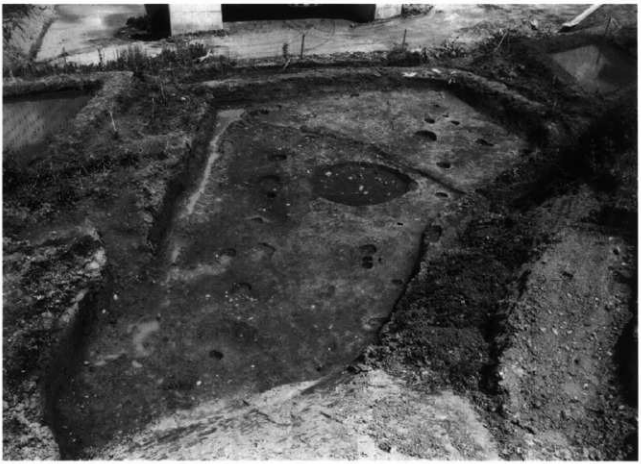
調査前風景

4188地点（南側）全景

図版２

4188地点（北側）全景

4200地点　全景



4192地点　全景

4160地点（北側）全景

図版4

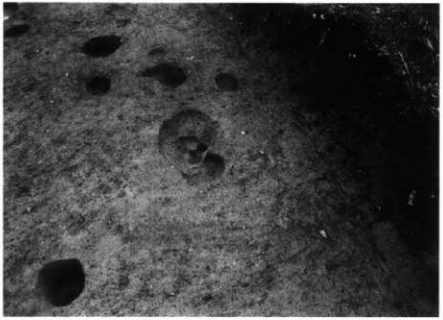
4160地点（南側）全景

4195地点　全景

4155地点（南側）

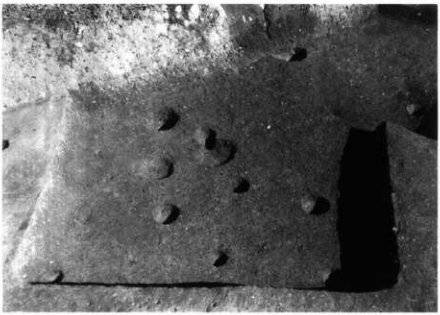
4155地点
全景

図版6

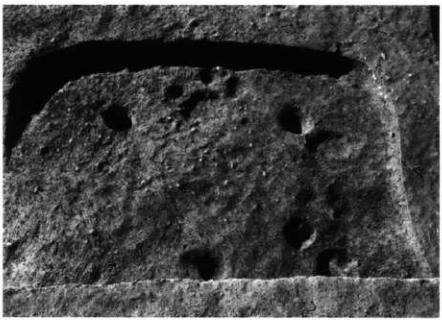


SB26

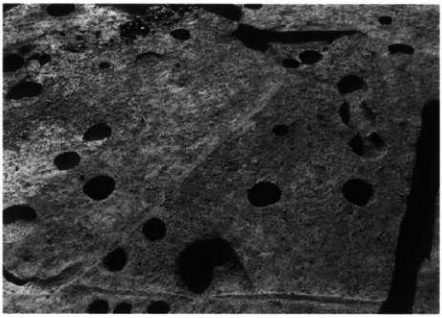
SB47



SB11



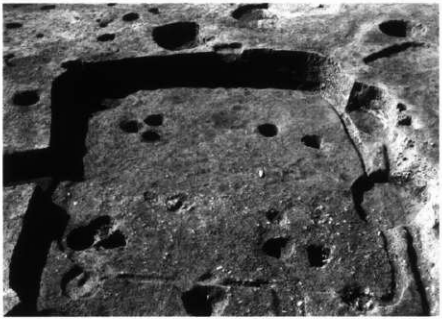
SB15



SB19

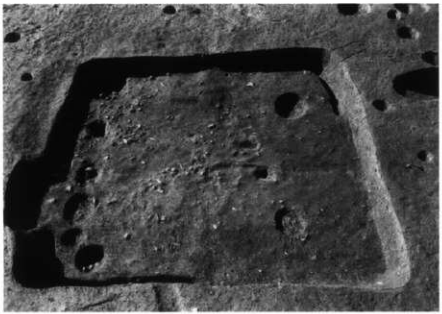
SB31

図版 8

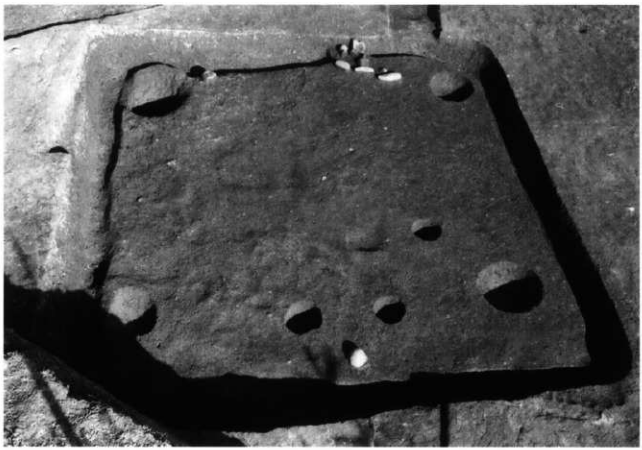


SB40

SB10



SB16

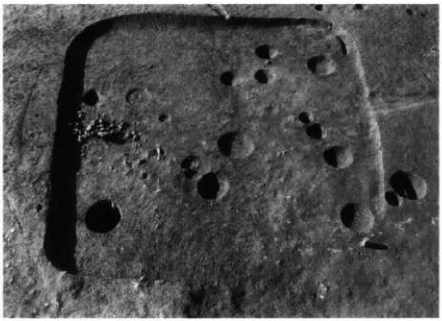


SB12

遺物出土状況

遺物出土状況

図版10



SB20

SB23

SB27

SB24

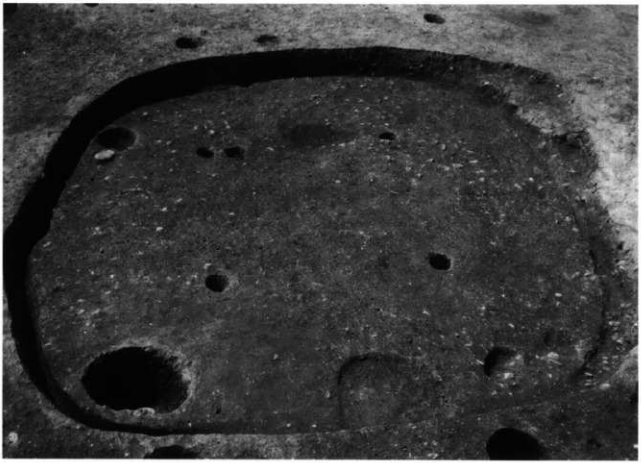
ピット内遺物出土状況

図版12

SB28

SB30

SB35



SB32

遺物出土状況

図版14

SB34

遺物出土状況

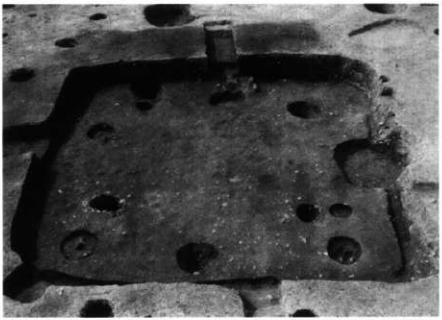
入口部

SB36

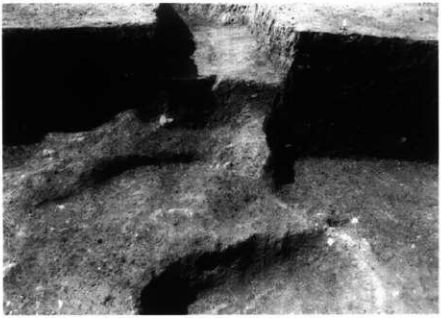
SB37

SB39

図版16



SB38



SB38　カマド

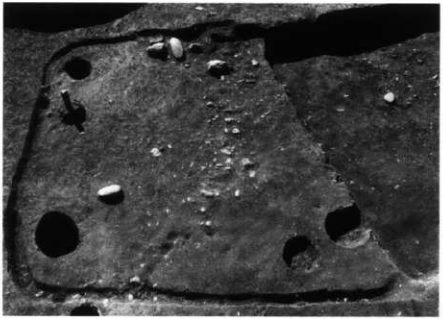
SB42

SB45

SB46

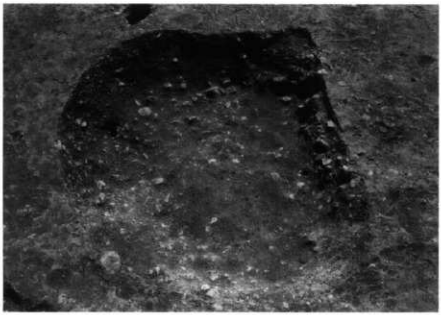
SB44

図版18

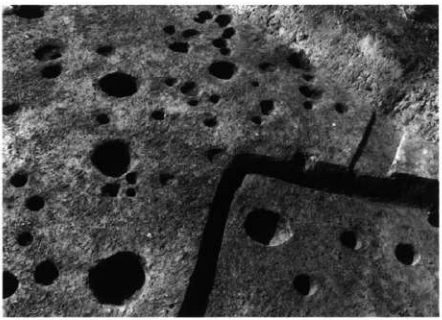


SB43

SB43　カマド



SB09

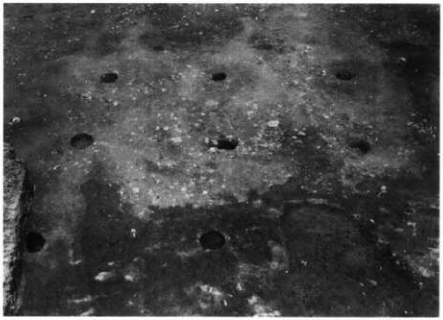


ST18

ST22

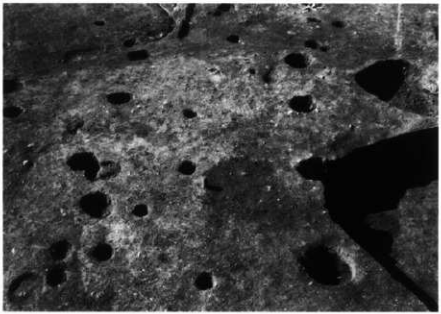
ST24

図版20



ST02

ST13~15

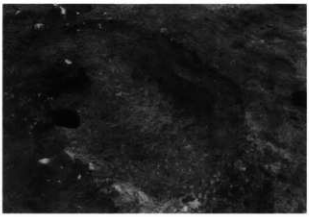


ST23

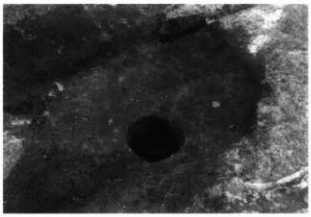
柱穴群（4188地点）

柱穴群（4195地点）

図版22



SK127

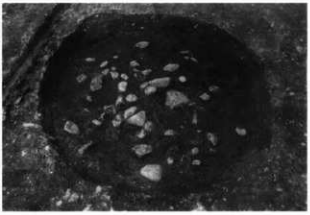


SK128

SK137

SK156

SK158



SK160

SK163

SK168

SE01

木製遺物
出土状況

礫出土状況

図版24

SD44

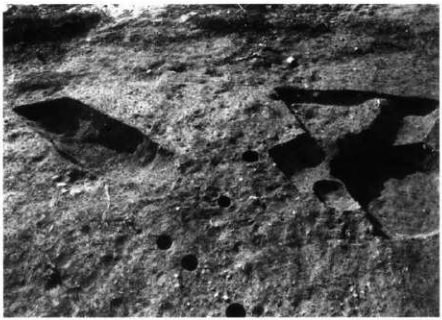
SD44　遺物出土状況

SD41

SD08・10

SD13

図版26



SM01

SM02

DL.07P1（4160地点）
遺物出土状況

重機作業風景

委託基準点測量

発掘調査風景

遺構外（4188地点）

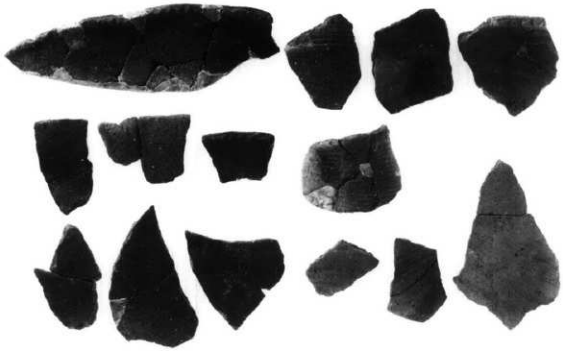
SK156

SK158

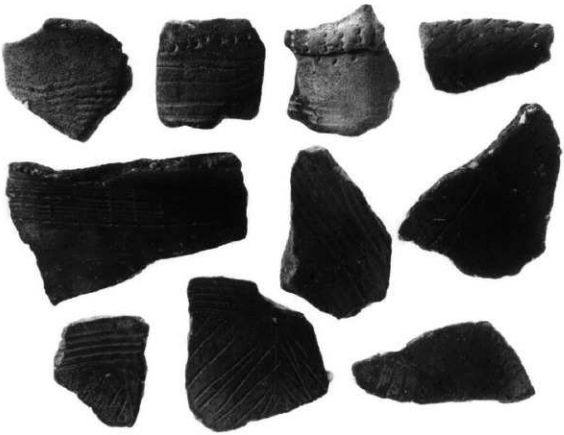
SB15

SD44

SD44



遺構外（4200地点）



遺構外（4160地点）

SB12

SB23

SB24

SB24

SB24

SB32

SB32

SB32

SB30

SB34

SB35

SB42

SB09

SB45

DL07P 1

SB44

遺跡内出土石器

SE01（横槌）

SE01（曲物底板）

SE01（鳥形）

SE01（曲物側板）

SE01（箸）

SE01（下駄）

SE01（用途不明品）

報告書抄録

ふりがな	つきのきいせき
書名	月の木遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	坂井勇雄
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 TEL0265-22-4511
発行年月日	西暦2009年3月6日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
月の木遺跡	飯田市川路	20205	35° 31′ 48″	137° 51′ 59″	平成18年 5月23日 ～ 平成19年 11月7日	6,900	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
月の木遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世 近世	竪穴住居址 掘建柱建物址 土坑 井戸址 溝址 周溝墓	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 陶磁器 木製品 石器	古墳時代前期・中期の集落、中世（12～13世紀）の集落を確認

要約	縄文時代から近世にかけての遺構が確認された複合遺跡であり、飯田市内では調査例が少ない古墳時代前期、中世（12～13世紀）の集落が確認された。

月の木遺跡

2009年3月6日　発行

編集・発行　長野県飯田市大久保2534

飯田市教育委員会

印　　刷　杉本印刷株式会社